



令和元年度指定

地域との協働による高等学校教育改革推進事業
グローバル型 生徒課題研究成果資料集・第2年次



令和3年3月

昭和女子大学附属昭和高等学校

～ はじめに ～

本校の地域協働活動

本校のグローバル人材育成プログラムは「Think global, Act local」をモットーに、様々な課題を世界規模で考え、地域規模で実践していく人材育成を目指す活動である。本事業を通じて育成するグローバル人材像・人物像は以下の2つである。

- ① SDGs と都市型課題への関わりを軸に、グローバルな視点とローカルな視点を備えた世の光となれるグローバル人材
- ② 他者との協働を通じて、主体的に課題解決に向かう責任感と意欲あふれる女性

「世の光となろう」は本校の学園目標でもあり、本校でグローバルな視点を育むうえで欠かせない視点である。この人材育成のために、「考える力・見つける力・つなげる力」など6つのスキルと「自己の確立・国際的な視野」などの5つの行動目標を設定し、その育成を通じて、市民意識と奉仕精神を育てていくのが本校の地域協働連携事業である。本校の地域連携は、高校生が地域で課題を発見し、その解決方法を地域と協働で考案していくサービスラーニング、グローバルなテーマで海外研修や企業訪問を行い、課題解決力をつける LABO 研究の2つの柱からなる。その特長は、世田谷区が地元・故郷だという生徒が非常に少ない点である。多くは区外に住んでおり、地元意識を持つ生徒が非常に少ない。学校のある地域の住民と、いかに強固な協働体制をつくるかが課題である。指定2年目は、新型インフルエンザ感染拡大という未曾有の困難が生じたこともあり、地域連携活動の改善を図った。具体的には、地域コンソーシアムと学校との結びつき、および地域と学校の連携体制を再定義し、地域協働学習コーディネーターと管理機関との結びつきの強化や、コーディネーター・管理機関を軸としたコンソーシアムの役割分担の明確化などを再構築した。学校活動を一方的に依頼する形での協働ではなく、地域と学校が日常的に協働する関係を構築できるように管理機関・世田谷区・産業振興公社などとの協力のもと、関係構築・再編をはかった。

本校のプログラム・コンソーシアム構築の取り組みについては、文科省の指定が終了したのちも継続的に運用できるようにすることが求められており、また、その普及も図らねばならない。とりわけ本校は、都市にある私立高校としては数少ない指定校である。取り組みだけでなく、実施上の課題とその改善などもふくめてカリキュラム開発をまとめ、地域連携推進の先駆的な事例となるよう開発を進めたい。

グローバル推進委員長 勝間田秀紀

令和元年度指定

地域との協働による高等学校教育改革推進事業

グローバル型 生徒課題研究成果資料集・第2年次

研究開発名：

「都市型社会課題への発信力を育成するクロスサービスラーニングプログラム」

～ 目 次 ～

1 - 研究開発概要	1
2 - 事業実施コンソーシアム	4
3 - グローバルプログラム（1）： LABO 活動	8
4 - グローバルプログラム（2）： SDGs キャリア講演・模擬国連	50
5 - ローカルプログラム： サービスラーニング	61
6 - コンソーシアム運営協議会議事録	76
7 - 今年度の成果と課題	83

1 - 研究開発概要

1-1 研究開発構想名

都市型社会課題への発信力を育成するクロスサービスラーニングプログラム

1-2 研究概要

本校では「世の光となろう」「Think global, Act local」をモットーに、世界の現代的な課題を見出し、解決策を探り、地域住民と一緒に行動できる「グローバルな人材」の育成をめざしてきた。本事業では、グローバル人材像を①「世界的なSDGsの取り組みと都市型社会が抱える現代的課題に主体的に関わり、グローバルな視野でローカル活動を行える「世の光となるグローバル」人材と、②「他者と協働することで、チームで課題解決に取り組む責任感と意欲あふれる」人材と定義し、アカデミックスキルトレーニングとして、地域の魅力や課題を見出す「世田谷研究（世田研）」、選択制国内外研修旅行の事前・事後調査学習「グローバルサーチ」の2プログラム、段階的に進行する「LABO 研究」選抜制、「サービスラーニング」、「キャリアビジョン」の3プログラムを通じて、持続可能な共生社会の実現に向けた行動計画を提案できるグローバルな人材育成をめざすことを目標とした。

地域型探究学習プログラム「LABO 研究」と「サービスラーニング」を軸に置き、地域活動やボランティア参加、企業や商店街での活動、政策提言などに実際に取り組み、世田谷区が抱える現代的課題や、多文化共生など地球規模の課題に関して学び解決策を探っていく。

「LABO 研究」は海外での様々な体験を通して、自分に何ができるかを考えるグローバル・プロジェクト、「サービスラーニング」は地域で課題を発見し、解決策に取り組むローカル・プロジェクトである。

生徒は「LABO 研究」「サービスラーニング」のどちらかを選択し、探究活動に取り組む。

ローカルとグローバルの2つの視点を身につけることで、グローバルな視点から地域課題を捉え、解決策を考え、チームで実践できる人材を育成するのが本事業の構想である。

地域課題解決に必要な知見や方法論を学び、住民の一員として地域の課題を捉える「ローカルな視座」と、海外での体験などを通してSDGsに関する理解を深め、視野を世界に広げる「グローバルな視座」を育んでいく。

地域課題解決型探究学習にグローバルとローカルの視座を交錯させながら考え行動する。このクロス化で広く深い視野をもった実践的な学びを構築し、グローバルな視点で課題解決の実践に取り組むことができる人材育成につなげる。

さらに、3年生に「キャリアビジョン」の授業を設定し、「探究」での学びを活かして将来像を描かせるという、3年間の体系的なカリキュラムを構築して生涯学び続け、主体性をもって「世の光となろう」とする人材を育成する探究学習プログラムを実践していく。

b. グローバルイシュープログラム (SDGs キャリア講演)

世界規模の課題に関する自分の意見をまとめる機会を設けてグローバルな視野を育み、将来リーダーとなる課題解決力やキャリアデザインなどを身につけるために、SDGs を主テーマとするキャリアや諸課題に関する講演会を実施した。

● 今年度の活動

日時	テーマ・講師
11月24日	CM 炎上から見るジェンダーバイアス 白河桃子氏 少子化ジャーナリスト・昭和女子大学客員教授
12月14日	プレゼンテーションの方法 佐々木順子氏 安川電機/三井住友信託銀行取締役 元マイクロソフト執行役
2月13日 3月13日	国境なき医師団「ワークショップ：現役高校生と考える、国際人道援助」 国際人道援助に挑戦する理由 村田慎二郎 事務局長 看護師が語る紛争地のリアル。自分だったかもしれない世界 白川優子 看護師/リクルーター

C. 昭和キャリアビジョン

- a. 3年生で「総合的な探究の時間」を1時間開設した。これまでの体験と学びをまとめ、自分の将来の生き方を思い描き、到達するまでのキャリアステップをまとめた。2020年度は先行して実施。次年度のグローバル1期生から本格的に実施する。

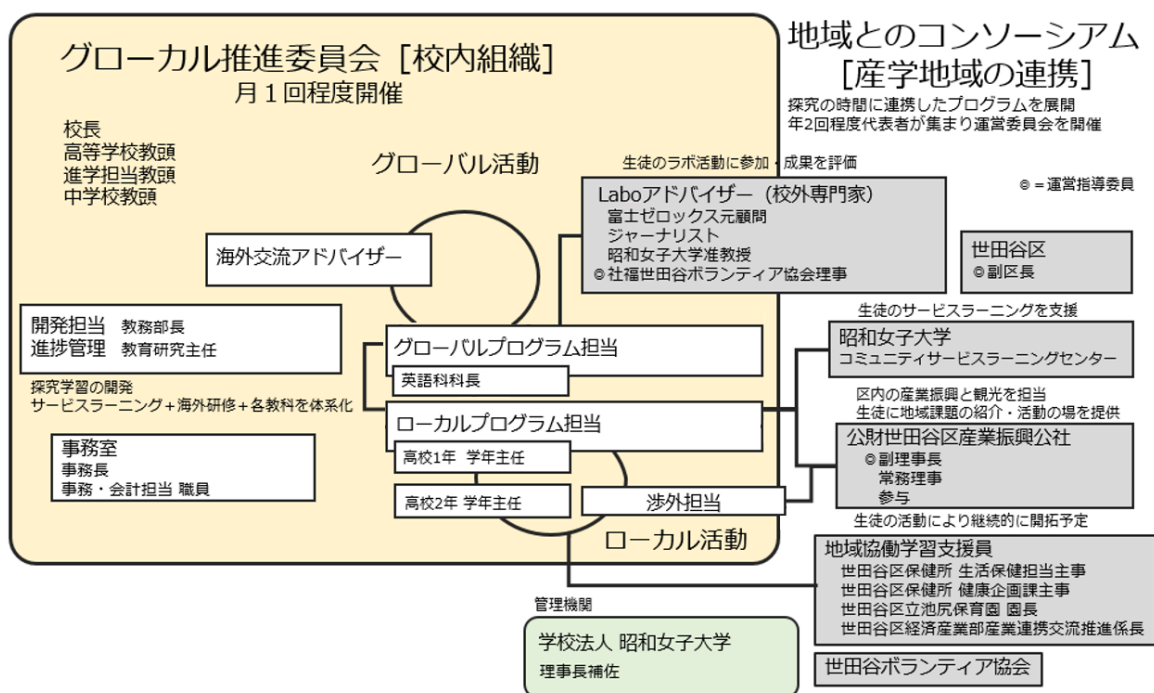
② 成果の普及方法・実績

- a. 11月22日・・・オンライン文化祭で、LABO 研究の成果報告を配信した。協力団体・グローバル指定校・アソシエイト校に通知して視聴を依頼した。
- b. 令和3年1月9日・・・SGH・グローバル等カンボジア合同研究会（オンライン開催）
- c. 令和3年1月25日・・・文部科学省主催「全国高校生フォーラム」（オンライン発表会に参加）本校は協力校として生徒がBグループの司会を担当した。
- d. 令和3年2月・・・総合的な探究全校発表会 グローカル探究成果発表会・（LABO 部門）
- e. 令和3年2月16日・・・グローバル探究成果発表会（ローカル部門）コンソーシアム関係者、区民を招待しサービスラーニングの成果報告をオンラインで開催した。
- f. 2月18日・・・LABO 研究の全校発表会を実施（地域関係者、研究関係者に通知）
- g. 国境なき医師団のオンライン講演会は大学のネットワークを活用し、全国の高校に公開講座として配信した。
- h. 本校ホームページに本事業特設サイトを用意し取組の様子や記事を公開している。

2 - 事業実施コンソーシアム

2-1 コンソーシアム概要

(1) 概要図



(2) 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
公益財団法人 世田谷区産業振興公社	近藤 賢二 理事長
社会福祉法人 世田谷ボランティア協会	横山 康博 理事長
世田谷区 生活文化部 まちづくり推進係	石井 貴和 係長
世田谷区 経済産業部 産業連携交流推進係	佐藤 智和 係長
三軒茶屋銀座商店街振興組合	飯島 祥夫 理事長
しもきた商店街振興組合	長沼洋一郎 理事

(3) 活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
8月4日	世田谷区産業振興公社小田桐副理事長・ローカル活動打ち合わせ
9月11日	世田谷区産業振興公社・地域指導員人材推薦依頼
9月15日	世田谷区産業振興公社・地域指導員活動打ち合わせ
9月29日	名大前ピースメーカーズ本杉理事長・地域指導員依頼
9月30日	世田谷区 清掃・リサイクル部 庄司課長・地域指導員依頼
9月1日	世田谷区 環境政策部 竹内部長・地域指導員依頼
10月14日	せたがや子育てネット松田理事長・地域指導員依頼
10月15日	生活文化政策部国際課 松田課長・地域指導員依頼
10月27日	世田谷区産業振興公社・生徒 PCR 世田谷区状況調査検討会（教諭・生徒同行）
10月30日	文科省地域協働全国サミット・ZOOM出席
11月20日	世田谷区経済産業部・活動継続について意見交換

2-2 カリキュラム開発専門家、大学教員、地域協働学習実施支援員

(1) 指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付け

分類	氏名	所属・職
カリキュラム開発専門家	會川 恵 志	昭和女子大学附属昭和高等学校
海外交流アドバイザー	—	—
LABO アドバイザー	日 比 谷 武	上智大学 特任教授
〃	伊 藤 純	昭和女子大学 教授
〃	米 倉 雪 子	昭和女子大学 准教授
〃	興 梶 寛	昭和女子大学 特任教授
地域協働学習実施支援員	本 杉 香	明大前商店街振興組合代表・明大前ピースメーカーズ代表
〃	松 田 妙 子	世田谷子育てネット代表理事
〃	松 田 京 子	世田谷区生活文化政策部国際課長
〃	太田和信也	世田谷区清掃・リサイクル部事業課長
〃	竹 内 明 彦	世田谷区環境政策部長・エネルギー振興課

(2) カリキュラム開発等専門家又は海外交流アドバイザーの活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
4月22日	文部科学省に質問：新型コロナウイルス感染拡大による計画変更の手続きについて
4月24日	グローバル会議：①文科省の回答を報告、②今年度の活動について協議
6月16日	LABO 活動の今後について打ち合せ 1年生サービスラーニングの授業を参観
6月23日	世田谷区の担当者と打ち合わせ 「総合的な探究の時間」の説明 連携を視野に入れた活動計画、フィールドワークの代替になる活動などを検討
7月2日	グローバル推進委員会：今後の取り組みについて協議
9月1日	グローバル会議：校長・教頭・グローバル委員長 今後のグローバル型の位置づけと取り組み 「総合的な探究の時間」との関連性を協議
9月10日	グローバル部門会議 進捗状況報告、次年度の総合的な探究の時間の LABO 活動の位置づけを協議
9月15日	世田谷区産業振興公社訪問・会議 公社側出席者：副理事長・事務局長・観光課課長・観光係長 本校が設定した4テーマ（地域活性化街作り・子ども教育・多文化共生グローバル、生物・環境・保健医療・食品など）の活動を支援する団体や部署の紹介を受ける
9月17日	アメリカ姉妹校 Ashley Hall 校の国際部長と次年度の交流についてメールで意見交換
10月1日	海外研修先の情報収集、英語科科長と意見交換 1・2年生「総合探究」の年間予定の確認 各教科が6年間でつけさせたい力を協議。12月に提出後、カリキュラム委員会においてクロスカリキュラム、「総探の時間」を検討、協議する予定
10月5日	E-forum「『総合的な探究の時間』を探究する」(京都大学大学院主催)研修会参加
10月6日	グローバル部門会議出席 三軒茶屋銀座商店街振興組合(副広報部長)と商店街との連携を協議
10月30日	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミット参加
11月12日	大阪女学院高等学校(海外進路担当、Taiwan Education Center 所長)の訪問受け入れ
12月1日	グローバル部門会議出席 LABO 合同集会(各 LABO の活動報告)参観
12月8日	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミット参加

(3) 実施日程・実施内容

地域協働学習支援員の実績・人脈を活用し、区内で活動やヒアリングができる団体を効率的に探した。

日程	内容
10月20日	講演会：太田和信也氏（世田谷区清掃・リサイクル部）
10月20日	講演会：本杉 香氏（明大前商店街振興組合）
10月27日	講演会：竹内明彦氏（世田谷区環境政策部）
10月27日	講演会：小山 恵氏（三軒茶屋銀座商店街振興組合）
11月2日	ヒアリング会：松田妙子氏（せたがや子育てネット）
11月14日	お出かけ広場でボランティア活動（松田妙子氏の紹介）
11月17日	講演会 講師：飯島祥夫（三軒茶屋銀座商店街振興組合）
11月19日	世田谷区社会福祉協議会 ぶらっとホーム世田谷ボランティア（大田和信也氏の紹介）
12月12日	きぬたまあそび村・きぬたまの家を訪問（松田妙子氏の紹介）
12月15日	仁慈保幼園訪問とインタビュー（松田妙子氏の紹介）
12月16日	講演会：松田京子氏（世田谷区生活文化政策部国際課）
12月19日	せたがやこどもフードパントリーでのボランティア（松田妙子氏の紹介）
12月19日	世田谷プレーパーク見学・利用者へのインタビュー（松田妙子氏の紹介）
12月22日	せたがや子育てネット（オンラインインタビュー）
1月12日	NPO 法人みなしご救助隊へ犬猫譲渡に関するオンラインヒアリング会
1月26日	講演会：三菱製紙機能食品事業部 川久保貴弘氏（オンライン）

2-3 運営指導委員および運営指導委員会

(1) 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
岡田 篤	世田谷区 副区長	行政機関
小田桐康文	公益財団法人世田谷産業振興公社 副理事長	協力機関
興 梶 寛	社会福祉法人世田谷ボランティア協会 理事 昭和女子大学 特任教授	学識経験者
真下 峯子	昭和女子大学学長 昭和女子大学附属昭和高等学校 校長	学校経営責任者
保坂 邦夫	学校法人昭和女子大学 理事長補佐	管理機関

(2) 活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
7月28日	新たな地域協働学習実施支援員についての打ち合わせ
9月15日	後期活動の確認、協力機関・新たな地域協働学習実施支援員について確認
令和3年1月25日	運営指導委員会（オンライン会合）

3 - グローバルプログラム(1)

LABO 活動 - グローバルなキャリアデザインに関する課題解決プロジェクト

3-1 LABO 研究

(1) 目的

グローバルな視点で社会参加活動の重要性を学び、将来グローバルリーダーとして活躍できる課題解決力、コミュニケーション力、キャリアデザイン力などの素養を身につける。活動で育んだ素養や視野、体験を、地域課題研究「サービスマーケティング」と結びつけ、活動に深まりと広がりをもたせる。

(2) 概要

高校生 40 名（1・2 年生各 20 名程度）を 4 つの小グループ（LABO）に分け、国際的な素養とキャリアデザイン力を育成するプロジェクト研究に取り組む。

企業や大学から講師を招聘して日常的に生徒指導を行い、夏季海外研修旅行にも同行するため、非常に深い学びにつながっている。各 LABO とテーマは以下の通り。

LABO1 次世代を担う私たちが考えるキャリアデザイン

指導者 上智大学 日比谷 武 特任教授 海外研修先：アメリカ・チャールストン

グローバルに活躍するために必要なキャリアデザインとは何かを研究する。
アメリカ南部のチャールストンと交流し、現地の大学生と共同で研究を進めた。

LABO2 日本人のジェンダーギャップの研究

指導者 昭和女子大学 伊藤 純 教授 研修先：フィンランド・ヘルシンキ

男女の社会的な性差であるジェンダーギャップについて研究する。
日本の女性を取り巻く環境を調査し、個々にテーマを設定して研究を進めた。

LABO3 海外で活躍する日本人リーダーの研究

指導：昭和女子大学 米倉雪子 准教授 研修先：カンボジア プノンベン、シェムリアップ

グローバルに活躍するリーダーに必要な資質とは何か、
カンボジアの日本人起業家、現地の高校生たちとの交流を通じて知識や情報を深めた。

LABO4 多文化共生とボランティアの可能性

指導者：昭和女子大学 興梠 寛 特任教授 研修先：タイ・チェンライ

多文化共生社会とボランティアの可能性を、SDGs と関連づけながら考察した。
研修予定地タイの抱える課題と支援のあり方について個々にテーマを設定して研究を進めた。

LABO1 次世代を担う私たちが考えるキャリアデザイン

指導者：上智大学 日比谷 武 特任教授

(1) 年間指導計画・実施方法

時期	活動項目	内容	
学習内容の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ・探究学習の手法を学習する ・情報を適切に収集する力を養う ・テーマ設定のための背景知識の収集 ・フィールドワークの計画 	<ul style="list-style-type: none"> ・アカデミックスキルトレーニング (AST) <ul style="list-style-type: none"> ○探究と調べ学習の違い ○ロジカルシンキングとは (AST1) ○思考フレーム (AST2) ○情報収集の仕方 (AST3) メディアカードの活用方法指導 ・背景知識の整理 <ul style="list-style-type: none"> ○キーワード探しとマインドマップ作成 (AST4) ○適切なフィールドワーク方法論 (AST5) ・フィールドワーク計画 	
	夏季 夏季海外研修代替オンライン交流 (交流先：チャールストン Ashely Hall 校卒業生(現役大学生))	<ul style="list-style-type: none"> ・フィールドワークの実施 ・フィールドワーク報告 	
	9月～ 11月	<ul style="list-style-type: none"> ・収集した情報や調査結果の分析 ・LABO の研修旅行報告のシェア ・課題の設定 ・先行研究 	<ul style="list-style-type: none"> ・アカデミックスキルトレーニング (AST) <ul style="list-style-type: none"> ○シンキングツールとは (AST6) 研修経験をクロス化させ、自分の研究に反映。 多面的な思考の視野を育成する。 ○課題の設定 (AST7) 課題の設定方法を学習、自分の研究課題を設定し、先行研究をまとめる。
	11月～ 12月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究結果報告 これまでのシンキングツールや情報収集のスキルを活用する実践編として位置づける	これまでの先行研究とフィールドワークによる研究結果をまとめ、校外に共有する。 経験の振り返りと、自己の視野の広がりを確認。 冬期休暇中に自身の経験を振り返られるような研修報告を作成させる。
	1月～ 3月	<ul style="list-style-type: none"> ・一枚企画書の作成 活動の振り返りと今年のまとめ	多様な経験をふまえて、自身の研究課題を再検討し、今年度の活動を1枚企画書にまとめる。 <ul style="list-style-type: none"> ・研究テーマ発表会


(2) 活動の詳細

日比谷 武 先生 勉強会①	
実施日時	2020年6月23日(火)
講師・場所	日比谷 武 先生・昭和女子大学附属昭和高等学校
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度の活動の振り返り(学びと要改善点) ・今年度の抱負と実践計画の発表 ・日比谷先生ご講演 (長期的・多面的・本質的な思考と学びなど) <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>

チャールストン交流会	
実施日時	2020年8月12日(水)
講師・場所	オンライン(Zoom)
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・チャールストン Ashley Hall 校卒業生3名へのインタビューと対談 ・高校でのキャリア教育がどのように進路決定につながったか。 ・海外のキャリア教育と日本のキャリア教育にどのような差があるか。 <div style="text-align: center;">  </div>

日比谷 武先生 勉強会②	
実施日時	2020年9月18日(金)
講師・場所	日比谷 武先生・昭和女子大学附属昭和高等学校
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・研究経過報告 ・卒業生を招いての研究意見交換  

教育実習生交流会	
実施日時	2020年9月19日(土)
講師・場所	昭和女子大学附属昭和高等学校
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習生へのキャリア教育に関するインタビュー ・中高で身につけておくべきことについて

日比谷 武先生 勉強会③	
実施日時	2020年10月26日(月)
講師・場所	伊藤 純先生・昭和女子大学附属昭和高等学校
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・中高生のキャリア教育について ・昭和女子大学社会人メンター制度について ・リーダーシップについて  

富士ゼロックス株式会社訪問	
実施日時	2020年10月30日(金)
講師・場所	富士ゼロックス株式会社
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・時代の移り変わりに合わせたサービスの提供について ・高校で多様な人と会い、視野を広げることの大切さ ・自己肯定感 ・若手女性社員4名の働き方  

日比谷 武先生 勉強会④	
実施日時	2020年11月11日(水)
講師・場所	日比谷 武先生・昭和女子大学附属昭和高等学校
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・研究経過報告 ・日比谷先生講演 (社会での役割、知識と行動、不易流行の理解など)  

駒場東邦高校交流会	
実施日時	2020年12月28日(月)
講師・場所	オンライン(Zoom)
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和女子大学附属中上部と駒場東邦高校におけるキャリア教育の違い (学校行事、生徒会の役割、キャリア教育プログラムなど)

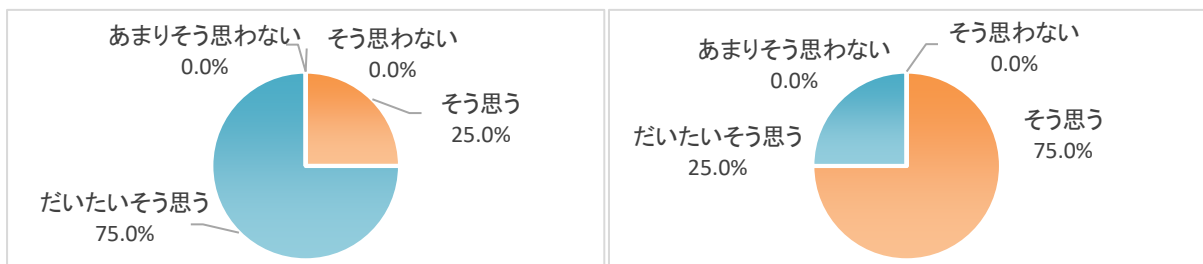
(3) 検証・評価 (成果と課題)

《成果》

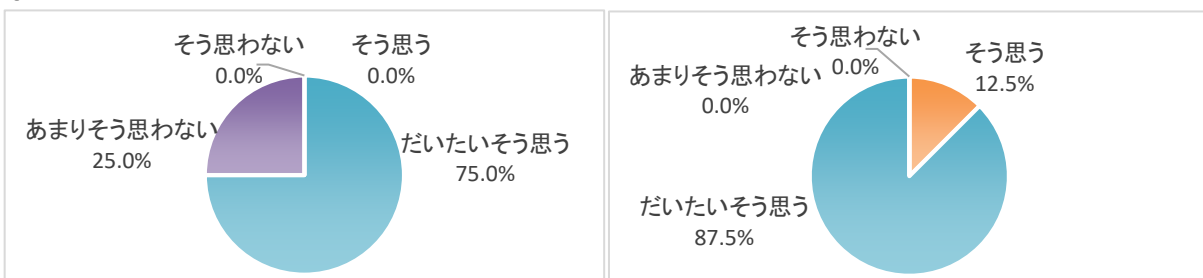
- a. プレアンケートと比較し「協調して物事に取り組むことができる」、「自分の考えと異なる人に対して自分の意見を言える」、「困難に直面しても周りとの協力して問題解決に取り組むことができる」、「収集した情報や自らの考えをまとめて、新たな発想を作り出すことができる」と回答した割合が大きく増加した。
- b. 新型コロナウイルス感染症の影響で海外研修が中止になった際、チャールストンの大学生と交流することを生徒自ら企画し、該当学生との調整も自分たちで実施できた。
- c. プレゼンテーションをする機会が多く、どうすれば相手が理解できるかを考えながら研究発表を構成する力が鍛えられた。
- d. 研究発表を日本語と英語の両方で行い、それぞれの言語による発表の仕方の違いや、伝え方の工夫についても考えることができた。
- e. キャリア教育についてほとんど知識を持たない状態で活動がスタートしたが、事前研究や先行研究の期間が多く取れたため、キャリア教育の理解を深めることができた。
- f. 日比谷先生との勉強会だけでなく、自分たちで進路部教員や教育実習生、昭和女子大学教授などに話を伺う機会を設けるなど、自主性をもって意欲的に活動に取り組むことができた。
- g. 企業訪問や日比谷先生との勉強会において、質問や意見を積極的に出す力が身についた。
- h. 企業訪問や日比谷先生との勉強会の後にお礼状を書くことで、感謝の気持ちを形で表すことができるようになった。
- i. 使用したオンラインミーティングを積極的に活用し、有効的に使用することができた。

《アンケート結果》 (左が活動前、右が活動後)

Q1. 誰とでも協調しながら、物事に取り組むことができる



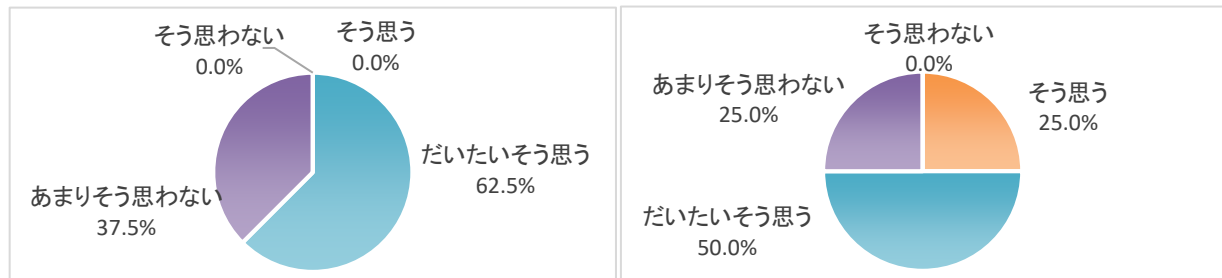
Q2. 必要な情報を的確に収集し、わかりやすいプレゼンテーションができる



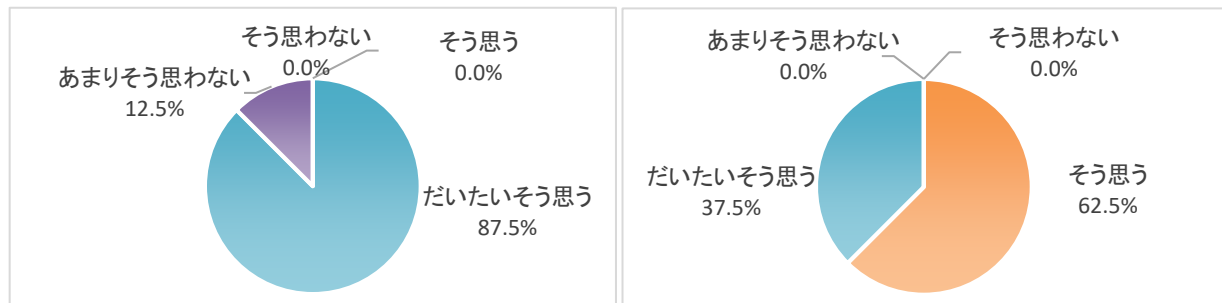
Q3. 自分の考えと異なる人に対して、自分の意見を言える



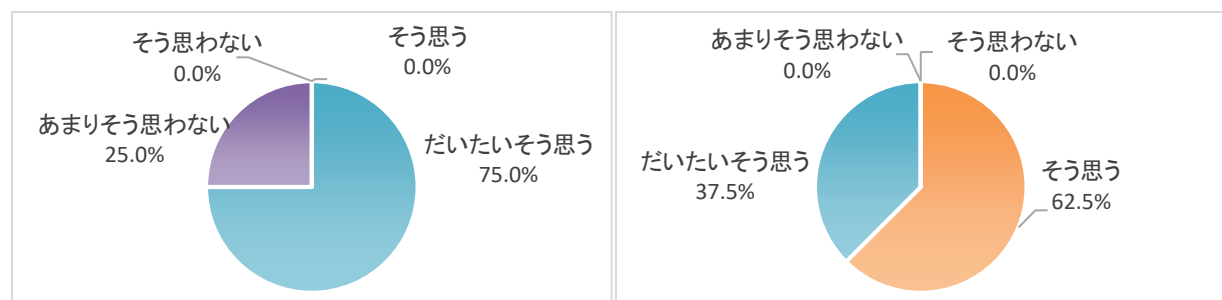
Q4. 考えていることを論理的にまとめて、新たな発想を作り出すことができる



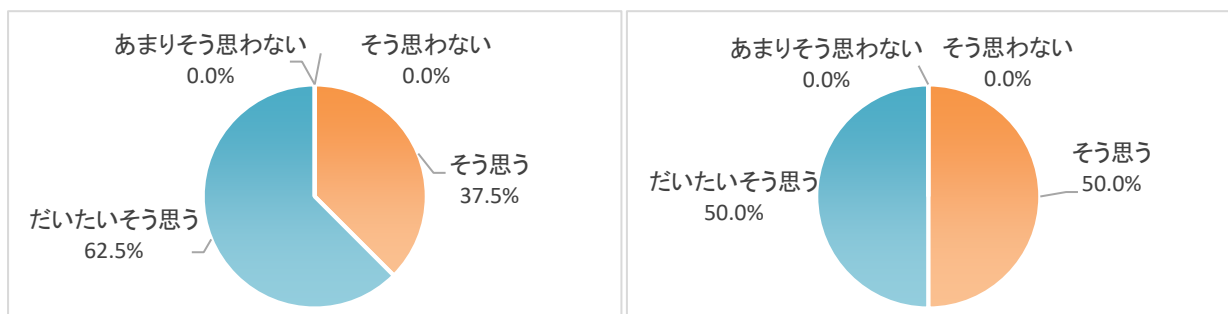
Q5. 困難に直面しても周りと協力して(周りに働きかけながら)問題解決に取り組む



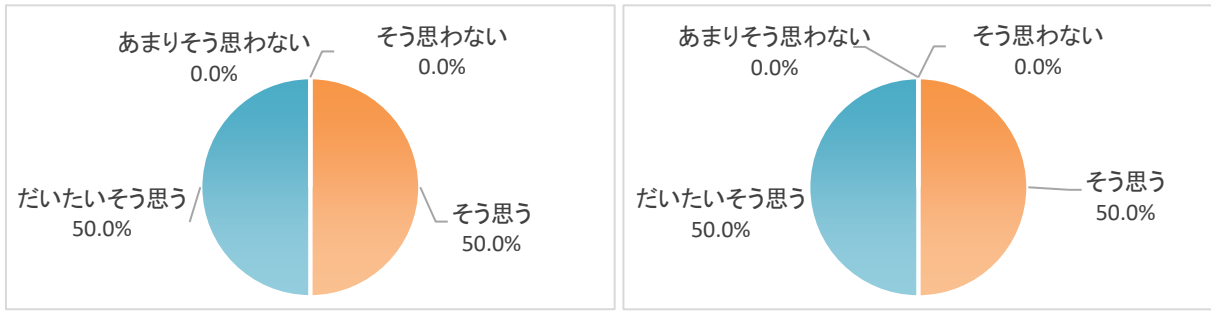
Q6. 収集した情報や自らの考えをまとめて、新たな発想を作り出すことができる



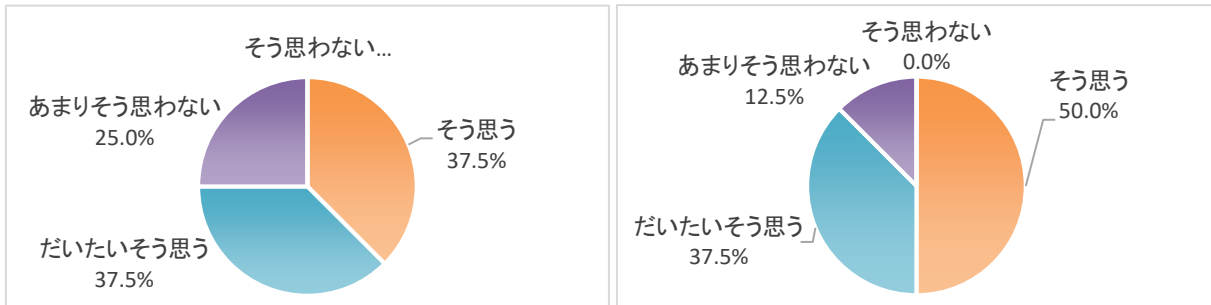
Q7. 情報モラルを理解し、情報機器や SNS を適切に活用できる



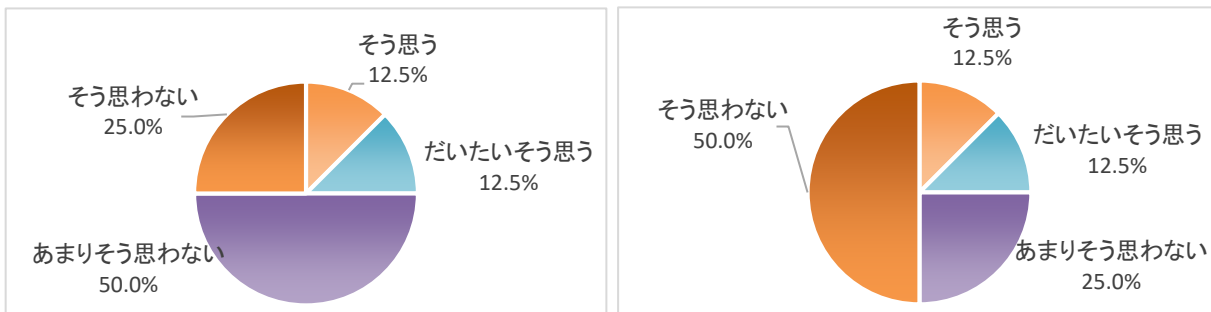
Q8. 世界的な諸問題について、新聞やネットなどを通じて関心を持っている



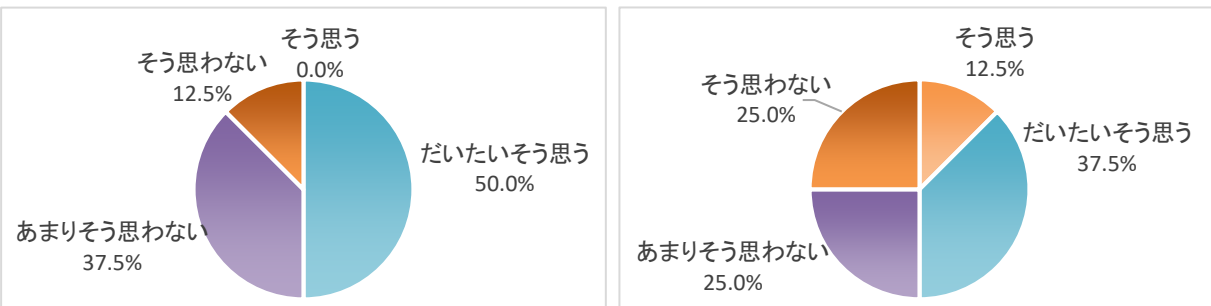
Q9. LABO のフィールドワーク先の国の課題について理解している



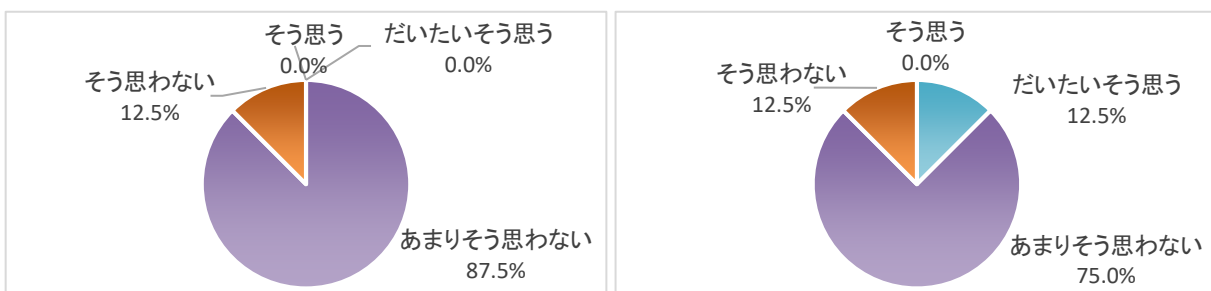
Q10. 自分が今住んでいる地域の行事に参加している (※)



Q11. 自分が今住んでいる地域の課題を理解している



Q12. 世田谷区の抱えている課題について理解している



Q13. 自分の住んでいる地域や世田谷区の課題と質問9の国の課題について関連して考えることができる



《分析》

- ・各項目の中で、協働性を見るものは Q1、3、5 だが、どれも活動前後の伸びが著しく、生徒のスキルアップが見られる。異なる学年混合による活動、外部人材との関わり（今年度は直接の講義などではなくオンラインでの関わりが多かったが）などが起因している。2 年生は学年が上がり、グループを引っ張る立場になることで、こうした協働性やリーダーシップを発揮する機会が多くあり、オンライン講義でも質問なども活発に行っていた。この活動は LABO の根幹となるものであるため、今後もこの形態の活動を多く取り入れていきたい。
- ・探究スキルの項目となる Q2、4、6、7 は肯定的な評価の増加が目立った。特に 2、6 は前期にあった否定的な評価が肯定的評価に変わった。今後はスキルアップの向上実感が、どのような活動に起因するものかなどの「向上実感調査」も行い、さらなるスキルアップを図っていきたい。
- ・数値が減少するなどの動きが見られたのは Q10、11 である。10 のプレアンケートは、前年度（コロナ禍前）の活動内容を念頭に回答している生徒が多く、ポストアンケート時のコロナウイルス感染防止による活動の自粛などで交流活動や海外研修などが実施できなかった影響だと思われる。
- ・活動に関しては 11 や 12 の数値が伸びていない点が重要だと考える。Q8 で自分たちが対象とする研修先の課題には敏感になっているものの、それをどのように活用して地域に還元していくかというアウトプットの側面が弱いといえる。グローバルな課題を、地域を視野に活動していくグローバルなものを見方を養えるよう、コンソーシアムを活用して LABO テーマに即した地域活動を開拓していくとともに、課題研究の方向性を地域課題とリンクさせて、地域に発信・成果の還元を行っていけるようにしたい。

《課題》

- 新型コロナウイルスの影響による休校や海外研修の中止により、活動が予定通りに実施できず、代替案を考え出すことに活動時間の多くを割かれてしまった。
- 全体で集まって研究を進める時間が十分に確保できず、個々の活動が多くなってしまった。
- 年度初めに休校が重なり、今年度から新規で参加した 1 年生が活動について十分に理解を深める機会がないまま LABO 活動を進めることになってしまった。
- 周辺の他校とオンラインで交流したものの、地域との交流や地域への理解については十分に行えているとは言えず、ローカル面についても LABO 活動を結びつけられるよう行えることを考えていきたい。

(4) 生徒の感想

- a. 自分の意見を他の人に伝えること、また伝えるだけでなく、他の意見を取り入れてさらに発展できるようになった。またグループ活動では様々な意見が出るが、共有点を見つけてまとめる必要があることを知った。積極的に意見を出すこと、またコロナ禍でも何ができるのかをプラスに考えることを学んだ。
- b. LABO 企業を訪問し、多くの人と話す機会が増えて、自分の興味以外にも視野が広がった。発表やプレゼンテーションの機会が多く、どうすれば相手が理解できるかなどを考えて伝える力も向上した。
- c. 活動前はキャリア教育など知らなかったが今の教育に必要があることがわかり、どのようなプログラムが適切か考えるようになった。これからはそれを発展させ実用化したい。以前より自分の意見をはっきり持ち、先輩にも伝えられるようになった。これからは自分なりのアイデアを出せるようにしたい。

(5) 全校発表会 プレゼンテーション資料

<p>1</p> <h1 style="text-align: center;"><u>LABO1</u></h1> <p style="text-align: center;">5th M.Ozawa Y.Nitta A.Kameshima T.Tsukagoshi R.Tokuno 4th H.Tsuruta K.Kanke S.Sugimoto</p>	<p>2</p> <h2 style="text-align: center;">Career education that we think</h2>
<p>3</p> <h3>Career Education</h3>  <p>→ your way of life</p>	<p>4</p> <p>Interview to Ms. Watanabe</p> <h3 style="text-align: center;"><u>Career education in Showa</u></h3> 
<p>5</p> <h2 style="text-align: center;">JUNIOR</h2> 	<p>6</p>  <h2 style="text-align: center;"><u>SENIOR</u></h2>

7

Without telling purposes


8

Think and act for oneself

9

Survey to students

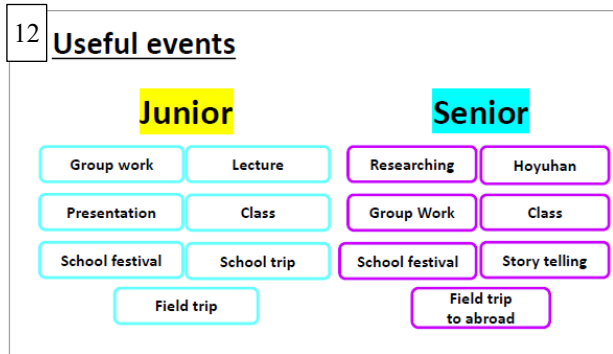
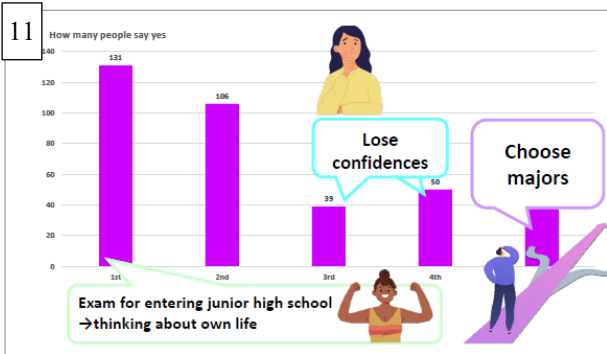
→ Research thoughts of career counseling.



10

1st Questions

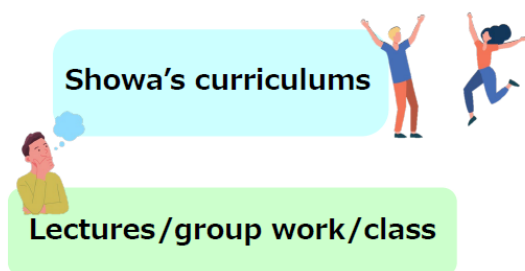
Future Dream



13


Showa's curriculums

Lectures/group work/class



14

Interviewed the Showa practice teachers



15

Kanwa

Investigation activity

Ho-Yu-Han



16

Communication skill

Writing skill



17

Future Image

ZOOM discussion

18

future

Study at university

19

university

Target

Japan

US

20

Free daily life

Act ability

Responsibility

21

Lecture by Ms.Ito

22

Career support system

Career education

Mentor by adult

23

Various types of leadership

24

Understand the goal of the career education

25

Study Meeting

Takeshi Hibiya
Former adviser of Fuji xerox
Sophia University specially appointed professor

action

encounters

knowledge

Relationships with three rule of school lessons

26

Fuji xerox

Meet a variety of people

Look at yourself

Self-affirmation

自己肯定感

27

Why do Japanese have low self-esteem?
(自己肯定感)

28

Japanese culture

29

Meeting with Komaba Toho High School



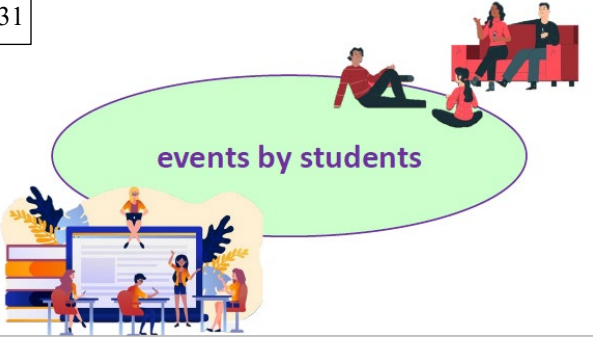
30

Overseas training



31

events by students



32

Company tour

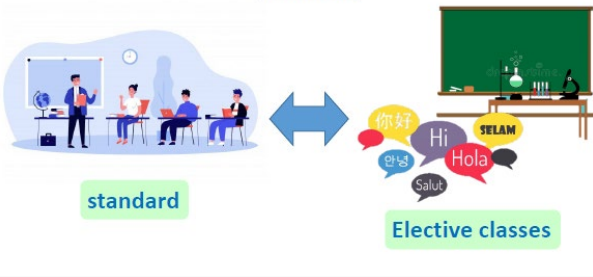


33

classes

standard

Elective classes



34

“Free walk day in school”



Make a group and plan

35

“choose lecture”

Future image by yourself

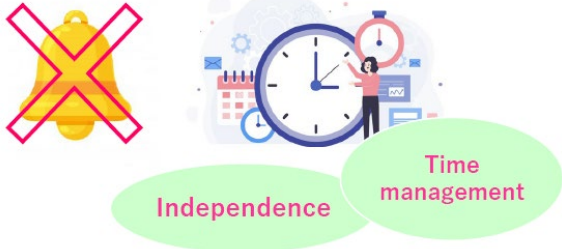


36

“A day without a chime”

Independence

Time management



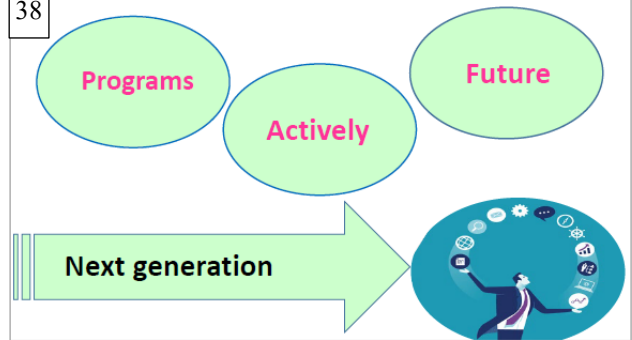
37

“No home leader”

“Committee member workshop”



38



39

Thank you for listening!!



LABO2 日本人のジェンダーギャップの研究



指導者：昭和女子大学 伊藤 純 教授

(1) 年間指導計画・実施方法

時期	活動項目	内容	
学習内容の流れ	前期	<ul style="list-style-type: none"> 探究学習の手法を学習する 情報を適切に収集する力を養う 要約の書き方、論文の構造 テーマ設定のための背景知識の収集 アドバイザーの伊藤先生の講義 「ジェンダーかるた」の改良とカルタを用いたワークショップの企画 伊藤先生講義 	<ul style="list-style-type: none"> アカデミックスキルトレーニング (AST) <ul style="list-style-type: none"> ○探究と調べ学習の違い ○ロジカルシンキングとは (AST1) ○思考フレーム (AST2) ○情報収集の仕方 (AST) 日本とフィンランドのジェンダーについての基礎知識を学ぶ ジェンダーにみるメディアの影響 「ジェンダーカルタ」読み札の再検討、活用方法について 活動先、活動内容についての検討
	夏季	教授によるジェンダーワークショップ	ジェンダーについて様々な知識を得るためのワークショップ形式の講義を実施
	9月～10月	<ul style="list-style-type: none"> 収集した情報や調査結果の分析 ジェンダーかるたの改良と量産への道筋を探る ジェンダー啓蒙エコバッグ作成の道筋を探る ジェンダーかるたワークショップ 	<ul style="list-style-type: none"> アカデミックスキルトレーニング (AST) 多面的な思考の視野を育成する。 意見交換、次年度へ向けての課題を再確認 「ジェンダーかるた」を利用した幼児期のジェンダー教育の必要性を探りより良いものとするためにワークショップを行い、意見交換をし、より良いものにする。
	11月～12月	<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマについての討論会 オンライン合同研修発表会 個人レポート作成 グローバルハイスクールミーティング参加 オンライン合同研修会発表準備 	<ul style="list-style-type: none"> 年度当初と比較しながら確認し、今後につなげる 在校生に向けたプレゼンテーションを開催 ライブ動画配信 これまでの活動報告をまとめ提出する グローバルハイスクールミーティング英語発表部門に参加 役割分担の決定、今後の計画
	1月～3月	<ul style="list-style-type: none"> オンライン合同研修発表会 探究学習成果発表会 活動の振り返りと今年のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> 講義、グループディスカッション、プレゼンテーション 在校生に向けたプレゼンテーションを開催 2年生から1年生への研究内容の引継ぎ

(2) 活動の詳細


伊藤純 先生講義 昭和女子大学	
実施日時	2020年6月30日
講師・場所	昭和女子大学 伊藤純先生 昭和女子大学附属昭和高等学校 セミナー2
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの研究の流れを聞き取り、ジェンダーについて多角的に講義をしていただいた。 ・なぜジェンダーを研究してみようと思ったのか、自分とジェンダーとのかかわりなど自由に意見交換をした。 ・個人テーマや今後の研究の方向性を決めるための講義 <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>

伊藤純 先生 講義ワークショップ 校内	
実施日時	2020年7月28日
講師・場所	昭和女子大学教授 伊藤純 先生 美昭和女子大学附属昭和高等学校 術室
内容	<p>ジェンダーについて様々な観点から講義をしていただき、高校生としてどうかかわれるのか、自分が思っている身近なジェンダー問題を取り上げ カテゴリー別に仕分け整理するワークショップを取り混ぜた勉強会を実施</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>

昭和祭 発表	
実施日時	2020年11月17日
講師・場所	昭和女子大学附属昭和高等学校 会議室
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・1年間の活動内容の紹介 ・日本が抱えるジェンダー問題について ・質疑応答 <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> </div>

ジェンダーかるた ワークショップ 校内	
実施日時	2020年10月31日
講師・場所	生徒 昭和女子大学附属昭和高等学校 セミナー2
内容	1, 2年生の希望者を対象にジェンダーかるたのワークショップを行い、LABO2の活動やジェンダーの知識を広めるとともに、LABO2のメンバー以外の意見を広く集め、ジェンダーかるたの内容の向上につなげる。特に、ジェンダーかるたは小学生を対象としたジェンダー意識の向上を目指した活動であるため、初等教育系の進路を目指している人やサービスラーニングで子どもの教育を調べている人に参加してもらいたい。

グローバルハイスクールミーティング参加	
実施日時	2021年1月8日
内容	<p>地域との協働による高等教育改革推進事業グローバル型 「Glocal High School Meethings 2021」オンライン発表会に参加し 日本が抱えるジェンダーについての問題点を自分たちの研究結果から幼児教育期において重要であるという観点から英語で発表した。</p>

『ジェンダーかるた』（制作 量産）	
実施日時	2020 年度通して
内容	<p>3 年間、生徒や専門家の方のアドバイスを参考に試行錯誤を繰り返し、毎年改良を重ねながら量産するところまでこぎつけた。</p> 

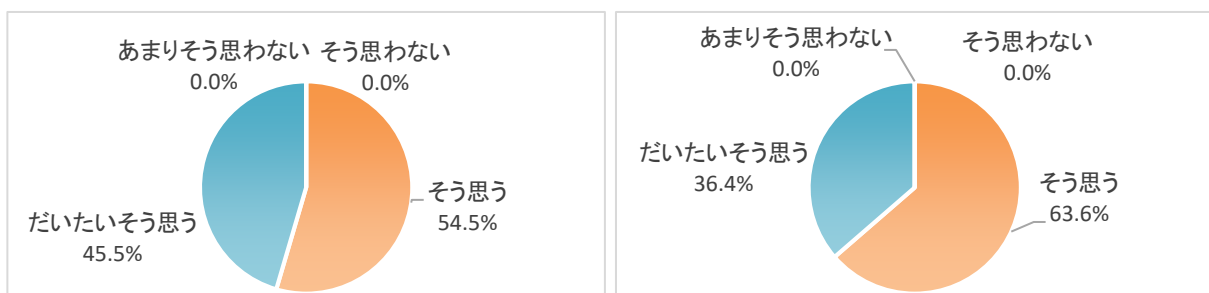
（3）検証・評価（成果と課題）

〈成果〉

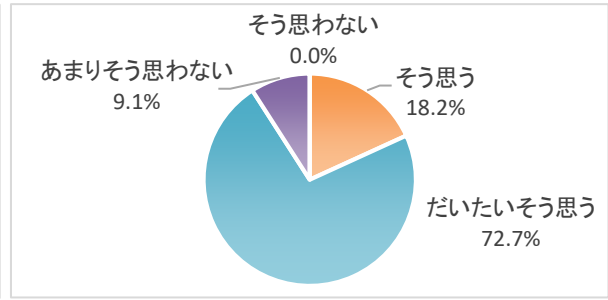
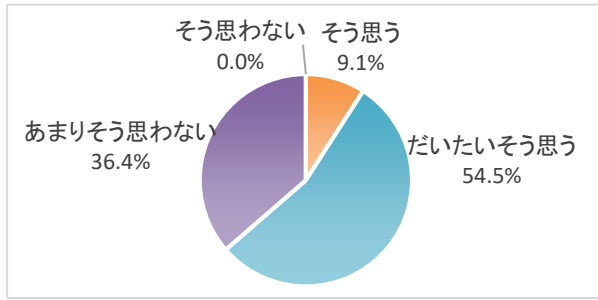
- プレアンケートと比較しポストアンケートでは「必要な情報を的確に収集し、わかりやすいプレゼンテーションができる」、「自分と考えの異なる人に対して自分の意見を言える」が大幅に向上している。「情報モラルを理解し情報機器や SNS を適切に活用できる」、「世界的な諸問題について新聞やネットなどを通じて関心を持っている」も肯定的な割合が大きく伸びた。
- 新型コロナウイルス感染症の流行で海外研修が中止になり、懸案だった「ジェンダーかるた」の量産費用問題が結果として解決した。ジェンダーかるたは発案から 3 年間の試験運用改良等を重ね、本年度はかるたのデジタル化、説明文の制作を経て量産することができた。日本のジェンダー問題の解決のカギは幼児教育にあるという観点から始めたジェンダーかるたが最終的に完成し形になった。また、オリジナルエコバッグ制作配布によるジェンダー意識の向上や啓発も企画運営実現に向け現 1 年生に引き継ぐ形で継続することになった。

〈アンケート結果〉（左が活動前、右が活動後）

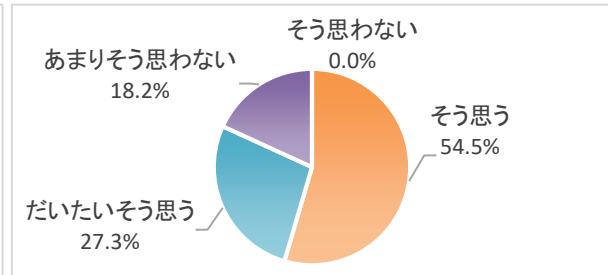
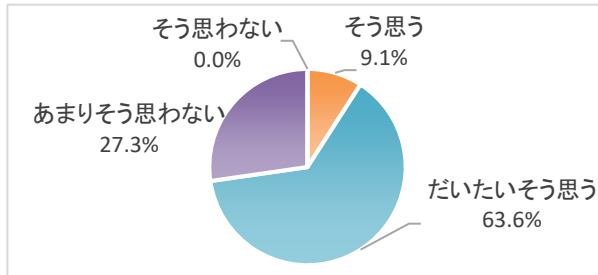
Q1. 誰とでも協調しながら、物事に取り組むことができる



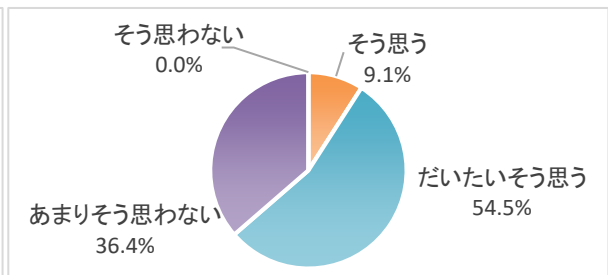
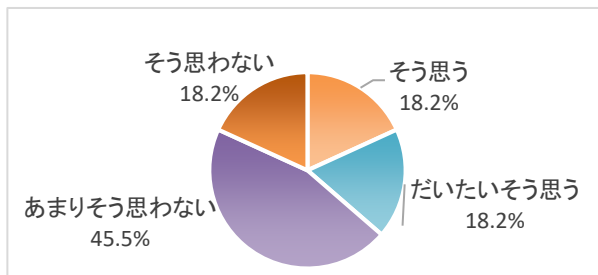
Q2. 必要な情報を的確に収集し、わかりやすいプレゼンテーションができる



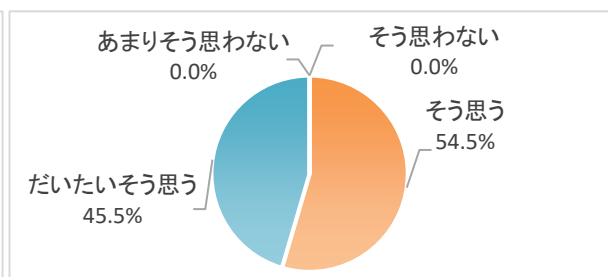
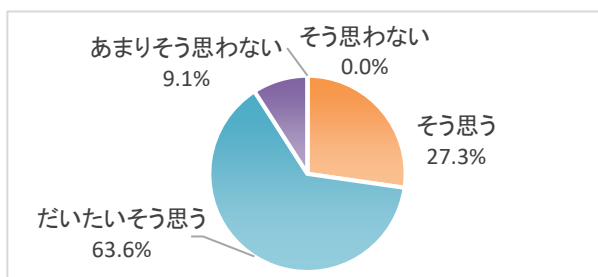
Q3. 自分の考えと異なる人に対して、自分の意見を言える



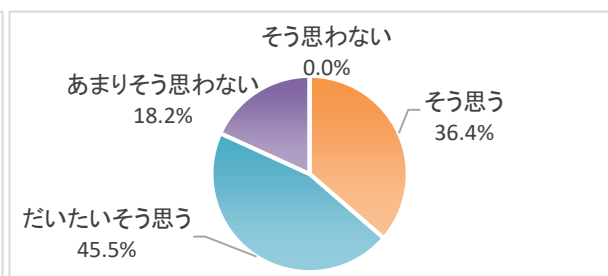
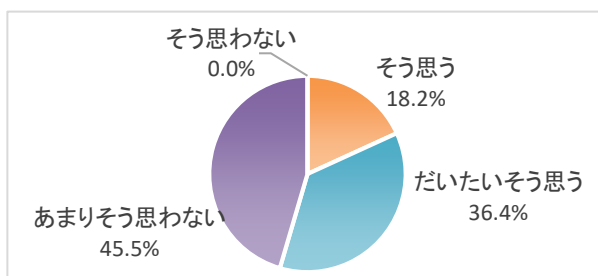
Q4. 考えていることを論理的にまとめて、新たな発想を作り出すことができる



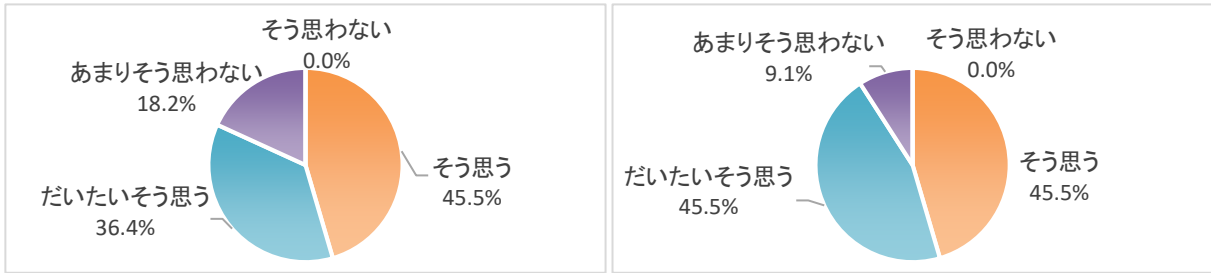
Q5. 困難に直面しても周りと協力して(周りに働きかけながら)問題解決に取り組む



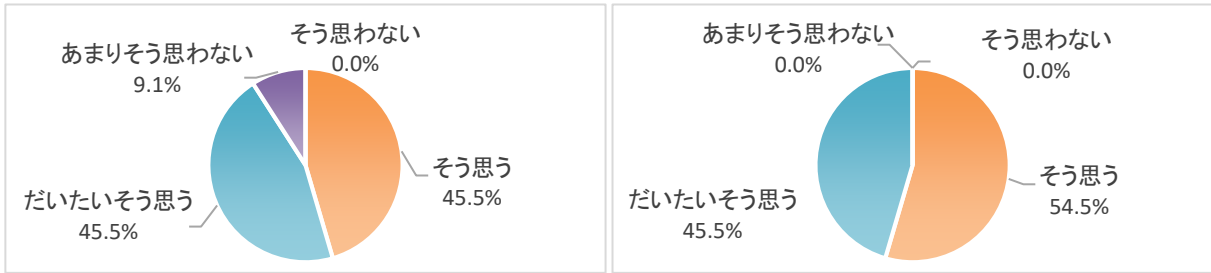
Q6. 収集した情報や自らの考えをまとめて、新たな発想を作り出すことができる



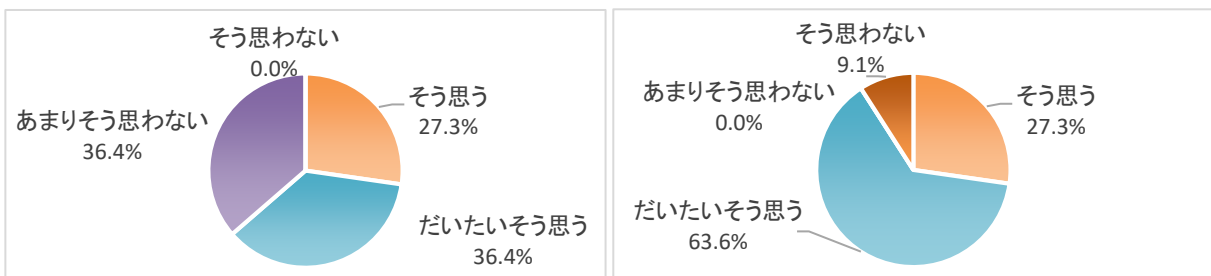
Q7. 情報モラルを理解し、情報機器や SNS を適切に活用できる



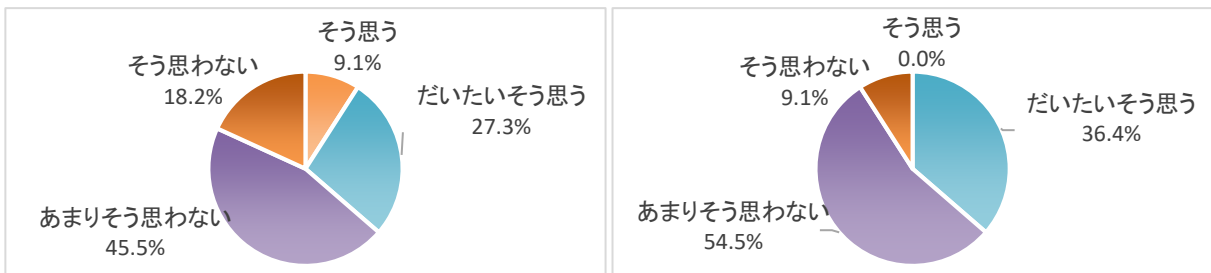
Q8. 世界的な諸問題について、新聞やネットなどを通じて関心を持っている



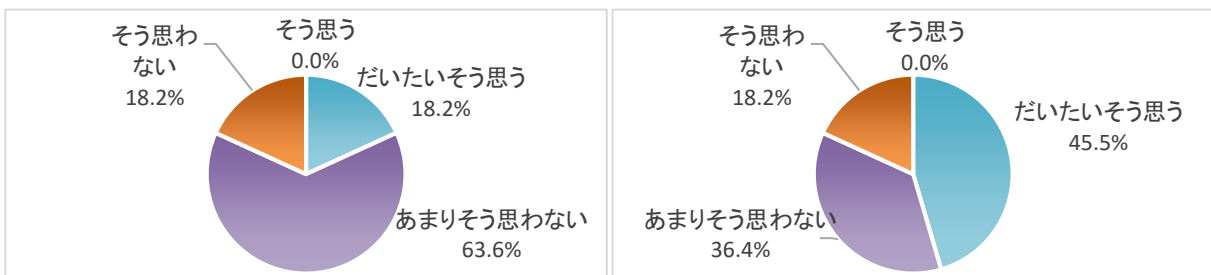
Q9. LABO のフィールドワーク先の国の課題について理解している



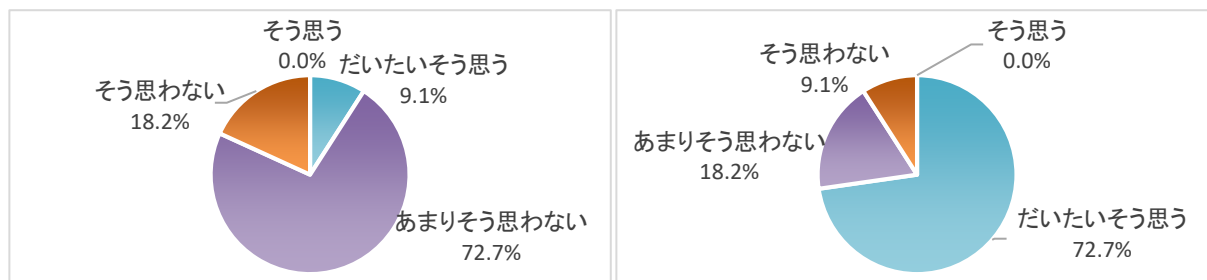
Q10. 自分が今住んでいる地域の行事に参加している



Q11. 自分が今住んでいる地域の課題を理解している



Q12. 世田谷区の抱えている課題について理解している



Q13. 自分の住んでいる地域、または世田谷区の課題と質問9の国の課題について関連して考えることができる



《分析》

- ・各項目の中で、協働性を見る指標である Q1、3、5 は、特に 3、5 で活動前後の伸びが著しく、生徒のスキルアップが見られる。異なる学年混合による活動であること、今年度はジェンダーかるたの普及という目標をかかげ、活動を行ったが、その際にグループ内はもちろん、外部の団体などとも協調すべき場面があったことなどが起因していると考えられる。2 年生は先輩の活動を引き継ぎ、これまでの実践をより良いものにしていくという明確な目標があった。活動が一区切りし、次年度は製作物の普及活動の段階に変わっていく。より協働性が求められる場面が多くなるため、今年度の成果を継承していく必要がある。

- ・探究スキルの項目となる Q2、4、6 では肯定的な評価の増加が目立った。今後はスキルアップの向上実感が、どのような活動に起因するものかなどの「向上実感調査」も行い、さらなるスキルアップを図っていききたい。

一方で Q7「情報スキル」の活用については向上実感がそれほど伸びていない。「ジェンダーかるた」の制作で情報機器は活用していたが、その活動が生徒の実感に繋がっていない。次年度は SNS などを活用した「成果の普及」が必要になってくる。情報機器の扱いについてまず徹底させる必要がある。

- ・LABO2 はジェンダーという社会課題がテーマであるため、Q8、9、11～13 などテーマ課題を意識できる項目は比較的高い数値になっている。ジェンダーかるたを地域に普及するという目標立てができていたため、12 や 13 など、地域への視点に関する項目も高かった。これをどう維持したまま、活動を進めていけるかがカギとなると考える。コンソーシアムを活用して地域へ普及させる活動の充実をはかりたい。

《課題》

- 数年間にわたるジェンダー研究の流れは、ジェンダーかるたの量産という形で一区切りついた。今後は、かるたの効果的な運用実施の企画運営が肝要になる。また、ジェンダーの研究の問題や高校生都としての身近なかかわりとしてのアクセスが重要となってくる。新たなる研究の道筋が必要と思われる。

- b. 本年度は新型コロナウイルス感染症流行の関係で外部との接触が臂膊に難しく、フィールドワークや交流、実働からの学びができなかった。研究テーマの学習や知識の涵養が非常にポイントと思われる。

(4) 生徒の感想

- a. 海外に目を向けて活動したのでそれぞれの国が抱えている問題を関連させながら考える力がついたと思う。またプレゼンテーション等で、相手に伝わるよう模索しながら取り組んだ。
- b. ジェンダー平等について現状や課題を調べていくうえで、知識がただだけでなくひとつの物事に対して探究心をもち深く考える能力がのびたと思う。少人数のグループなので人任せになることも少なく主体的に考え、動く力も伸びた。
- c. 海外へ行ったり、企業に訪問したりと昨年度行う予定だったものの実施が難しい1年間となった。しかし、オンラインでの発表や話し合いを進めるなど、新しい可能性や新しい方法を見出すことができた。今年度の LABO 活動を通して積極的に発言していく能力や英語の能力が伸びたと思う。オンラインであるため、人の顔を直接見たりその場の雰囲気を感じたりすることができないので、自分から積極的に発言していかないと、という気持ちが芽生えた。

(5) 全校発表会 プレゼンテーション資料

1


LABO2

日本人のジェンダーギャップの研究

五年生：野口 蒲生 小寺 諏訪 井上
 四年生：小松 榎本 穴戸 星野 笠原 渡辺
 アドバイザー：伊藤純先生

2


ジェンダーとは



女らしさ

→

社会的・文化的に
作られた性別






男らしさ

ジェンダーギャップ・・・男女の違いにより生じる格差のこと

3

ジェンダーギャップ指数

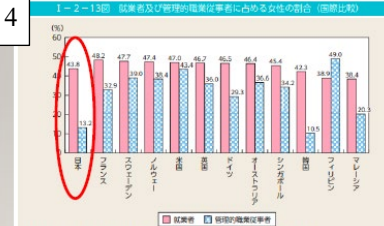
★各国の不平等状況を分析し、ランキング付けしたもの

	日本	121 / 153 各国
	中国	106 / 153 各国
	韓国	108 / 153 各国

[The Global Gender Gap Report 2020] (世界経済フォーラム)

4

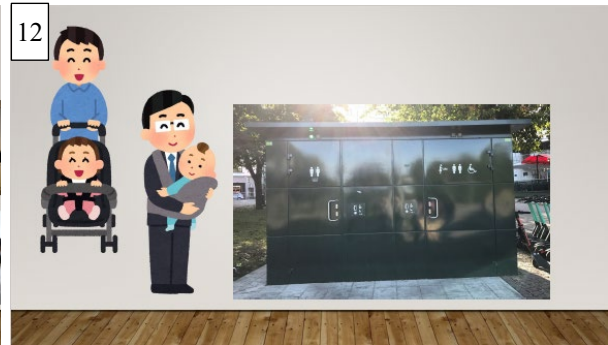
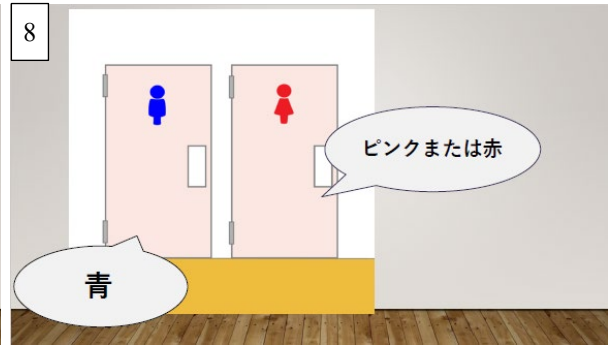
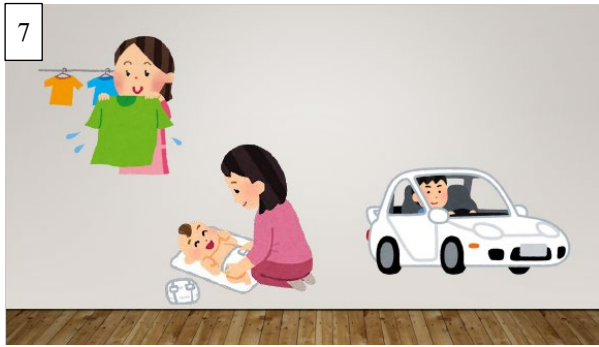
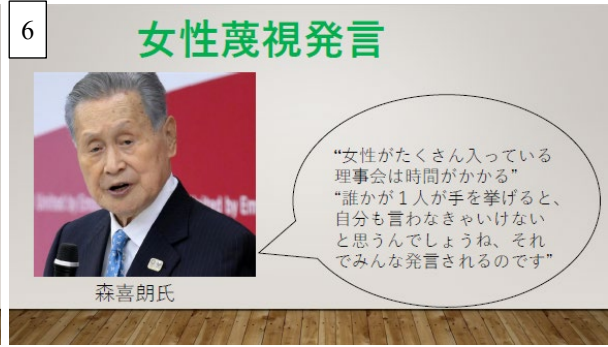
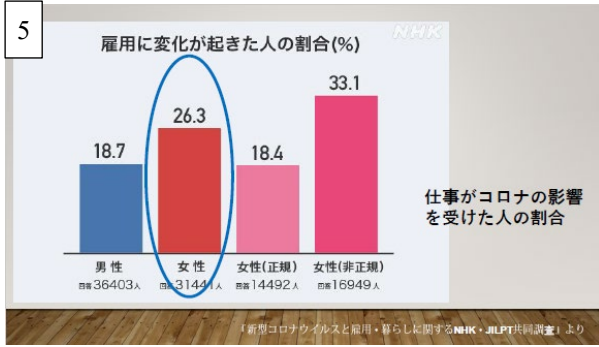
【イメージ】 従業員及び管理職兼役員に占める女性の割合 (国別比較)



国	従業員 (%)	管理職兼役員 (%)
日本	12.1	11.1
中国	18.4	11.1
韓国	22.8	11.1
アメリカ	27.4	11.1
ドイツ	27.4	11.1
フランス	27.4	11.1
イギリス	27.4	11.1
インド	27.4	11.1
ブラジル	27.4	11.1
インドネシア	27.4	11.1
シンガポール	27.4	11.1
韓国	27.4	11.1
フィリピン	27.4	11.1
オーストラリア	27.4	11.1
ロシア	27.4	11.1

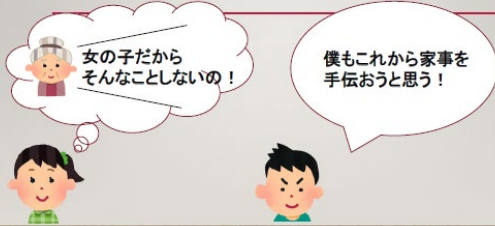
就業者と管理職での女性の割合

https://sourire-heart.com/8386/



15

ジェンダーかるた



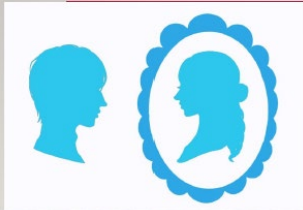
16

デジタル化と増産



17

オリジナルエコバック



多くの人の目に留まるデザインを考案し、商品化。

18

今後の活動

- ・エコバッグ作成
- ・ジェンダーかるたの普及
- ・児童館でのワークショップ
- ・新プロジェクトの企画



19



Thank you





LABO3 海外で活躍する日本人リーダーの研究

指導者：昭和女子大学 米倉 雪子 准教授



(1) 年間指導計画・実施方法

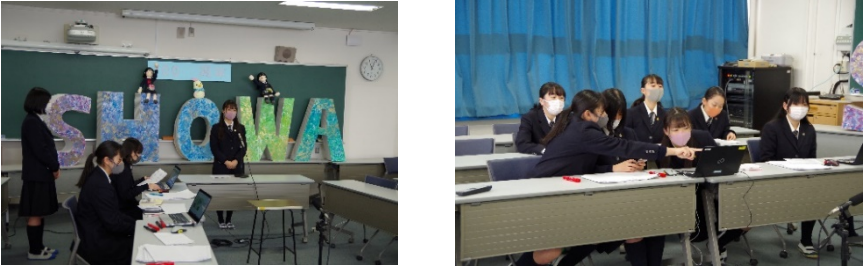
時期	活動項目	内容
前期	・探究学習の手法を学習する	・アカデミックスキルトレーニング (AST) ○探究と調べ学習の違い ○ロジカルシンキングとは (AST1) ○思考フレーム (AST2) ○情報収集の仕方 (AST3) メディアカードの活用方法指導
	・情報を適切に収集する力を養う 要約の書き方、論文の構造	
	・テーマ設定の背景知識の収集	・背景知識の整理 ○キーワード探しとマインドマップ作成 (AST4)
	・米倉アドバイザーの講義	・カンボジア情勢について、基本知識の確認
	・研究テーマの共有	・各個人が今年度設定した研究テーマについて、事前研究を行った上でプレゼンテーションをし、共有する
夏季	・フィールドワーク(オンライン)の計画	○適切なフィールドワーク方法論 (AST5) ・フィールドワーク計画
夏季	・フィールドワーク (オンライン) の実施	・フィールドワークの実施 ・フィールドワーク報告
学習内容の流れ	9月～11月	<ul style="list-style-type: none"> ・収集した情報や調査結果の分析 ・夏季海外研修代替オンライン交流 ・代替プログラムの振り返り ・フィールドワーク (ローカル) ・合同研修会発表準備
	11月～12月	<ul style="list-style-type: none"> ・アカデミックスキルトレーニング (AST) 1) プノンペン在住の高校生 12 名と Zoom による交流会 2) 倉田ベッパー代表倉田浩伸氏によるオンライン講義 ・意見交換、次年度へ向けての課題を再確認 ・代替プログラムの振り返り/各自の考えを発表 ・役割分担の決定、今後の計画 ・世田谷区池尻の「友成工芸」訪問 工場見学、講義、質疑応答
	1月～3月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究テーマについての討論会 ・オンライン合同研修会発表準備 ・個人レポート作成 ・年度当初と比較して変化した点を出し合いながら模造紙にまとめる ・役割分担の決定、今後の計画 ・ここまでの活動報告を年内に提出する ・オンライン合同研修発表会 ・講義、グループディスカッション、プレゼンテーション ・探求学習成果発表会 ・在校生に向けたプレゼンテーションを開催 ・活動の振り返りと今年のまとめ

(2) 活動の詳細

カンボジアの高校生とのオンライン交流会	
実施日時	2020年9月5日(土)
講師・場所	米倉雪子先生・オンライン
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルスが社会に与えた影響について、それぞれの国の状況についての情報交換。 ・将来の夢や希望について話し合い現状をどのように乗り越えていくことが重要だと考えているか、自由に意見交換。  

KURATA PEPPER 倉田浩伸代表の講演会	
実施日時	2020年10月24日(土)
講師・場所	倉田浩伸氏・オンライン
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・事業紹介、カンボジアの歴史について ・新型コロナウイルスの与えた影響、それに伴い変化した日常について ・今後のカンボジアでの活動構想について ・質疑応答  

友成工芸訪問	
実施日時	2020年11月10日(火)
講師・場所	世田谷区池尻 友成工芸
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・事業内容についての紹介と工場見学 ・カンボジアとの関るようになったきっかけ、今後の展望について ・質疑応答  

グローバルプログラム 中間発表会	
実施日時	2020年11月22日(日)
講師・場所	昭和女子大学附属昭和高等学校
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・1年間の活動内容の紹介 ・「理想のリーダー像」についての考察発表 ・質疑応答 

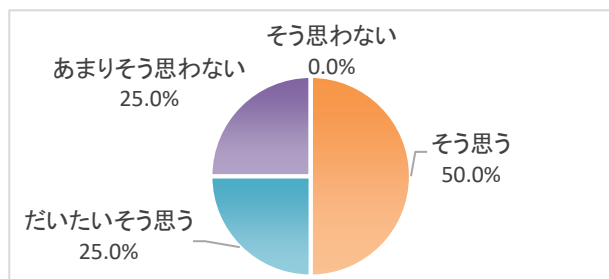
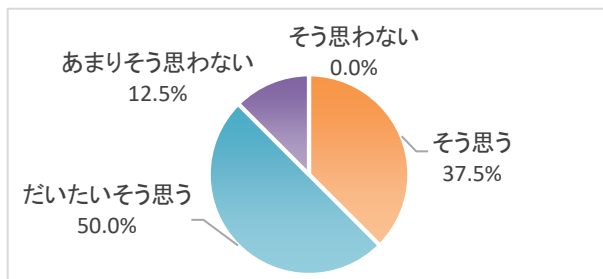
(3) 検証・評価 (成果と課題)

《成果》

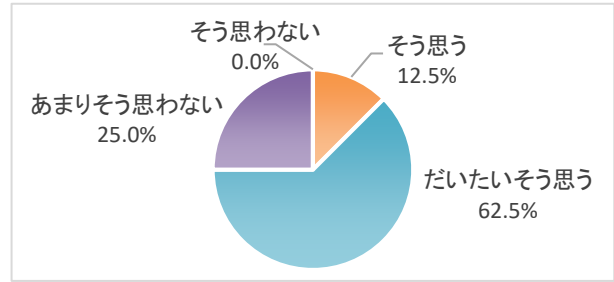
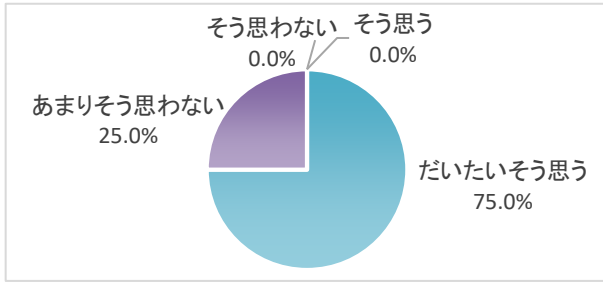
- プレアンケートと比較し、「考えていることを論理的にまとめて新たな発想を作り出すことができる」、「収集した情報や自らの考えをまとめて新たな発想を作り出すことができる」、「世田谷区の抱えている課題について理解している」の質問に肯定的な回答をした生徒の割合が大きく増加した。その他の質問でも肯定的な回答が目立った。
- 海外研修が中止になった際、夏季休暇を利用してオンラインの講演会への参加を個々に計画するなど、積極的な姿勢が見られた。自ら情報を収集し、新たな発想や構想を練り上げる力を身につけることができたのではないかと感じる。
- LABO 3の活動史上、初めて地元・世田谷区の企業と関係を築くことができたのは大きな収穫だった。
「グローバルな活動」を目指しながら「ローカル」な部分ばかりが先行していた活動状況が一気に打開され、「ローカル」の活動も視野に入れながら研究を進めることができた。
- オンラインミーティングを積極的に活用し、有効的に使用することができた。

《アンケート結果》 (左が活動前、右が活動後)

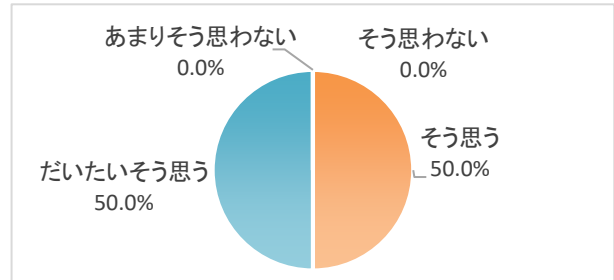
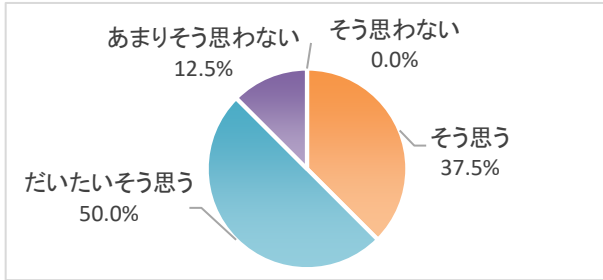
Q1. 誰とでも協調しながら、物事に取り組むことができる



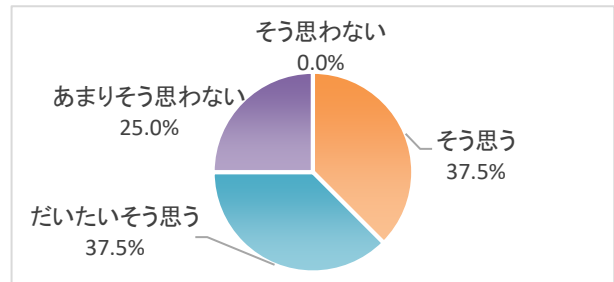
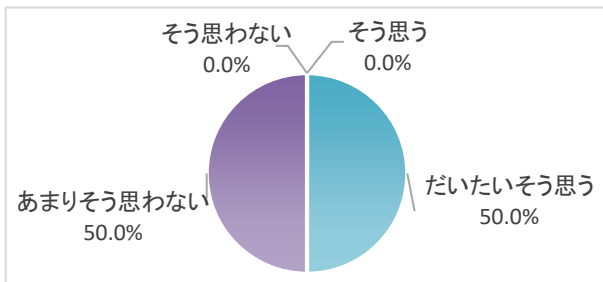
Q2. 必要な情報を的確に収集し、わかりやすいプレゼンテーションができる



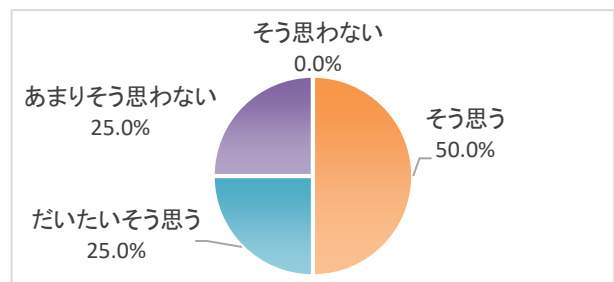
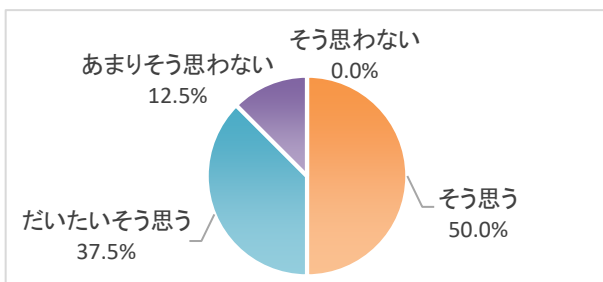
Q3. 自分の考えと異なる人に対して、自分の意見を言える



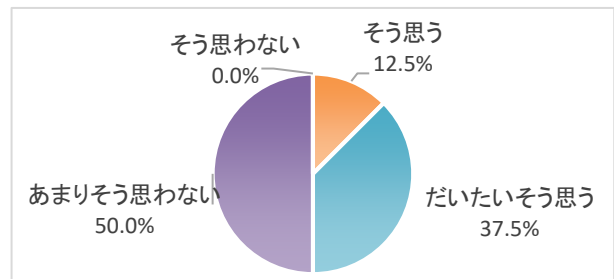
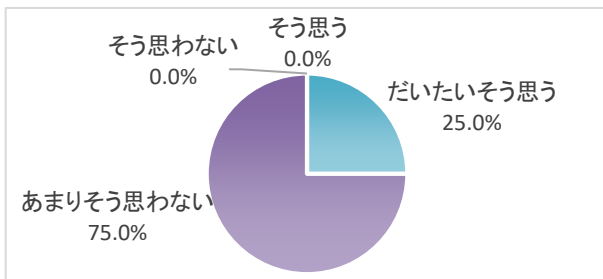
Q4. 考えていることを論理的にまとめて、新たな発想を作り出すことができる



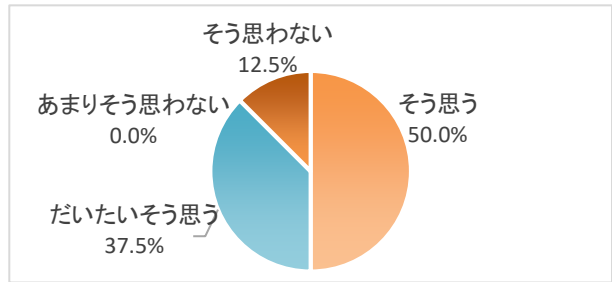
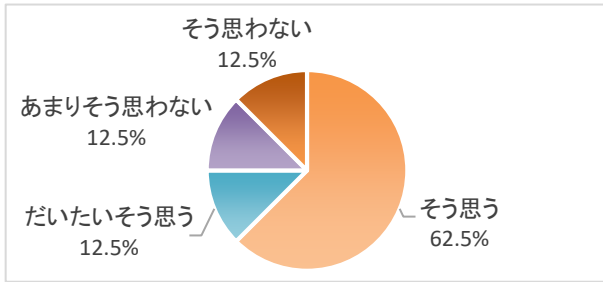
Q5. 困難に直面しても周りと協力して(周りに働きかけながら)問題解決に取り組む



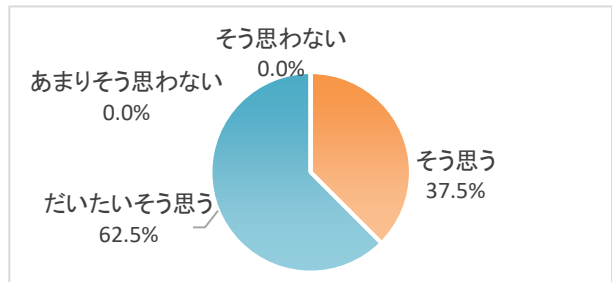
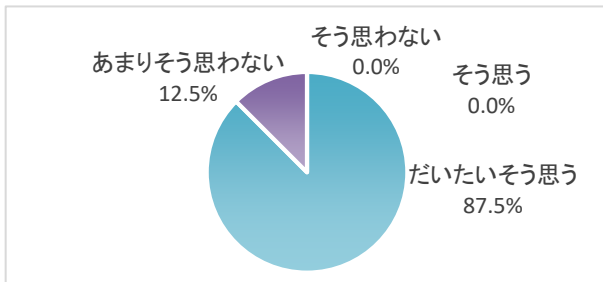
Q6. 収集した情報や自らの考えをまとめて、新たな発想を作り出すことができる



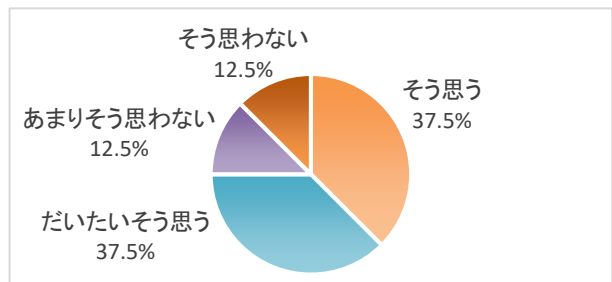
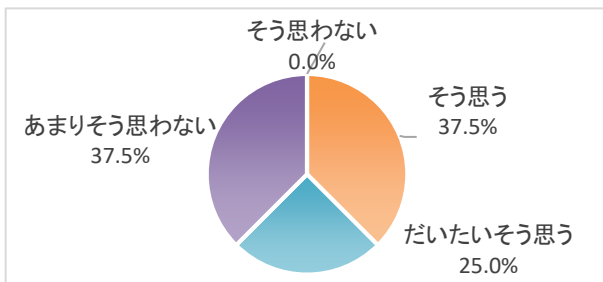
Q7. 情報モラルを理解し、情報機器や SNS を適切に活用できる (※)



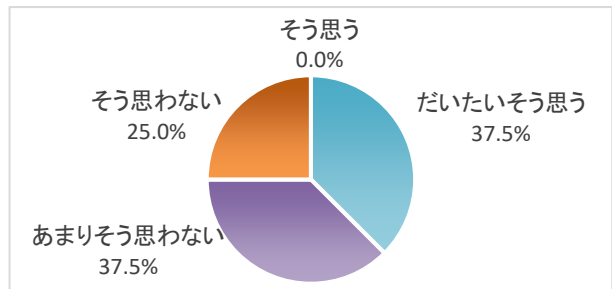
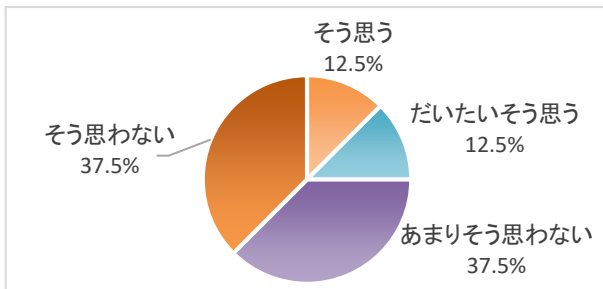
Q8. 世界的な諸問題について、新聞やネットなどを通じて関心を持っている



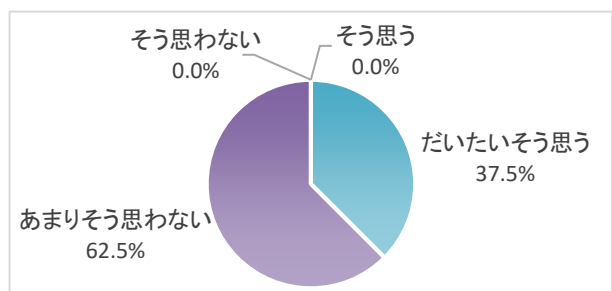
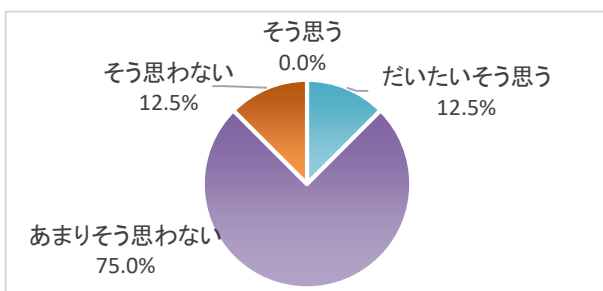
Q9. LABO のフィールドワーク先の国の課題について理解している



Q10. 自分が今住んでいる地域の行事に参加している



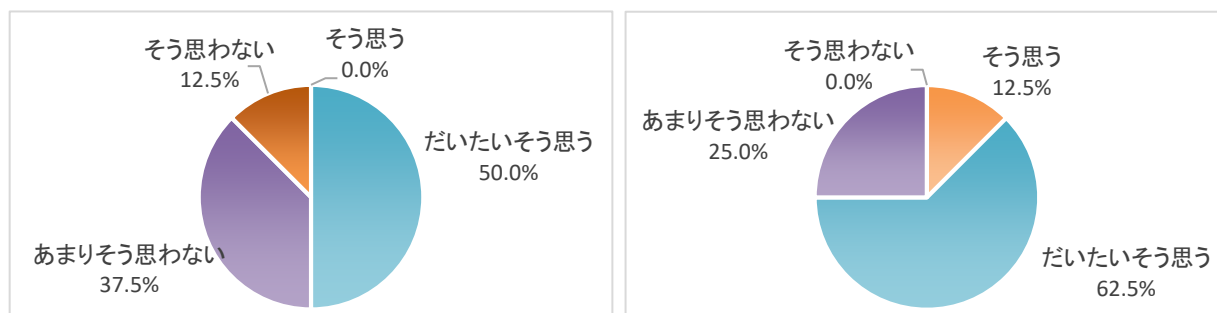
Q11. 自分が今住んでいる地域の課題を理解している



Q12. 世田谷区の抱えている課題について理解している



Q13. 自分の住んでいる地域、または世田谷区の課題と質問9の国の課題について関連して考えることができる



《分析》

- ・ 探究スキルの項目となる Q2、4、6 は肯定的な評価の増加が目立った。今後はスキルアップの向上実感が、どのような活動に起因するものかなどの「向上実感調査」も行い、さらなるスキルアップを図ってきたい。

一方で Q7「情報スキル」の活用については向上実感がそれほど伸びていない。生徒の活動発信などに取り組ませることで、こうしたスキルを向上させるとともに、情報機器の扱いについて指導していく。

- ・ 協働性を示す Q1、3、5 のうち、Q3「考えの異なる人に対して意見を述べる」は向上が見られたものの、他は活動前後の伸びは若干にとどまっている。今年度はオンラインではあるが、外部人材との交流や講義などの活動を行っているが、そうした活動が向上実感として伴っていない点が課題となる。また、毎年他高校と行っているカンボジア合同研修会がオンライン交流会問形になり、他高校との交流が限定的になったことが2年生の評価を下げた要因の一つであると考えられる。探究活動内容の精査を進めるとともに、まずはグループ内、さらには LABO どうしといった形で、できることからブリーフィングや意見交換の機会を設定するなど、スキル向上を実感させる手立てが必要である。
- ・ 後期に地域での活動をいくつか実施したこともあり、地域での実践に関する項目である Q10～13 は、LABO 活動でほぼ活動できなかった Q10 の「地域の行事に参加」以外は肯定的な評価の伸びが見られる。ただ、向上実感を得ていない生徒が多いのも事実である。地域での具体的な実践が可能になり、SDGs に取り組む企業見学や地域団体との交流経験が進めば、こうした指標は向上していくと思われる。コンソーシアムを活用して LABO テーマに即した地域活動や団体を開拓していくとともに、課題研究の方向性を地域課題とリンクさせて、地域に発信・成果の還元をする方法を模索していきたい。

《課題》

- a. オンライン交流会ではコミュニケーション能力の重要性を見せつけられた。言語は基本的に英語だったが、通訳の教諭に頼らざるを得ない場面が多かった。カンボジアの生徒たちの積極性にも圧倒された。
- b. 米倉先生との勉強会では、自主性をもって意欲的に活動に取り組むことができていた上級生と、消極的な下級生の差が気になった。LABO活動に参加している意義を再確認した上で来年度の活動に取り組むことができるよう今後の指導に当たりたい。

(4) 生徒の感想

- a. カンボジアの現状は知らないことばかりだったが、歴史がどのようなものであったか、その歴史を現状の問題点と繋げて考えることができた。また、リーダーに必要な素質は難しいものばかりではなく、身近にあるものでもできるということが分かった。そして多様性を尊重することの大切さを学んだ。
- b. カンボジアなどの途上国の課題や現状を理解することができた。また自分の意見を人に伝えることや、自分の意見を持った上で友達や他の人の意見をバランスよく取り入れることができるようになった。リーダーに必要な力を研究することで、自分がどんな人になりたいかを明確に考えることができ、将来に役立つ知識を得ることができたと思う。

(5) 全校発表会 プレゼンテーション資料

1

LABO 3 海外で活躍する日本人リーダー


研修先：カンボジア
アドバイザー：昭和女子大学国際学部国際学科 准教授 米倉雷子先生

4年 有馬はな 有川晴菜 南雲日美理 三井綾花
5年 金子恵瑛華 倉持春花 小林蒼空 中村優那


2

カンボジア

インドシナ半島の中央
人口：1514万人
言語：クメール語
首都：プノンペン



Chum Reap Spa



3


昨年度の活動

- 事前研究
 - ・米倉先生の講義
 - ・研修に向けての研究
- 研修旅行
 - ・現地で起業された方の訪問
 - ・カンボジアの歴史学習
- まとめ
 - ・理想のリーダー像まとめ
 - ・全校発表


4

カンボジア研修

<プノンペン>
・トゥールスレン虐殺犯罪博物館
・チュンエク大量虐殺センター
・JICAカンボジア事務所
・KURATA PEPPERの倉田浩伸さん
・Phnom 編集長の木村文さん



<シェムリアップ>
・Kru Khmer Organic spa productsの篠田ちひろさん
・Svay Chek Organic Farmの小島幸子さん



5

JICAカンボジア事務所

〈JICAの取り組み〉

- ・インフラ整備
- ・教育制度の充実



〈学んだこと〉

- ・一方的な支援はしない



将来的な自立を目指した支援を



6

トゥールスレン虐殺犯罪博物館 チュンエク大量虐殺センター

過去にカンボジアで行われた
大量虐殺の歴史を学ぶ

↓
過去の事実があるからこそ
今のカンボジアがある



7

第5回合同カンボジア研修 研究会・成果発表会

〈参加校〉

- ・昭和女子大学附属昭和高等学校・和歌山信愛高等学校
- ・啓明学園高等学校・広島女学院高等学校・岡山学芸館高等学校

〈実施日〉

2020年1月11日～1月12日

〈内容〉

- ・各校発表
- ・「国際協力」についての講義
- ・ディスカッション
- ・各グループによる発表



8

今年度の活動

個人研究

- ・米倉先生の講義
- ・コロナ禍のカンボジアについて

オンライン
での発表

- ・現地高校生との交流
- ・リーダーの方による講義

まとめ

- ・理想のリーダー像まとめ
- ・全校発表

9



10

PHNOM編集長 木村文氏

- ・カンボジアで日本人向けの情報誌Phnomを創刊
- ・情報誌を通して様々な情報を発信



11

KRU KHMER 経営者 篠田ちひろ氏

- ・カンボジアの伝統医療を使ったスパの経営、アロマ製品の販売を行っている
- ・現地の方にスパなどの技術指導



12

SVAY CHEK ORGANIC FARM経営者 小島幸子氏

- ・カンボジアで有機野菜の販売
- ・有機野菜を利用したカフェの経営
- ・現地の方を男女問わず雇用して共同で経営を行っている



13

KURATA PEPPER 創業者 倉田浩伸氏

カンボジアでかつて生産が盛んだった
有機胡椒の製造、栽培を成功させた
倉田浩伸さんから、内戦の歴史を踏まえ、
持続可能な産業についてなど多岐にわたるお話を伺った



今年度11月には
ZOOMを通して
講義を実施。



14

株式会社 友成工芸 友成氏

会社：トロフィー、アクリル升を制作
カンボジアと交流一教育

〈学んだこと〉

- ・カンボジア人に技術的支援を行う
- ・計画通りにいなくても仲間力を借りながら乗り越えようとする強い心



15

カンボジアの高校生との交流 (ZOOM)

主題 : “自国のコロナ状況”
 目次 : お互いの国についてのプレゼン
 質疑応答
 内容 : カンボジアのコロナ感染状況
 マスクの値上がり
 解雇による失業者の増加
 結果 : 異文化交流の機会



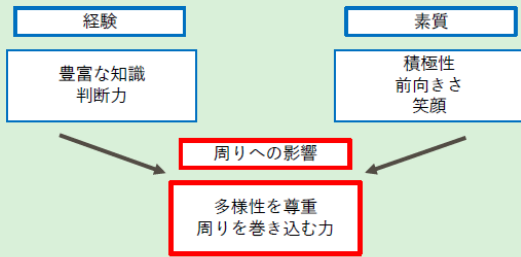
16

第6回合同カンボジア研修
 研究会・成果発表会(オンライン開催)

〈参加校〉
 ・昭和女子大学附属昭和高等学校・和歌山信愛高等学校
 ・啓明学園高等学校・広島女学院高等学校・岡山芸芸館高等学校
 〈実施日〉
 2020年1月9日
 〈内容〉
 ・各校発表
 ・カンボジアで社会貢献活動を行っている4名の方々による講義
 ・ディスカッション(先入観について)

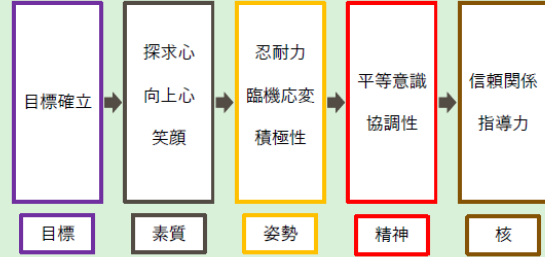
17

理想のリーダー像 6月



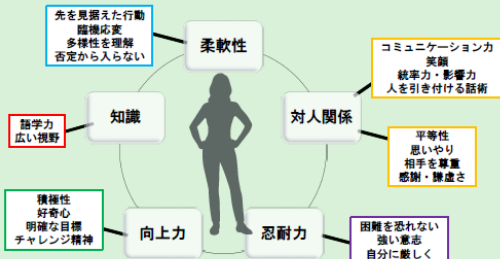
18

理想のリーダー像 11月



19

理想のリーダー像 2月



20



LABO4 多文化共生社会とボランティアの可能性

指導者：昭和女子大学 興梶 寛 特任教授

(1) 年間指導計画・実施方法

	時期	活動項目	内容
学習内容の流れ	5月～7月	<ul style="list-style-type: none"> ・探究学習の手法を学習する ・情報を適切に収集する力を養う ・テーマ設定のための背景知識の収集 ・研究テーマの共有 ・興梶寛先生のご講義 	<ul style="list-style-type: none"> ・アカデミックスキルトレーニング (AST) <ul style="list-style-type: none"> ○探究と調べ学習の違い ○ロジカルシンキングとは (AST1) ○思考フレーム (AST2) ○情報収集の仕方 (AST3) メディアカードの活用方法指導 ・背景知識の整理 <ul style="list-style-type: none"> ○キーワード探しとマインドマップ作成 (AST4) ・フィールドワーク計画 <ul style="list-style-type: none"> ○適切なフィールドワーク方法論 (AST5) ・各個人が今年度設定した研究テーマについて、事前研究を行った上で発表をし、共有する (2年生は昨年度の研究成果も発表する) ・ボランティアの目的やあり方、SDGs について
	夏季	<ul style="list-style-type: none"> ・実施可能なグローバルな活動の調査 	<ul style="list-style-type: none"> ・グローバルな活動を行っている世田谷区の企業・団体の調査
	9月～11月	<ul style="list-style-type: none"> ・収集した情報や調査結果の分析 ・興梶寛先生のご講義 ・市川斉さんのご講義 	<ul style="list-style-type: none"> ・アカデミックスキルトレーニング (AST) <ul style="list-style-type: none"> ○シンキングツールとは (AST6) ・SDGs、課題解決型学習 ・NGOのシャンティ国際ボランティア会のミャンマーにおける支援活動 ・校内でのLABOの活動内容発表に向けた準備
	12月	<ul style="list-style-type: none"> ・興梶寛先生のご講義 ・個人レポート作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・ソーシャルビジネス ・冬季休暇中にこれまでの個人研究の成果をまとめる
	1月～2月	<ul style="list-style-type: none"> ・NGO難民自立支援ネットワーク (REN) の活動支援 ・興梶寛先生のご講義 ・活動の振り返りと今年のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ・難民自立支援ネットワークが難民支援のために行っているビーズアクセサリー販売のサイトを全校生徒に紹介 ・難民問題 「つなぐ、つながる、わかちあう」というテーマでのこれまでの学習内容を振り返り、コロナ禍の中でも自分たちにできるボランティア活動について議論し、発表する ・全校生徒を対象にした研究活動の発表会 ・LABO4内での個人テーマ研究の発表会

(2) 活動の詳細

興梶先生による講義 全8回	
実施日時	①5月13日、②6月24日、③9月9日、④10月14日、⑤11月4日、⑥12月16日、⑦1月13日、⑧2月10日
講師・場所	講師：興梶寛先生 場所：会議室
内容	<p>講師として興梶寛先生をお招きし、LABO4の研究テーマである多文化共生社会の在り方、その実現のためにできるボランティアの可能性について学びを深めた。10月14日には、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会ミャンマー事務所長の市川斉氏を招き、ミャンマーのかかえる教育問題とシ国際ボランティア会の図書を通じた支援活動などについてお話を伺った。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>

「難民自立支援ネットワーク」の活動支援	
実施日時	2021年2月22日(月)
方法	オンライン
内容	<p>全校生徒に向けたLABO活動の発表会において、難民の支援活動を行っているNGO「難民自立支援ネットワーク（REN）」のビーズアクセサリーの販売サイトを全校生徒に紹介し、RENの活動への協力を求めた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>

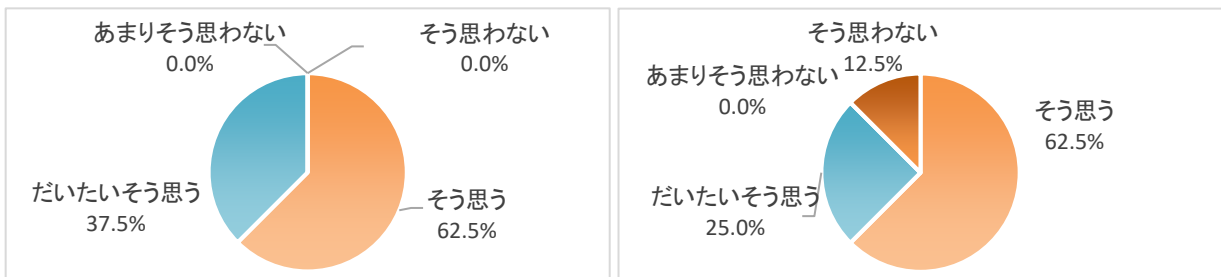
(3) 検証・評価（成果と課題）

〈成果〉

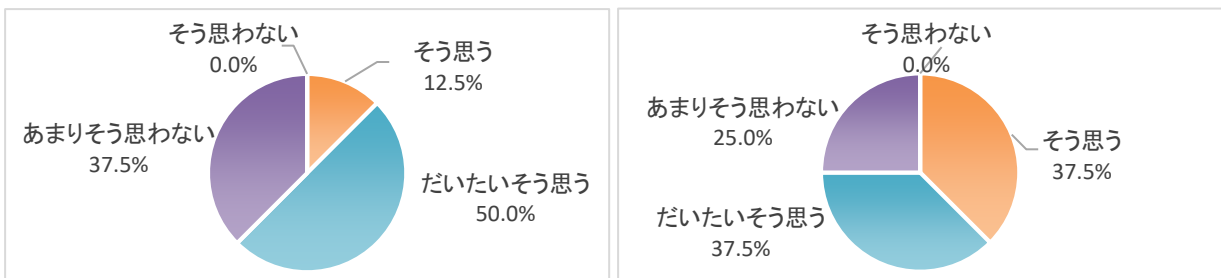
- a. 昨年度に引き続き「多文化共生社会とボランティアの可能性」という研究テーマで、多文化共生社会の実現に向けたボランティアのあり方について研究した。今年度はSDGsの諸目標の実現にもつながるボランティア活動を考え、新型コロナウイルス感染症の拡大により、タイでのボランティア活動が実施できなくても、自分たちにできることは何かを議論し模索した。
- b. 個人テーマの研究においては、タイにおける諸問題への取り組みを学ぶ中で、日本が取り組むべき問題についても認識することができた。
- c. ポストアンケートでは、研究2年目となる2年生全員が「発展途上国が抱える課題とその背景を理解している」、「多文化共生社会の形成に向けて取り組むべき課題を理解している」、「LABOの研究にかかわるボランティア活動に取り組んでいる」、「LABOの研究を自分の生活や進路と関連させて考えることができる」と回答した。また、自分たちの研究内容を発表したり、NGOの難民支援の活動への協力を呼びかけたりと、プレゼンテーションをする機会が多かったことで、情報をまとめ、発信する能力が向上できたと自由記述欄に書いている生徒が1年生も含め多く見られた。

〈アンケート結果〉（左が活動前、右が活動後）

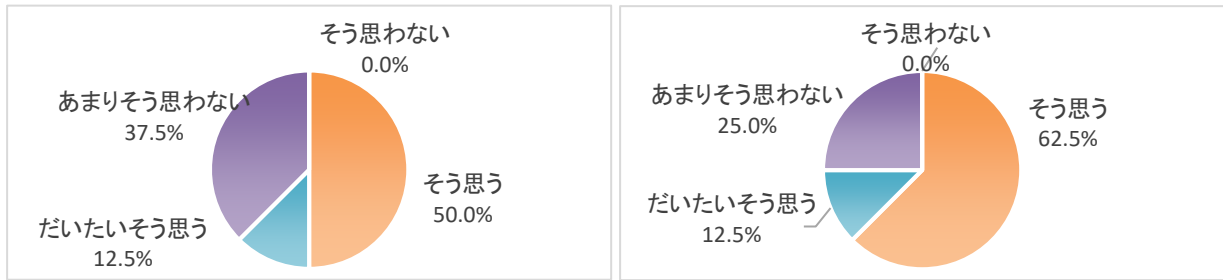
Q1. 誰とでも協調しながら、物事に取り組むことができる



Q2. 必要な情報を的確に収集し、わかりやすいプレゼンテーションができる



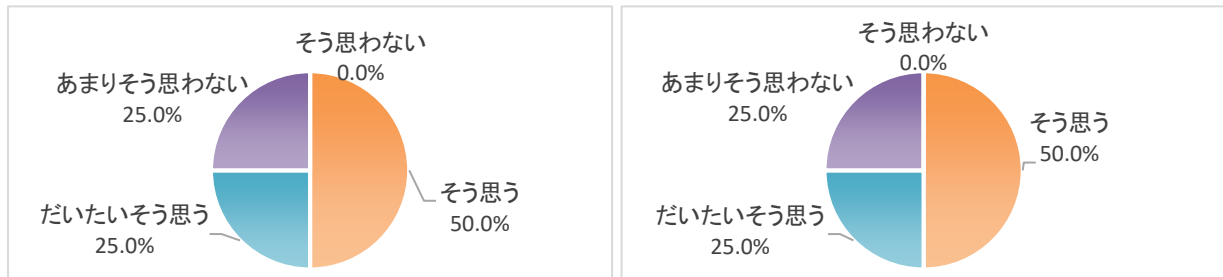
Q3. 自分の考えと異なる人に対して、自分の意見を言える



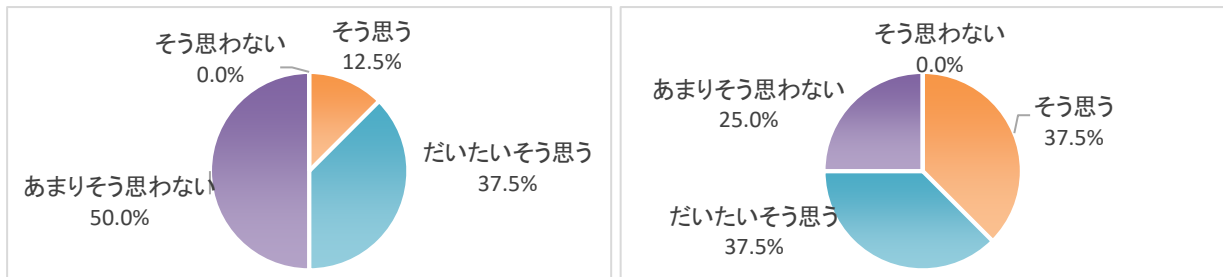
Q4. 考えていることを論理的にまとめて、新たな発想を作り出すことができる



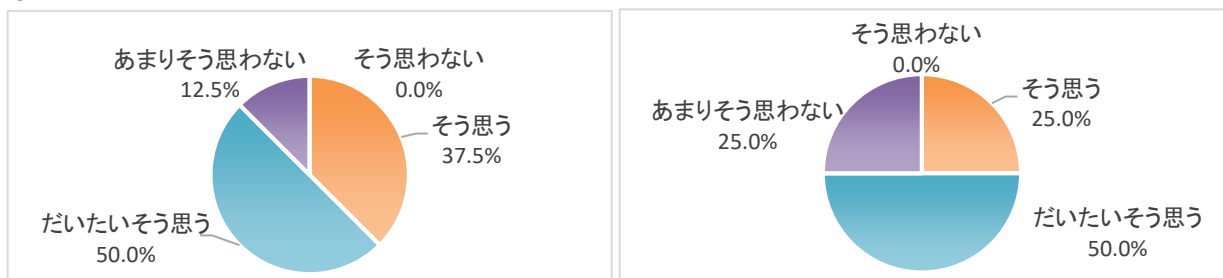
Q5. 困難に直面しても周りとは協力して(周りに働きかけながら)問題解決に取り組む



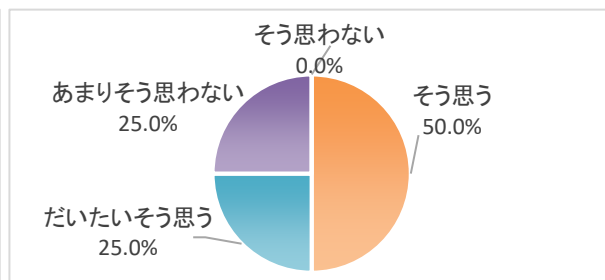
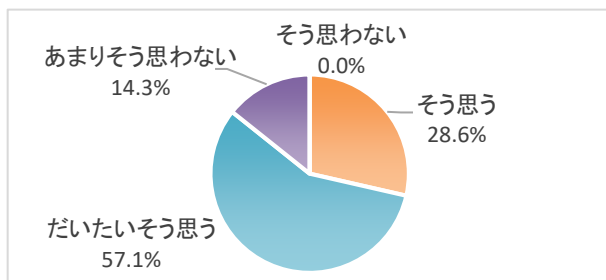
Q6. 収集した情報や自らの考えをまとめて、新たな発想を作り出すことができる



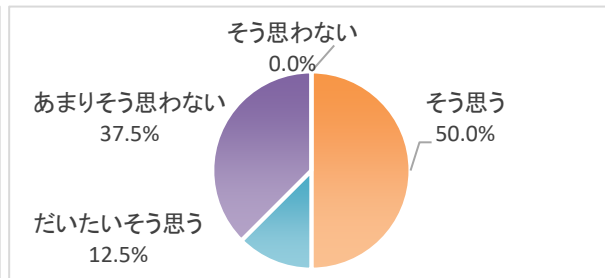
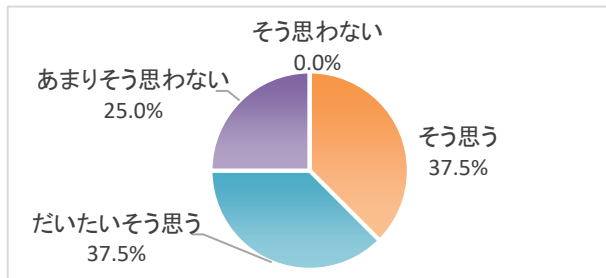
Q7. 情報モラルを理解し、情報機器や SNS を適切に活用できる (※)



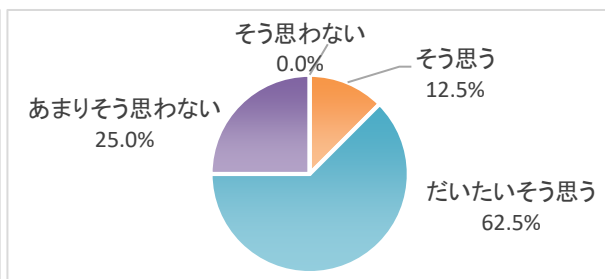
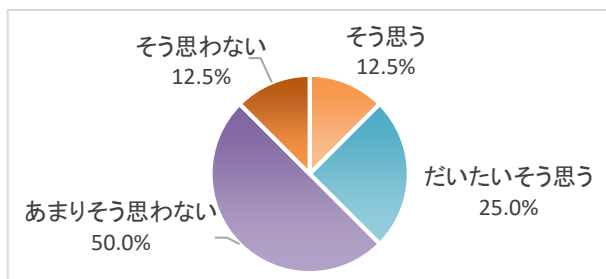
Q8. 世界的な諸問題について、新聞やネットなどを通じて関心を持っている



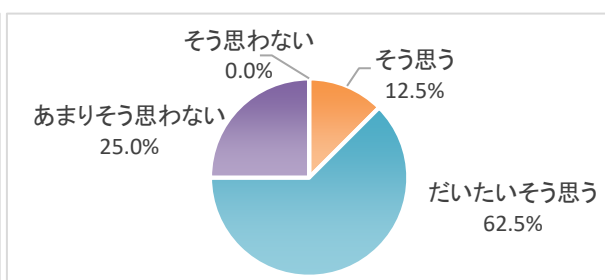
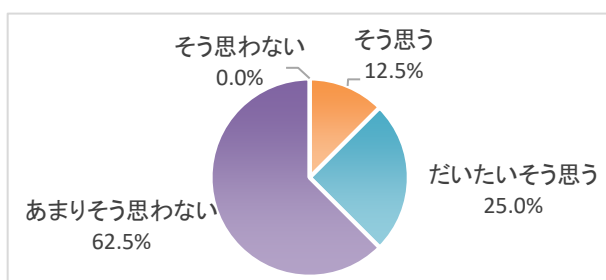
Q9. LABO のフィールドワーク先の国の課題について理解している



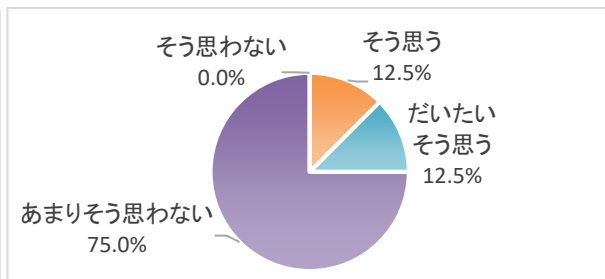
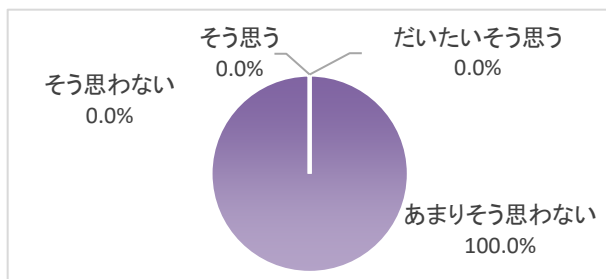
Q10. 自分が今住んでいる地域の行事に参加している



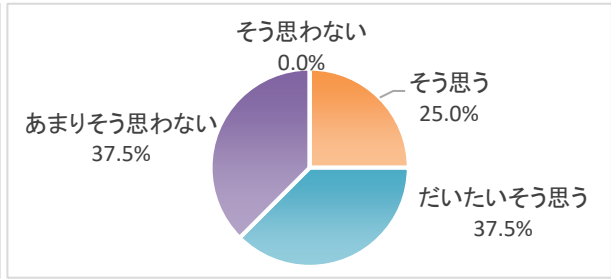
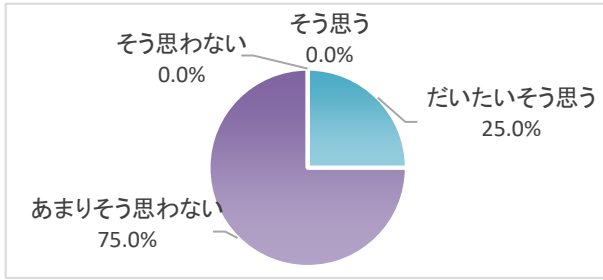
Q11. 自分が今住んでいる地域の課題を理解している



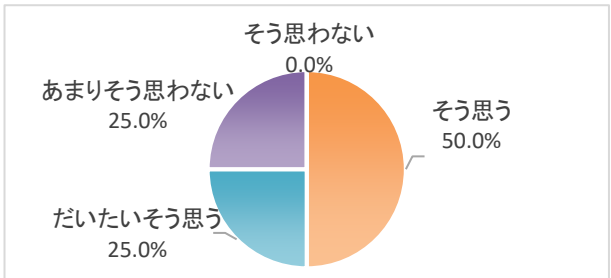
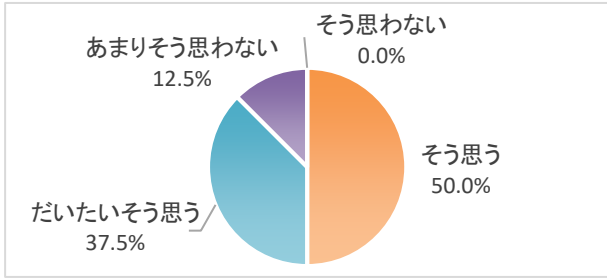
Q12. 世田谷区の抱えている課題について理解している



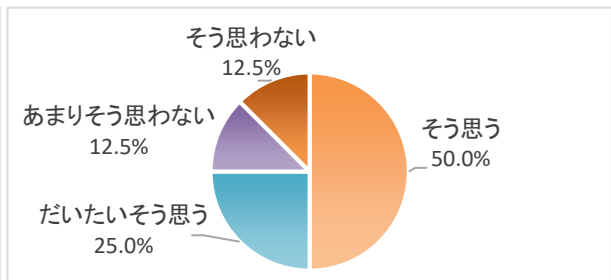
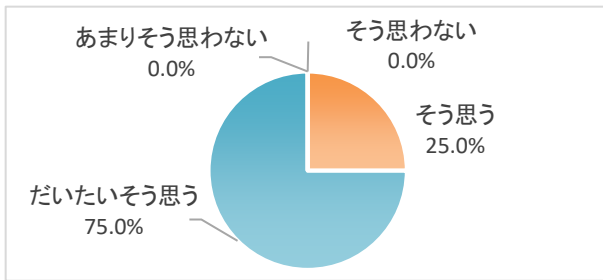
Q13. 自分の住んでいる地域、または世田谷区の課題と質問9の国の課題について関連して考えることができる



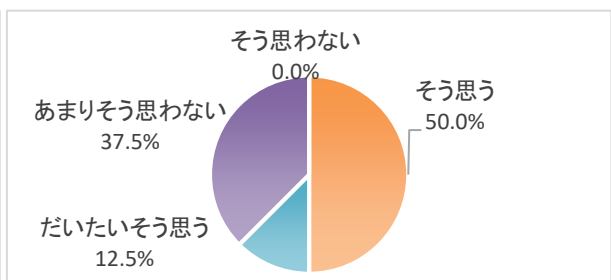
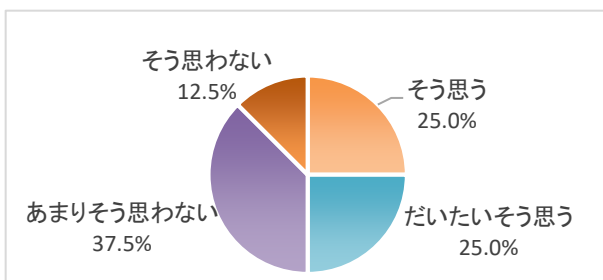
Q14. 多くの発展途上国が抱える課題とその背景を理解している



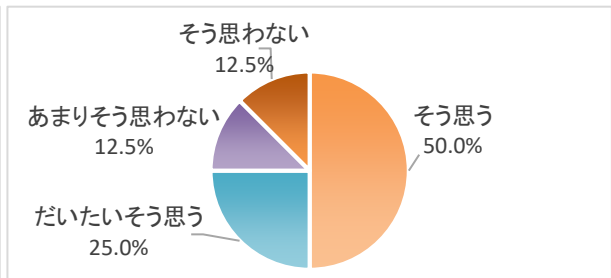
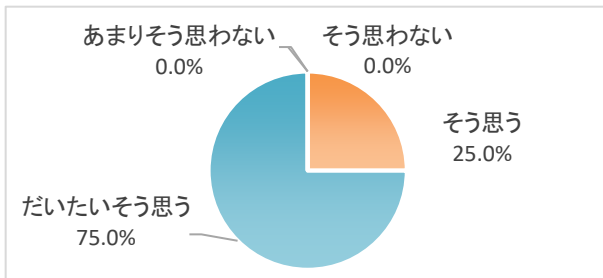
Q15. 多文化共生社会の形成に向けて取り組むべき課題を理解している



Q16. LABOの研究にかかわるボランティア活動に取り組んでいる



Q17. LABOの研究を自分の生活や進路と関連させて考えることができる



《分析》

- ・各項目の中で、協働性を見るものは Q1、3、5 だが、活動前後の伸びは若干にとどまっている。高1高2混合で活動し、外部人材との交流や講義などの活動を行っているが、人数が少ないこともあり、そうした活動が向上実感として伴っていない点が課題となる。探究活動内容の精査を進めるとともに、ブリーフィングや振り返りをしっかりと行わせて、向上を実感させる手立てが必要である。ただ、発表の機会を多くとったことから、Q2のプレゼンスキル、Q3の自己の主張に関する指標は伸びが目立った。
- ・探究スキルの項目となる Q2、4、6は肯定的な評価の増加が目立った。今後はスキルアップの向上実感が、どのような活動に起因するものかなどの「向上実感調査」も行い、さらなるスキルアップを図っていきたい。一方で Q7「情報スキル」の活用については向上実感がそれほど伸びていない。地域のボランティア活動ができなくなっていることもあるが、次年度は今年の「活動の計画」から SNS などを活用した「活動の普及」にすすめることで、こうしたスキルを向上させるとともに、情報機器の扱いについて指導していく。
- ・地域でのボランティア活動を考えさせた活動の成果もあり、地域での実践に関する項目である Q10～13は肯定的な評価の伸びが見られる。ただ、向上実感を得ていない生徒が多いのも事実である。地域での具体的な実践が可能になり、途上国の課題と地域でのアクションをリンクさせる経験ができればこうした指標は向上していくと思われる。グローバルな課題を、地域を視野に活動していくグローバルなものを見方を養えるよう、コンソーシアムを活用して LABO テーマに即した地域活動を開拓していくとともに、課題研究の方向性を地域課題とリンクさせて、地域に発信・成果の還元を行っていけるようにしたい。
- ・LABO4で設けた独自指標は「社会課題の理解」、「活動の実際」、「自己の針路や生活との関わり」である。どれも向上実感の肯定的な評価は6割～7割を超えており、探究活動が生徒のスキルや考え方に変化をもたらしていることが分かる。

《課題》

- a. タイで山岳少数民族の支援活動を行っている NGO のスタッフとの情報交換も、NGO を取り巻く現地の状況の厳しさから実施することができなかった。
- b. ウイルス感染の収束までは、今後もボランティア活動が制限される状況が続くため、それでも実践できる新たなボランティア活動のあり方を、試行錯誤しながら見出して行く必要がある。

(※) Q7 前年度 (2019 年度) と比較してコロナの影響で活動の内容を縮小せざるを得なかったため、情報発信の量も減少したと考えられる。

(4) 生徒の感想

- a. 事前研究や個人研究などでは、情報を比較しながらより正しい必要な情報を選ぶことができる力が身についた。また、発表では自分が得た情報をどうまとめたら相手に分かりやすく伝わるかを考え、発表資料を作成した。グラフや図を用いるなど分かりやすい発表にするための技術が身についた。
- b. 個人テーマについて発表する機会が多かったので必要な情報を選び、まとめる力がついた。また講演会から途上国や難民に関する知識を得ることができた。海外研修がなかったが自分たちで積極的に行動する力も身につけられたと思う。

(5) 全校発表会 プレゼンテーション資料

1

LABO4

多文化共生社会とボランティアの可能性




5年	平地 葵 諸崎 利子	川部 まりあ 富田 凜子
4年	須藤 香子 山田 二湖	塩田 琴音 岸 優貴

2

アドバイザーの先生

こうろき ひろし
興 裕 寛 先生




- 新聞社勤務を経て、民間ボランティア活動維持機関(NPOやNGO組織など)の研究者として国内や海外のボランティア計画の開発に関わられる。
- 現在、昭和女子大学グローバルビジネス学部 特任教授として教鞭をとられるかたわら、NPO・NGOなどの非営利組織、市民教育、コミュニティサービスラーニングなどについて研究をされている。

3

今年度の活動

- ・興裕先生のご講義
- ・グローバル化が生み出す格差問題を描いた「幸せの経済学」

本当の幸せとは、ただ富を沢山持っていることではなく、精神的に豊かであることだと学ぶことができた。



- ・公益社団法人シヤンティ国際ボランティア会ミャンマー事務所長の市川斉さんの特別講義
- ・世田谷ボランティアセンターへの訪問


4

興裕先生のご講義

SDGsやボランティアの意義などについてご講義をいただいています。

今年度の講義内容

- 1回目 「誰のために学びますか」
- 2回目 「SDGs Action」
- 3回目 「SDGs Action」
- 4回目 「市川 斉さんによるご講義」
- 5回目 「SDGs Action」
- 6回目 「世界をよくする会社“企業市民” ～目指せソーシャルなビジネス～」
- 7回目 「難民問題に取り組む視点」
- 8回目 「つなぐ、つなげる、わかちあう」



5

ディスカッションを通して


- ・3つのアクションの中でも、わかちあうためのアクションがまだ起こせていないことがわかった。
- ・3つの観点到活用ができることから、SNSの重要性に気づかされた。
- ・年齢層によってわかちあうための媒体を工夫することが大切。
- ・はじめから大規模な支援を考えるのではなく、暮らしの中で行える支援から始めると良い。

6

特別講義

実施日：2020年10月14日
『ミャンマーにおけるアジア図書館活動』

いちかわ ひとし
市川 斉 さん



公益社団法人
シヤンティ国際ボランティア会
Shanti Volunteer Association

- 公益社団法人シヤンティ国際ボランティア会 ミャンマー事務所長
- 大学卒業後、山村留学指導員で愛知県富山村へ
- 1990年よりシヤンティに参加
- 現地赴任は、神戸、アフガニスタン、ミャンマー
- 今までに20か国を訪問

7

講義を通して



- ・本当の豊かさとは、ただ富を持っていることではなく、助け合いの精神を持ち、周囲の人のことを思いやれることである。
- ・ボランティア活動では、ニュースでは知られない問題にまで目を向けることが大切。
- ・タイだけでなく近隣国の現状や問題点を学ぶことも必要。

8

難民自立支援ネットワーク(REN)



RENとは？

難民、難民認定支援者などとネットワークで結び、難民の経済的、社会的自立を積極的に支援し、彼らの人間としての尊厳を守ることを目標とした特定非営利活動法人のこと

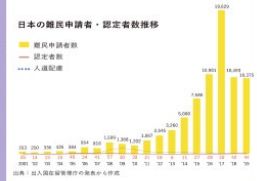
9

難民とは？

1951年の「難民の地位に関する条約」では「人種、宗教、国籍、政治的意見やまたは特定の社会集団に属するなどの理由で、自国に在ると迫害を受けるかあるいは迫害を受けるおそれがあるため、他国に逃れた」人々と定義されている。



2019年末時点で世界人口の1%に相当する7,950万人の難民が存在する。



10

難民自立支援ネットワーク(REN)

活動内容

難民のための日本語教室、個別支援、ヨガ教室、難民と支援者のビーズアクセサリーの制作・販売、その収益による難民支援、カクマ難民の詩集「ママ・カクマ」の出版と、その印税の難民への還元などの活動を行なっている。



ケニア北部で暮らす、カクマ難民の生活や思いがそのまま書かれている詩集。「無言の壁」を自力で乗り越え、彼らの書き続けてきた詩を是非読んでもらいたい。

11

ビーズ・プロジェクト (ビーズアクセサリーの販売)

ビーズ・プロジェクト

日本在住の難民と日本人支援者が一緒にビーズアクセサリーを販売している。

販売収益

- ・製作者をはじめとする難民の生活支援
- ・日本とケニア在住の難民への奨学金 など



ハンドメイド作品やクラフト作品に特化したマーケットプレイス「Creema」というサイトで、「by R」という名前でビーズやアクセサリーを販売している。

あなたのおしゃれが『支援』につながる

12

今後の活動について

これからも続けたい活動

- ・フェアトレード商品の販売
- ・文房具回収

新たに行ないたい活動

- ・SNSのアカウントを作る (活動内容を共有するため)
- ・ミャンマーの子どもたちに送る本の回収
- ・難民の人たちとのビーズアクセサリーの制作



文房具回収とは？
タイ研修に行く際に、全校生徒の皆さんから使わなくなった文房具を回収し、タイの児童養護施設の子どもたちに寄付を行なう活動のこと


4 - グローバルプログラム(2) : SDGs キャリア講演・模擬国連

4-1 グローバルイシュープログラム (SDGs キャリア講演)

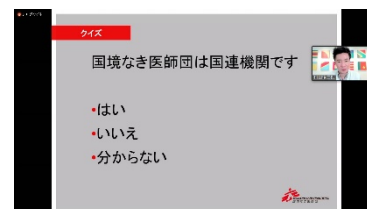
SDGs キャリア講演は、SDGs を主テーマとしたキャリアや諸課題に関する講演を実施し、グローバルな視野を育み将来リーダーとなれる課題解決力、キャリアデザイン力などを身につける活動である。

(1) 今年度の活動

① CM 炎上から見るジェンダーバイアス	
実施日時	2020年11月24日(火)
講師・場所	白河桃子【少子化ジャーナリスト・昭和女子大学客員教授】 場所：創業者記念講堂
対象生徒	1年・2年
内容	<p>「あなたの視点を変えてみませんか？CM炎上から見るジェンダーバイアス」というテーマで、ジェンダーに関する講演を実施。身近なCMや日本におけるステレオタイプから日本のジェンダー不平等の現状についての問題点を、具体例を交えながら分かりやすくお話ししていただいた。</p> <p>アンコンシャスバイアスやステレオタイプなどは男性だけではなく、女性でももっている点について説明がありましたが、指摘されてはじめて気づいた生徒も多い様子であった。</p> <p>LABO2(日本人のジェンダーギャップの研究)のグループの生徒は自分たちのグループテーマに関わる内容であることもあり、「ジェンダー平等のためにできる小さな一歩とは?」「北欧等で結婚をせずに育児をするカップルも多いとのことだが、結婚しないメリットとは?」「日本政府やメディアの対策は?」等、鋭い質問を投げかけていた。</p>
	 

② プレゼンテーションの仕方	
実施日時	2020年12月14日(火)
講師・場所	佐々木順子氏【安川電機/三井住友信託銀行取締役 元マイクロソフト執行役】 場所：1号館3階会議室
対象生徒	LABO生(高校1年：17名 高校2年生：18名) 中学3年生1名
内容	<ol style="list-style-type: none"> 1 プレゼンテーションとは何か？ ・「相手に何かを伝え、動いてもらうこと」・相手に気持ちや内容が伝わらず、行動してもらえなければ失敗である。成功か失敗は相手が決める。 2 プロセス ・メッセージとストーリーを作る 3 プレゼンテーションパッケージを準備する ・プレゼンテーションの種類 ・原稿作成時の注意点・ゴールの設定 4 本番までの準備 ・イメージトレーニング・リハーサル 5 本番 6 そのあと 7 本校生徒のプレゼンテーション 8 講評 
生徒の感想	<p>■プレゼンテーションは誰かに何かを伝え、相手に動いてもらうことである、というお話を聞き、私が今までしてきたプレゼンテーションはそれを出来ていたのだろうか疑問に思った。特に話す言葉は3割、ジェスチャーや服装、明るさが7割と仰っていたことが印象に残った。私は話す言葉を9割、ジェスチャーを1割であったと感じた。ですからジェスチャーをもっと増やし、相手に自分の考えがしっかり伝わるように、準備の時間にさらに時間をかけて本番に臨みたい。</p> <p>■プレゼンテーションの目的は相手に伝えるだけではなく、相手に理解してもらい、実践してもらうことだということを知り、自分のプレゼンテーションの目的をもう一度見直そうと思った。</p> <p>■今回の講演を聞いて、効果的なプレゼンテーションの方法は一つではなく、さまざまなスタイルがあり、聴衆の人数や会場の広さ、プレゼンテーションの内容によって、ベストな方法を選ぶべきだということがわかった。</p> <p>■私はプレゼンテーションと発表の違いをきちんと理解していなかった。しかし今回のご講演で「プレゼンテーションとは相手に何かを伝え、動いてもらうこと」と伺って、ただ自分が調べたことを相手に伝えるだけでは意味がないのだと知ることができた。逆に言うと、相手が動かなければプレゼンテーションは失敗ということになる。今後は話すことだけに専念するのではなく、どうすれば相手にアクションを起こしてもらえるのかを意識したいと思った。</p>

③ 国境なき医師団によるワークショップ	
実施日時	(1)2020年2月13日(土) (2)2020年3月13日(土)
講師・場所	(1)村田慎二郎氏【国境なき医師団日本 事務局長】 (2)白川優子氏【国境なき医師団 看護師/リクルーター】 場所：オンラインによる講演
対象生徒	高校生
内容	<p>今年度はグローバルイシュープログラムの新しい取り組みとして、管理機関が企画するオンライン・ワークショップを行った。対象は本校生徒だけでなく、本事業やSGHなど全国の高校生にも呼び掛けた。国際人道援助とは何か、人道危機にある人びとの暮らしとは、国境なき医師団は何をしているのか、などを考える機会となった。</p> <p>(1)第1回は、国境なき医師団事務局長の村田慎二郎氏が、国際人道援助の世界に飛び込んだ理由やキャリア、人道援助の現場で直面したジレンマなど、これからの将来を担う現役高校生に語りかける形で実施した。</p> <p>(2)第2回は、国境なき医師団で看護師をしている白川優子氏が、国境なき医師団が活動の原則にしている「独立・中立・公平」、看護師として実際の紛争地で体験したこと、日本にいる私たちに何ができるかなどを考えるワークショップを行った。</p>



4-2 模擬国連活動

ここでは、(1) 模擬国連活動、(2) SDMs(Speech, Debate and the Model United Nations Society: 模擬国連活動等を行う生徒達のグループ)の活動の二つを報告する。

(1) 模擬国連活動

2020年度、以下の表にある4つの模擬国連会議に述べ44名の生徒が参加した。今年度の特筆すべき点は以下の3点である。

a. 模擬国連に参加する生徒が増加

今年度はすべての模擬国連会議がZOOMによるオンライン会議となった。休校等のため、活動は後期からとなった。にもかかわらず、例年以上に参加者が増えた。模擬国連を本校で始めて7年目となったが、総合的な学力を必要とする活動に、生徒の関心・意欲が育ってきたと言える。中学生も関心を持つようになったのが今年の特長で、高校生の活動が中学生に波及した成果である。

オンライン会議は自宅から参加できる「気安さ」があるため参加しやすくなる。一方、対面の会議のおもしろさに欠け、オンラインでは話しづらくなる面もある。にもかかわらず、全国レベルでも多くの中高生がオンライン会議を主催し、また参加して1年を過ごした。本校では、延べ44名の中高生が模擬国連に参加した。「模擬国連を止めない!」という標語を掲げ、活動した大会(AJEMUN)もあったが、本校の模擬国連活動も、コロナ禍にあって、止まらずに前進した。

b. 全国大会で「最優秀賞」を受賞

今年高校1年生の大使ペアが全国大会で著しい成績を上げるという快挙があった。

1月の「第4回全国高校教育模擬国連大会(AJEMUN)」で「最優秀大使賞」を初心者議場(E議場)にて受賞した。この2名は、模擬国連は2回目と経験はまだ浅かった。

だが、1回目の会議でコツを掴んで、この大会では議場を大きくリードすることができた。校内で7年間の活動の蓄積があってこそ大賞を授かったと考える。今後は、活動で養った知識やコツを後輩達と共有して欲しいと考えている。本人も「後輩に模擬国連を通して得た心得等を伝えたい」と語っている。(最優秀賞受賞者の「会議体験記」を別途《生徒資料》に掲載した)。



c. 中級レベルの会議の重要性・プログラム開発の必要性

今年度初めて「中級者会議」である「横浜単人会議」を本校が会場校となって開催した。議長・副議長を本校の2年生2名が行い、書記(卒業生)が会議監督(社会人)をサポートして、オンラインで開催した。議長・副議長は共に模擬国連は初めての生徒だったが、準備に励み当日を乗り切った。また、中級者会議は、通常レベルの会議よりも一段やさしい設定になっており、初めての生徒にも参加しやすい。あらためて、中級者レベルの会議を開催する意義を感じた。全国大会の「最優秀大使」も、初めての模擬国連がこの中級者会議であり、そこで、模擬国連の基礎を理解する体験を積んで、全国大会の受賞につながった。

通常レベルの会議の難しさを改善するためにも、中級者会議を開催する機会を増やし、模擬国連で国際問題を考え議論する楽しさや意義を多くの高校生に体験して欲しいと思う。「会議を開催したい」と口にする生徒達も現在、本校で増えている中、「参加しやすい模擬国連会議」を本校の生徒達や他校の先生・生徒達と企画できないか、模索していきたい。

2020年度に参加した模擬国連会議一覧

時期	会議名	議題・主催	本校・参加人数 計（中学+高校）	備考 （表彰など）
10月 (10/18)	横浜隼人高校模擬 国連会議（中級 者レベル）	持続可能な開発のための 教育行動計画の決定 主催：横浜隼人高校& 大学模擬国連・日吉研究 会（中川慶）	16名 （中学6名 +高校10名）	●高校生2名が議長団 （議長、副議長）を担 当。 ●高校生1名がBreakout Room賞（中国大使）
1月 (1/10,11)	第4回全国高校教 育模擬国連大会 (AJEMUN)	人種差別 主催：全国中高教育模擬 国連研究会（全模研）	12名 （高校のみ）	●高校生2名が「最優秀 大使賞」（ニュージーラ ンド大使）を受賞。（E 議場・初心者議場）
1月 (1/24)	Let's MUN! 新年会 議	海洋プラスチック問題 主催：Let's MUN!（高校 生の団体）	4名 （中学2名+高校 2名）	表彰対象者なし。
3月 (3/26,27)	模擬国連・春会議 （2021いきもの会 議）	生物多様性 主催：渋谷教育学園幕張 中学・高等学校	12名 （中学6名+高校 6名）	表彰の設定なし。
会議はすべてオンラインで開催。計4会議・延べ44名の生徒が参加。				

(2) SDMs（スピーチ・ディベート・模擬国連の会）の活動

SDMs(Speech, Debate and the Model United Nations Society) は、2017年11月に有志の会として発足した。模擬国連の活動を軸に、SDGs達成のために、ボランティア活動にも自発的に取り組む。また、日英両言語のディベートや英語スピーチにも挑戦する。会の発足に先立ち、2014～2016年度と3年間、「全日本高校模擬国連大会」に選抜され、出場した。また、2016年度より模擬国連「国連カフェ」を主催して他校を招き、初心者レベルの会議を合同開催してきた。ここでは生徒達が議長団を務め、校内における「模擬国連活動の普及」に寄与している。普及の結果、2019年度にはSDMsの中学1年生が文化祭において「国連カフェ」で他校中学生を招待し自分達の手で会議を運営するに至った。

2020年度は、本校敷地内で隣接する英国系インターナショナル・スクール British School in Tokyo とSDGsテーマで連携をさらに進めた。以下は今年度の活動の表である。

2020 年度 SDMs 活動実績

以下の活動に述べ 82 名が参加。

時期	活動	参加生徒人数	備考
10-11 月	「おにぎりアクション」 (写真を投稿することで、アジア・アフリカの子供の給食費を寄付するソーシャル・アクション)	SDMs 企画生徒 11 名 (中 2～高 2) +文化部+ブリティッシュ・スクール・イン・トーキョー	計 100 名以上の両校の生徒がアクションに参加
11 月	昭和祭(文化祭): SDGs in English : Weaving a Web of Life Together: Creating a Better World BST (ブリティッシュ・スクール・イン・トーキョー) とコラボレーション	SDMs 16 名 (中 1～高 2) BST 5 名	SDGs に関する英語の発表を両校が相互に行う
2021 年 2 月	「ユネスコスクール課外授業」企画	生徒企画 SDMs 4 名 (中 1～高 2) +参加者 13 名	テーマ「幸せへのルール」 オンライン・ワークショップを企画実施
2021 年 3 月	BST 向け昭和紹介ビデオを制作 (英語)	SDMs 7 名 (中 1～高 2)	BST の全クラスで視聴

SDMs メンバー

中学 2 年生 : 8 名、中学 3 年生 : 19 名

高校 1 年生 : 3 名、高校 2 年生 : 4 名、高校 3 年生 : 4 名

《今後の課題》

今後の課題は、生徒が主体的にリードし運営する活動を増やしていくことである。すでに、自主企画の萌芽も生徒の中にはあり、2020 年度も「ディスカッション：オンライン授業について」という自主企画を生徒が実施している。そうした力を養う活動に育てることを志したい。そうすれば生徒達の自主性・創造性・企画力・リーダーシップ・協働性・問題解決力・批判的思考力を育成し、社会とつながる活動となっていこう。

このグループに集う生徒は、「SDGs テーマの解決を通じた社会貢献」に関心を持っている。模擬国連で、他校の生徒と国際問題を議論することで得られる力を、自分達の周囲の問題および実社会の問題を解決するために使っていこうとする---生徒達のそうした意欲を引き出し、はぐくむ活動へと育てていくことを模索していきたい。

《生徒資料》

2017 年 11 月に SDMs(「スピーチ・ディベート・模擬国連の会」という有志の会が発足し、現在約 30 名がメンバーとなって模擬国連やボランティア活動、英語スピーチや朗読などを中心に活動している。今年の大きな活動は、昭和祭で BST (British School in Tokyo) と初の合同プレゼンテーションを実施し、双方の交流

が進んだことである。“Collaborating for a Better World~ Creating a Web of Life Together~”と題し、持続可能な世界を求めて活動する両校生徒の取り組みや、朗読を披露しあった。また、模擬国連の全国大会で、高校1年生の大使ペアが見事「最優秀大使賞」を受賞。模擬国連活動7年目を迎えた今年度、これまでの学びの蓄積の上に大きな成果を上げることができた。

これまで50以上の模擬国連の会議やワークショップに参加し、初心者向けの会議も自分達で運営する力も養っている。また、メンバー以外の生徒達の間でも模擬国連への関心も広がり、会議参加者が増えている。加えて、今年は、「おにぎりアクション」など国際貢献のボランティア活動も、文化部やBSTと協働して全校生徒に呼びかけて行うことができ、平和で貧困のない世界への生徒達の希望を紡ぐことができた。

コロナ禍にあって、活動が制限されたものの、できることを積み上げようと一歩一歩進む生徒達の思いがこうして実ってきた。「持続可能な開発目標」Sustainable Development Goals (SDGs)の達成を促す学びや行動につながる活動を目指している。

ここでは、① 昭和祭の報告とスピーチ、② 模擬国連会議に初挑戦し、全国大会で「最優秀賞」を受賞する等、活躍した生徒達の体験記を集めた。

① 文化祭：SDMs × BST (両校の協働企画)

◆報告 高校2年 山本寛子 (文化祭・企画リーダー、総合司会)

“Collaborating for a Better World: Creating a Web of Life Together”

We, "SDMs (Speech, Debate, Model United Nations)", which is a volunteer group of our school, have been working on SDGs by actively participating in projects to address social challenges. This year, we have been working on collaborative activities with the neighboring international school, British School in Tokyo (BST).

At Showa Festival in November, the first ever presentation session between BST and Showa was held, and the gathering was broadcasted thorough YouTube. Our topic was “Collaborating for a Better World: Creating a Web of Life Together”. Sixteen students from Showa and five students from BST participated and we shared with each other what we had been doing to promote SDGs in both English and Japanese. From BST, we invited ‘Well-being Ambassadors’ and they shared with us some well-being exercises to focus on breathing and to reflect on our week. In addition, we invited a special guest, Mr. Yoshitsugu Yamada, a chef of "SDGs food". He talked about "SDGs food that can be cooked at home" and we learned through food, we can contribute to SDGs. Holding this collaboration event was the first experience for all of us and I hope that our efforts have made a positive influence and we will continue to work more together to cultivate international understanding between the two schools.

Personally, I myself was in charge of the gathering and I want to share my experience, and give some insight into the experience of the Showa Festival. There were more challenges than I expected, so I was busy organizing and working efficiently as the leader. Because of the COVID 19, there were a lot of restrictions and we had to manage the project via live broadcasting. Leadership is a challenging thing to do and as a first time leader, I honestly had no idea about leading a group. I tried to motivate or encourage people rather than tell them what to do. I was anxious about whether I could get participants to follow. However, with the collective effort of each student, we had a lively session all together. I thank everyone for bringing their expertise and experience around the table and engaging in such fruitful, constructive and open exchanges throughout the Showa Festival.

I was reminded through this experience that cooperating with each other is the first step to tackle social issues.

At the end of the event, we all recited the famous poem "Kurikindi: A Drop of a Hummingbird". The poem urges us to think about what we can do to engage in SDGs goals. I would like to develop more collaboration between our school and BST. I will be honored if our collective efforts have motivated anyone to think more about SDG goals and act to bring about positive changes.

Kurinkini: A Drop of a Hummingbird 『ハチドリのひとしずく： ～いま、私にできること』

-この物語は、南アメリカの先住民に伝わるお話です-

森が燃えていました

The forest was on fire.

森の生きものたちは われ先にと 逃げていきました

All of the animals, insects and birds in the forest rushed to escape.

でもクリキンディという名のハチドリだけは いったりきたり

くちばしで水のしずくを一滴ずつ運んでは 火の上に落としていきます

But there was one little hummingbird named Kurikindi, or Golden Bird, who stayed behind. This little bird went back and forth between water and fire, dropping a single drop of water from its beak onto the fire below. 動物たちがそれを見て 「そんなことをして いったい何になるんだ」といって笑います

When the animals saw this, they began to laugh at Kurikindi.

"Why are you doing that?" they asked.

クリキンディは こう答えました、「私は、私にできることをしているだけ」。

And Kurikindi replied, "I am only doing what I can do."

◆報告 「4年間の模擬国連活動を振り返って」 高校3年生 森 桃子

Model United Nations, or MUN for short, is an activity where students play a role of one country's delegate to think about how to solve international issues. Once students join MUN, they will be into it, because it help them become brave in expressing ones' ideas in public. With MUN activities, you are constantly thinking how to achieve SDG goals.

Four years ago, I was captured by MUN. I still remember the scene, where fifteen to eighteen years old teenagers were discussing the refugees issue with passion. After that, I started MUN activities at Showa, actively participating in various MUN conferences, including the Japan national tournament.

While I was in Prague, Czech Republic as an exchange student, I had a privilege to attend a European MUN, which took place in Prague. Returning from Prague last year, I was able to serve as an executive officer in the Japan national tournament, called All Japan Educational Model United Nations, AJEMUN in 2019.

Through MUN activities, I came to be more aware that millions of people are still suffering from food shortage, lack of medicine, conflicts and so on. And I recognized that providing better education to children is one of the most effective ways to make this world more peaceful.

Through all these experiences, now I would like to work in the field of education with an international organization for children who cannot get enough education, specifically Roma children, an ethnic minority in Europe. This will be my way to contribute to SDGs, especially through peace-making.

◆「模擬国連に初挑戦」：高校生への体験記 高校2年生 塩谷 日菜・石川 響

「第4回全国高校教育模擬国連大会(AJEMUN) 最優秀大使賞を受けて」

2020年の秋に、もともと予定していた留学がコロナウイルスによって頓挫し、なにかしら国際的な視野に触れる機会を持ちたいと思いました。そのような時に「第4回全国高校教育模擬国連大会(AJEMUN)」があることを知り、この大会への参加を決意しました。

今会議ではニュージーランド大使として、人種差別の撤廃のためにはどうしたら良いか考えました。大会前は、ニュージーランドという国について調べ尽くしました。PPP (Position and Policy Paper: 国の現状と政策立案) は調べる内容が大体決まっています。その空欄をすべて埋めるために、時に日本語以外のサイトを調べ、国連の公式サイトの記事や決議文に目を通すなど、普段は絶対に読むことのない文章に触れました。調べていくと、ニュージーランドという国は世界的に見ても人種差別解決に非常に関心が高い国だということが分かりました。特に先住民族とパケハ(マオリ族の言葉でヨーロッパ人)とは国際的な見本になるほど良好な関係を作ってきているのです。それを知った時、「人種差別」という議題の会議で主導権が握れることを確信しました。

BG (Background Guide: 議題解説書) の論点を何度も読み返し、自国に対して大きなメリットがある。というより、自国に特にデメリットがなく、より多くの国から賛同を得られるという部分に重きを置いた決議文を作りたいと、NP (Negotiation Paper: 交渉ペーパー) 作成に励みました。

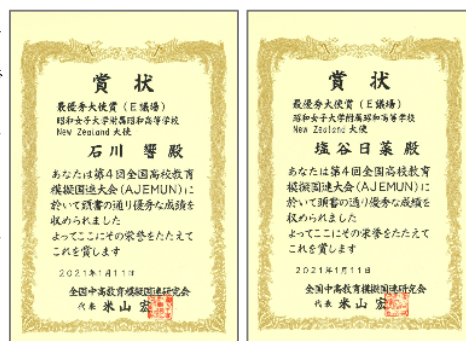
初日の会議では、自国で特に問題になっているヘイトスピーチと教育という2つの論点をペアと別れて分担して、各自が担当しました。多くの国の大使がペアでブレイクアウトルームにいるところに、ひとりきりで参加し、意見することはとても不安でした。しかし、ペアも別の部屋で頑張っているのだから、と互いに信頼しあい、それぞれで別のグループでWP(Working Paper: 作業文書)を作成することができました。さらに、2日目では前日の不安を夜のうちに解消したうえで、それぞれのいたグループを仲立ちして、両グループで1つの決議案をまとめて作成するに至りました。このことは大きな成功要因だったと思います。

一方で、交渉のコツを知ることができました。約50か国が集まり1つの結果を出すための話し合いをするというのは当然難しいことですが、そこにすべての国の意見をまとめることができる一つの国が出てくれば、交渉はスムーズに進みます。

しかし、今大会では反対意見が出ないことに気を使い、すべての国の意見を平等に聞くばかり、うまくまとまらず、具体的なことまで十分な話し合いができませんでした。このことは次回に生かしていきたい反省点です。また、周りの国の意見をまとめる国になるためには、積極的に発言し、何が必要で何が必要でないかを判断し、時に切り捨てて会議を進める力が必要だということ、加えて、事前の周到な準備が大切なのだということを学びました。

今回「初心者議場」に参加してみて、大会の雰囲気と進め方に慣れ、「最優秀大使賞受賞」という大きな自信を持つことができました。機会があればぜひ「一般議場」での会議にも挑戦してみたいです。

最後になりましたが、先生方、大会運営の皆様、そして協力して話し合いを進め、決議案を採択するに至った全大使の皆様、ありがとうございました。(大会公式報告書・掲載文)



◆「議長団と全国大会を体験して」 高校2年生 石田 夏鈴・花岡 真理佳

今年、自分への新たな挑戦として模擬国連に二度参加させてもらった。一度目は議長団「フロント」の副議長として「持続可能な教育作り」を議題に、二度目はイラク大使として「人種差別」を議題に取り組んだ。これまで全くと言っていいほど模擬授業に触れてこなかった私は終始戸惑いながらも、パートナーの花岡さんと協力しながら進めて行くことができた。

横浜隼人高校の模擬国連に議長団「フロント」の副議長として参加した際、私は多くの人をまとめる大変さや、教育に対する各国大使の主張から様々な考えを学んだ。

また、イラク大使として、全国大会に出させてもらった時は、たくさんの刺激を受けた。多くの人が初心者にも関わらず、皆積極的に自分の意見を発信していた。イラク大使としては主に宗教に関する人種差別を重要論点として考えた。近年、宗教に対して偏見を持つ人が増えていることから、国を問わず、義務教育過程時に宗教の授業を必修にすべきだという主張をした。最終的に自分たちの考えを最終成果文書である「決議文」の一部に、文言として入れることができた。

二度に渡る模擬国連の参加は、私に世界情勢への一層の興味関心を与えてくれた。同時に、自らの意見を積極的に発信し、互いに協力し合うことがより良い世界を作るのだと強く感じた。今後の生活や学びに活かしていきたい。[5G・石田 夏鈴]

私は、模擬国連に参加して違う視点から問題について考えられるようになったと思います。全国大会の議題は人種差別でした。私は人種差別と聞くと、一番には黒人と白人の差別問題が浮かびます。しかし、私が担当したイラクではイスラム教やクルド人に対する差別が問題です。世界には人種、宗教、民族などを理由に差別されている人がいて、そして教育現場、SNS、など差別が行われている場所や形は本当に様々であることに気づかされました。自分の周りでも無意識的に差別してしまっていることがあると思います。物事をひとつの視点から考えるのではなく、反対側からも考えて柔軟な思考や発想を磨いていきたいと思います。[5G・花岡 真理佳]

「3月模擬国連・春会議に参加して」

3月26日・27日に開催された「模擬国連・春会議（主催：渋谷教育学園幕張中学高等学校）には、本校から12名（中学生6名、高校生6名）が参加。うち10名が初挑戦の生徒達であった。議題は生物多様性。生徒の感想を紹介する。

◆高校1年生 間嶋妃葉

1. 今回参加して、良かったこと

普段は関わるができない他校の生徒さんと交流することで、様々な意見を聞けたり、どのように周りの人に発言していけば良いのかを学ぶことができました。

2. 学んだこと・気づいたこと

私自身あまり発言をするのが得意ではないので、どうしても周りの意見に合わせようとしてしまいますが、他校の生徒さんから、自分の意見を言ったり質問をすることは悪いことではなく、理解を深めていく上でとても大切なことだと学びました。

3. これからの生活で活かしたいこと／次はこうしたいこと

今回の模擬国は初めての参加で、話についていくのが精一杯でしたので、事前準備や調べ学習をもう少し細かく行い、自分の担当国の大使としての意見を発信していきたいです！

◆高校1年生 牧野桜子

私は今回を含め2回模擬国連に参加させていただきました。

初めて模擬国連に参加させて頂いたときは周りの人の意気込みの違いや積極性に圧倒されてしまいました。

そのため今回は前回よりは発言回数を増やすという目標をもって取り組みました。

何か国かの大使さんがみんなを引っ張ってWPを作成しました。そんな中、引っ張って下さった大使さんを見ているとリーダーシップをとるには仲間が述べたことを速やかに理解しまとめる必要があるということに気づきました。これからの学校生活また会社に勤めたときなどにリーダーシップを発揮する機会は沢山あると思うので、何度も何度も模擬国連に参加して毎回毎回の模擬国連で得たものを今後の生活に活かしていきたいです。

また私はいつか模擬国連で同じ政策の国々を引っ張って、賞を取ってみたいです。

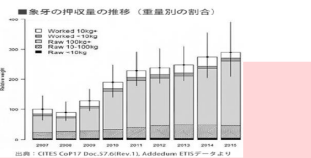

《生徒作成資料》

中国 ～いきもの会議～ 政策とスタンス

昭和女子大学附属昭和高等学校 間嶋 妃葉・丸山 華



【論点1:絶滅の恐れのある野生の取引について】

スタンス:ワシントン条約締結に賛成の意を示す
政策:『象牙の国内取引を終焉させる』ため、2017年末までに自国内の合法的な象牙取引を終了させる。





【論点2:趣味目的の狩猟(トロフィーハンティング)について】

スタンス:トロフィーハンティングについて反対の意を示す
政策:森林伐採などを禁止することで、ジャイアントパンダなどの野生動物を保護する。



【論点3:生物多様性の保護地域について】

スタンス:絶滅危惧種の保護(特にセンザンコウ)に対して前向きな姿勢
政策:漢方薬などの伝統薬の原料として利用可能な動物のリストからこのセンザンコウを外す。



5- ローカルプログラム：サービスラーニング

5-1 サービスラーニング

(1) 目的

地域でのボランティアなど社会参与型の体験学習を通して、地域やコミュニティで具体的に役割を担える人材を育成するために必要な主体性・協調性・責任感・ホスピタリティなどの人間性を高める。地域社会の課題解決に向けて、生徒自身が世田谷区や地域社会との連携を図りながら、アクションプランの策定・実施を目標とする社会貢献活動型探究学習を行う。地域での活動とアカデミックな学習、グローバルな考え方や課題意識を連動させ、多面的な視野をもって地域やグローバル社会で貢献できる力を育む。

(2) 概要

サービスラーニングプログラムを受講した全学年生徒を対象に総合的な探究の時間及びロングホームルーム、課外活動を使って2年間継続で実施する。

1年次の前期は「アカデミックスキルトレーニング(AST)」として論文作成や協働型課題探究活動の手法などを学び、活動の基盤となる探求スキルを学ぶ探究の基礎学習を行う。サービスラーニング選択者はASTに加えサービスラーニングの手法や「lateral thinking」を学ぶ時間を設け、社会的なスキルについての基盤も育成する。

1年次は「サービスラーニングプログラム」は地域課題の発見と研究課題の設定を目標に、課題発見のための複数回のボランティアとその振り返りを行う。2年次には自ら地域課題の解決につながる社会参与アクションやプランを策定し、その実施を通じて社会課題を解決するプログラムの実施段階に入る。生徒にはグローバルな視点、地域での実践を取り入れた活動を推奨し、広い視野で考え、地域と良好な関係を構築しながら地域のための行動できるようなプログラムの開発を目指す。

活動先は社会福祉法人世田谷ボランティア協会ボランティアセンター、地域共同学習実施支援員との協力のもと高大連携、産官学のコンソーシアムを中心に提供できるようにし、世田谷区や区内の諸団体の抱える課題や問題などを共有し、地域に根差した課題解決に繋がるようにする。

サービスラーニングのテーマは「子ども教育」「保健医療・食」「グローバル」「自然・環境」「介護・共生」「その他」の6つの大テーマを設定した。

(3) 活動の詳細 ～1年生～



講演 「～私が変わる、社会が変わる～ サービスラーニング」 (講義動画)	
実施日時	2020年6月30日(火) 5時間目
講師・場所	興梠 寛 先生(社会福祉法人世田谷ボランティア協会理事) ・昭和女子大学附属昭和高等学校
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・講義動画(約30分)を4教室に分かれて視聴。 ・視聴生徒数:90名 ・資料:パワーポイントのスライドをプリントアウトしたもの <p>【講演内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生が初めてサービスラーニングに取り組むにあたっての心構え、ボランティア活動やサービスラーニングの意義や学びについて。 →高等教育機関で学ぶことができない世界の子供たち、子ども食堂、国連SDGsなどの説明。 →マザー・テレサ、ジョン・スタインベックについて。 →“ボランティアの父”アレック・ディクソンについて。 →ボランティア活動やサービスラーニングの活動には、他者のために役立ち、自分が必要とされている喜びがある。


「主体的学習者育成プログラム」 (産業能率大学開発のプログラム)	
実施日時	2020年8月25日(火)・9月1日(火) 5・6時間目
講師・場所	昭和女子大学附属昭和高等学校
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回(8/25):問題発見編 ・第2回(9/1):問題解決編 ・参加生徒:90名 ・パワーポイントの資料を見せながら、日常生活の中から問題を発見するプロセスや、発見した問題や課題を解決に結びつけていくプロセスについて学んだ。 ・プレアンケート(第1回実施直前)、ポストアンケート(第2回終了後)を実施した。 ・生徒たちが知っている日常生活に関わる具体例を示したうえで、課題に取り組むことができ、グループワークに積極的に取り組む姿勢が見られた。


講演 「 安心安全の住みやすい街づくり 」 （地域活性・街づくり）	
実施日時	2020年10月20日（火） 5・6時間目
講師・場所	本杉 香 様（明大前ピースメーカーズ） 地域協働学習支援員 ・昭和女子大学附属昭和高等学校
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・参加生徒数:13名 ・パワーポイントを用いて配付資料をもとに活動内容について、具体的な説明がされた。また、その活動を行うことでどのような成果があげられているかについての講演であった。 ・自分たちの街はまず自ら守っていこうというコンセプトで活動していることではあるが、トラブルは必ず起きる事なので、自分の身を守ることも大切であるということも学ぶことができた。 ・特に、昼間の活動は多くの人の目があるが、夜の活動・人目の少ない場所での活動については細心の注意を払う必要がある。 ・現在の最大の問題点は、ネット犯罪である。……対応が難しい。 ・住民がその街に誇りを持てるようになること、きれいな街であること、楽しいイベントを企画していく街であることなど、生徒たちが今後活動していきやすいように、目的や課題が提示されての話であったため、生徒は大変熱心に話を聞いていた。




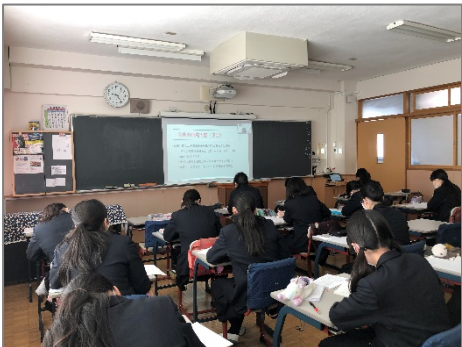
講演 「 生物・環境 」 （環境問題）	
実施日時	2020年10月27日（火） 5・6時間目
講師・場所	竹内 明彦 様（世田谷区 環境政策部） 地域協働学習支援員 ・昭和女子大学附属昭和高等学校
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・持続可能な社会を形成していく大切さについて。 →未来の地球環境のことを考えない生活を送ると、環境破壊、資源の枯渇などの問題が発生することを、近年の猛暑や砂漠化などの具体的な環境問題を例にご説明くださいました。 ・世田谷区の地球温暖化に対する取り組みについて。 →世田谷区では家庭からの二酸化炭素排出量が最も多い。区の対策として、省エネポイントアクション、プラスチックスマートプロジェクトなどを行っている。 ・社会の諸問題を解決するために。 →課題の抽出、要因分析、改善目標の設定、目標達成のための計画が必要。参加した生徒たちは、サービスマーケティングを行ううえでもこれらの点を意識して活動すべきであると学ぶことができた。

講演 「食品ロスとフードドライブ」 (ゴミ問題)	
実施日時	2020年10月20日(火) 5・6時間目
講師・場所	太田和 信也 様(世田谷区 清掃・リサイクル部 事業課) 地域協働学習支援員・・・昭和女子大学附属昭和高等学校
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・参加生徒：1年生6グループの生徒計26名。 ・資料：パワーポイントのスライドをプリントアウトしたもの。 <p>【講演内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・太田和様の略歴に関する自己紹介と、清掃・リサイクル部事業課の業務に関するご説明をいただきました。 ・世田谷区のゴミ処理問題現状について。 <ul style="list-style-type: none"> →人口増加に伴うゴミ排出量の増加、ゴミの内訳として、未使用食品の割合が多いことについて。 →ゴミ処理の費用について。ゴミの処理にも莫大な費用がかかるが、それ以上にリサイクルの費用が高いため、そもそもゴミを出さないことが何よりなのだと学んだ。 ・日本のフードバンクの概要と、世田谷区のフードドライブの取り組みについて。 <ul style="list-style-type: none"> →清掃・リサイクル部事業課が窓口となり、フードドライブのイベントを受け付けている。 ・参加した生徒たちは、フードドライブ以外の方法でも、食品ロスを減らすための幅広い活動ができないか、太田和様との質疑応答の中で活発に意見を出していた。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>

ヒアリング会 「活動内容・希望活動場所等についての相談」 (子ども・教育)	
実施日時	2020年11月2日(月) 15:50~17:10
講師・場所	松田 妙子 様(NPO法人せたがや子育てネット 代表理事) 地域協働学習支援員・・・昭和女子大学附属昭和高等学校
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・参加生徒：1年生11グループのチーフ・サブチーフ生徒22名。(+2年生2名も参加) ・各グループ5分程度のヒアリングを実施。 ・松田様の略歴に関する自己紹介。 ・検討中の活動内容、活動場所について相談(全グループ)。 <p>→松田様がその場で提案してくださったケースと、後日メールにて連絡いただけるケースあり。</p> <p>→松田様とのメール連絡の方法についての確認。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後、各グループのチーフ・サブチーフ・担当教員が松田様にアドバイスをいただきながら活動内容や活動場所を模索していく。 <div style="text-align: right;">  </div>

ボランティア活動 「せたがやこどもフードパントリーの食材仕分けの手伝い」	
実施日時	2020年11月14日(土) 14:30~16:00
講師・場所	せたがやこどもフードパントリー 「おでかけひろば ぶりっじ@roka」UR 芦花公園団地 11号棟 1階
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・地域協働支援員の松田妙子様で紹介で食材仕分けの作業に参加。 ・参加生徒：1年生4名(子ども・教育グループ) ・農協から届けられたたくさんの野菜の仕分け作業。 ・その日の配付作業については、利用者の方への配慮から、生徒たちは加わらない方がよいとのことで、配付前の仕分け作業を行った。 (利用者の中には、あまり顔を見られたくないと思う人たちがいるとのこと) ・現場で作業されている方は、比較的高齢者の方が多かったため、たくさんの野菜を運んで仕分けする作業の手伝いについてとても喜んでくださった。 ・参加した生徒は、今後も仕分け作業の手伝いを実施していきたいと考えている。 

講演 「世田谷区の国際施策の取り組み」 (多文化共生・グローバル)	
実施日時	2020年12月16日(水) 15:45~16:45
講師・場所	松田 京子 様(世田谷区 生活文化政策部 国際課) 地域協働学習支援員 ・ ・ 昭和女子大学附属昭和高等学校
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・参加生徒：1年生6グループの生徒計26名。 ・資料：パワーポイントのスライドをプリントアウトしたもの、イベントのチラシ。 【講演内容】 ・世田谷区の外国人人口について。 →現在の国籍、年代の外国人が多く在住しているかだけでなく、増加率が著しいのはどこの国か、など詳細にご説明いただいた。 ・世田谷区の国際施策における三つの柱について。 ・世田谷区の三つの姉妹都市について。 ・世田谷区が行っている多文化共生のための取り組みについて。 →行政情報の多言語発信と、やさしい日本語について。 ・やさしい日本語で行政情報を発信する際のポイントについて。 →話すときはゆっくり話す、難しい言葉は避ける、など具体例を交えてご説明いただいた。 「はさみの法則」について。 ・世田谷区の国際交流のための拠点について。 ・参加した生徒たちは、世田谷区の国際交流のための取り組みや国際交流センターの存在を知ると同時に運営していくうえでは人材の確保、資金の活用などの面で課題があることを学んだ。

「1年サービスラーニング報告会」	
実施日時	2020年2月5日（金）・6日（土）
講師・場所	・昭和女子大学附属昭和高等学校
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・総合的な探究の時間の学習発表の一環として実施。 ・各グループ5分間 全20グループが発表。 ・本科コース（4クラス）の生徒を対象に ZOOM にて発表を行った。 ・これまでの活動に基づき、課題・気づき・実践・未来像について、4枚のスライドにまとめ発表を行った。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>

（4）検証・評価（成果と課題）～1年生～

≪成果≫

■伸ばすことができた点

- a. メールや電話で外部の方たちと連絡を取ることが初めてで、その際の文面の作り方や説明の仕方を学ぶことができた。
- b. 世田谷区の地域協働学習支援員の方々に講演していただく機会を設けることができ、世田谷区における様々な組織、団体の地域活動について、関心を深めることができた。

■各活動での具体的な取組みとその成果

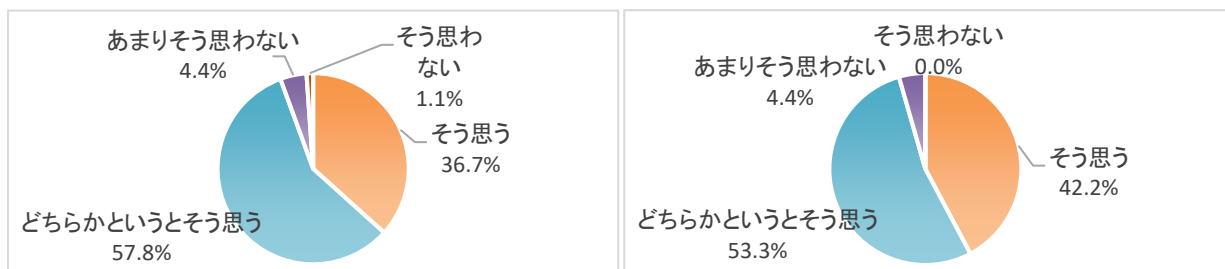
- a. 今年度外部で活動したのは全20グループの中2グループだけとなった。活動を行った2グループは、それぞれ別のフードパントリーで食品の仕分け作業を1回ずつ実施した。
- b. フードパントリーの作業の手伝いに参加して、作業を行っている方たちの中に年配の方々がいることがわかった。このことから、高校生ボランティアなどの若手の協力が現場には必要なのではないかと考え、今後も継続することを検討している。

《アンケート結果》（左が活動前、右が活動後）

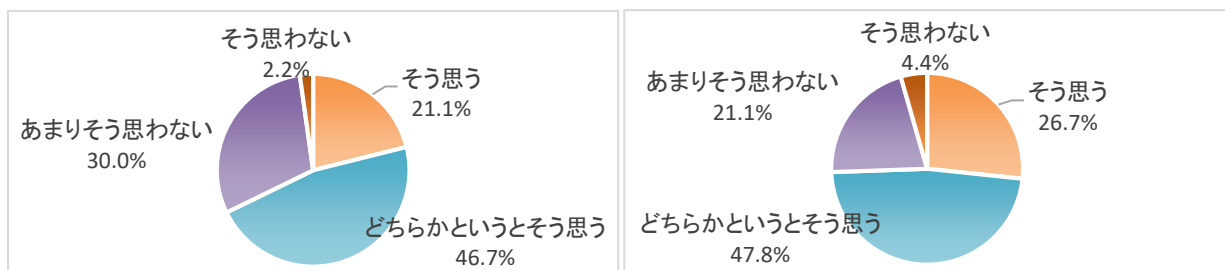
Q1.日本や地域で起こる問題について新聞やインターネットなどから情報を集めて理解する努力をしている



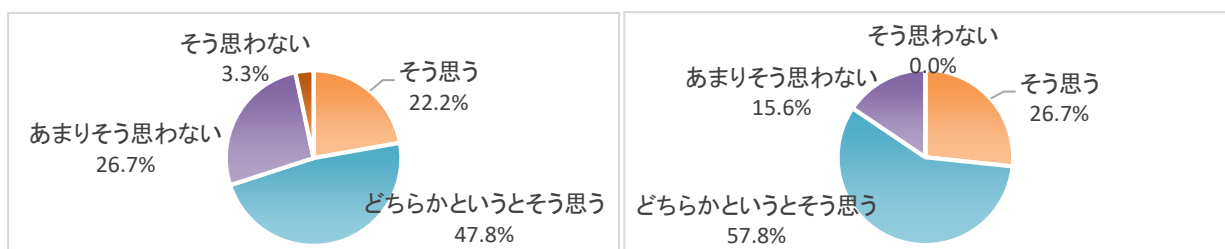
Q2.自分たちの身近なところで起きている出来事や課題に興味を持ったり理解しようとしている。



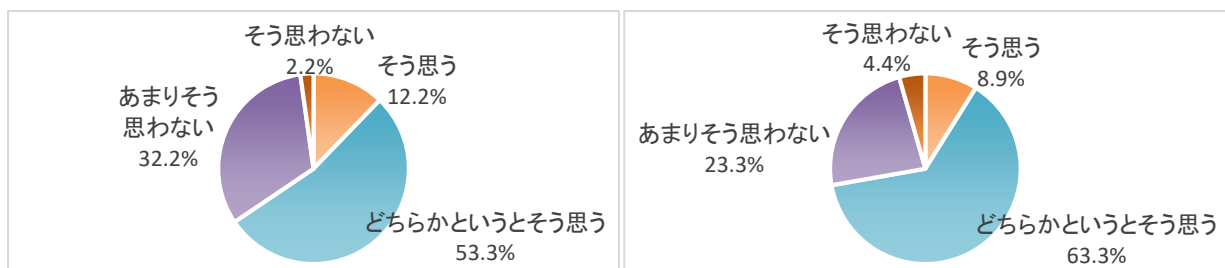
Q3.世田谷区で起きている出来事や課題に興味を持ったり理解しようとしている。



Q4.自分は責任のある社会の一員だと思う。



Q5.自分たちの力で国や地域社会を変えられると思う。



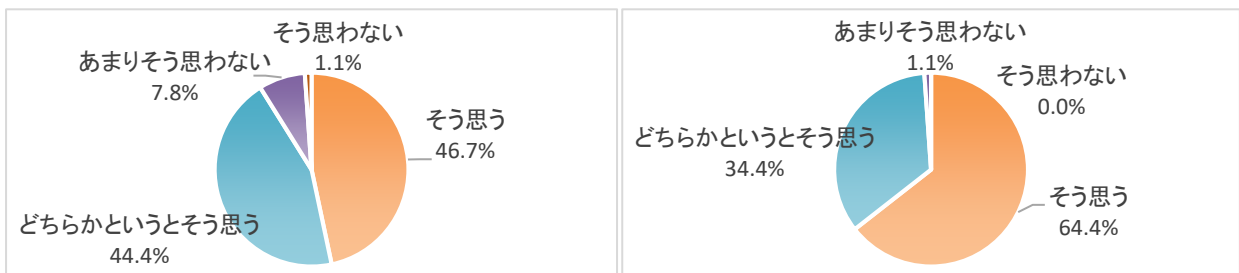
Q6.社会問題について周りの人と積極的に話すことがある。



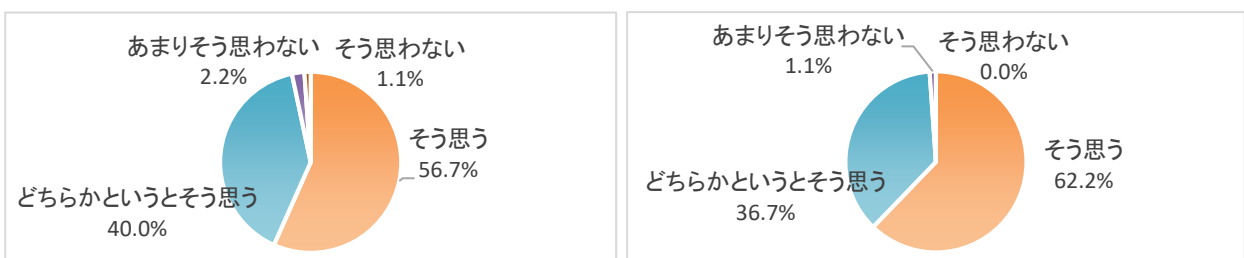
Q7.身近な問題を解決するために現在自ら行動している。



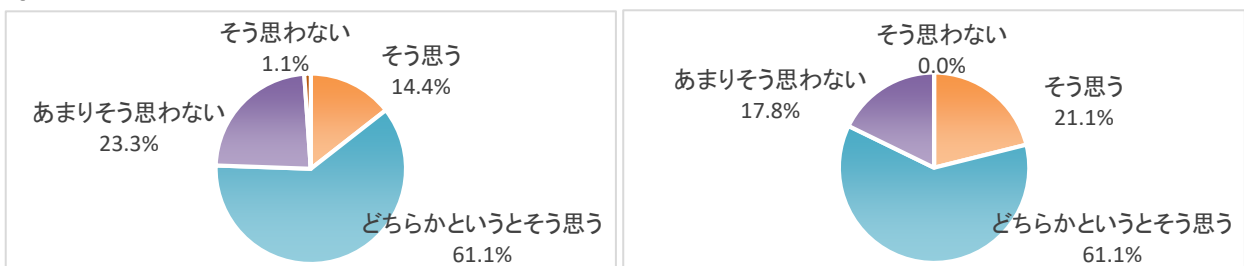
Q8.グループのメンバーと協力して問題解決に取り組むことができる。



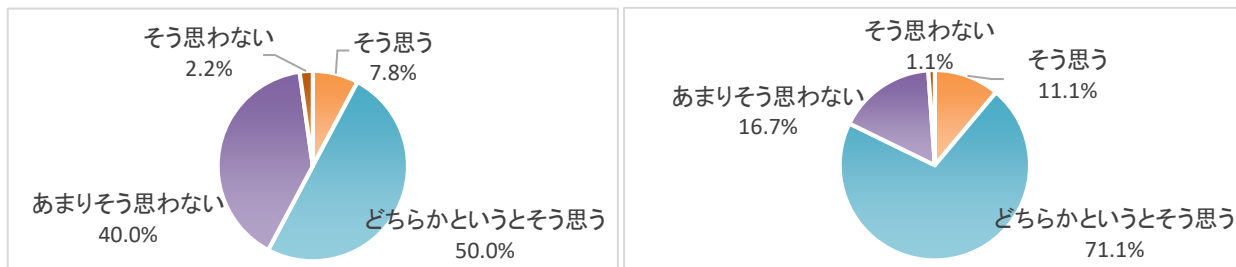
Q9.自分の考えと異なる人と、共通の問題解決のために協力したり、異なる意見を受け入れることができる。



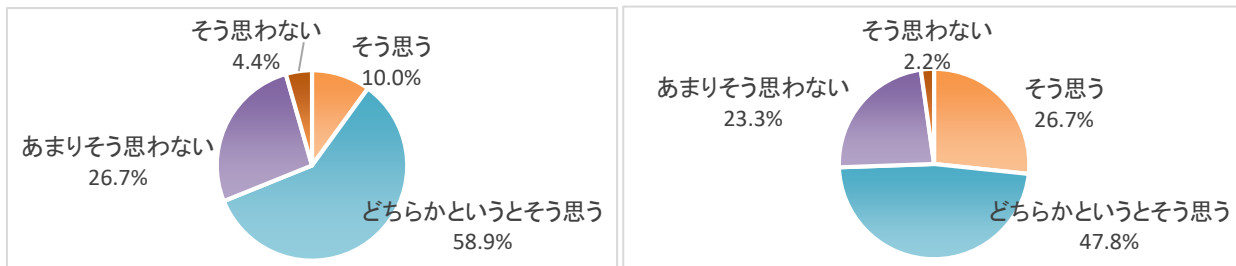
Q10.問題を解決する際、困難に直面した際などに、いろいろな発想やアイデアを積極的に出すことができる。



Q11.収集した情報や自分の考えを論理的にまとめることができる。



Q12.NGO・NPO の活動や社会貢献に興味がある。



《分析》

- ・協働的な活動スキルを見る項目は Q2～6 であるが、おおよそ向上実感が増加していたり、高水準を維持している。地域に貢献する活動をグループで考え、地域の人と言葉を交わしながら活動のスタートを切ったことで、協働的な学びに関する意識向上の実感を伴って探究活動を進められているといえる。ただ、Q3「世田谷区の課題への興味」に関しては、都内にある私立学校ということで、世田谷区外から通学している生徒が多く、世田谷区が地元であるとの意識が薄いことが課題となっていたが、それを裏付ける結果となった。今年度は世田谷区をまず知る活動を 4 月のオンラインでの活動の時期に設定してはいたが、座学が中心となってしまったこともあり、こちらが期待していたような伸びがアンケート上では見られなかった。次年度は高1の前期に「世田谷区を知る」ための探究基礎活動を強化する予定であり、引き続き、世田谷区への関心度を調査していきたい。
- ・実践的な活動をみる項目である Q7、8 や 10、11 では比較的肯定的な評価の伸びが見られる。コロナで活動に制限がかかるなか、今年度は地域学習支援員を強化して、かつ児童の充実に取り組んだ成果が出たと言える。次年度に実践的な活動が本格化する場合にその伸びや、向上実感の要因が分析できるよう継続してみたい。
- ・生徒の活動はサービスマーケティングだけでなく、大学企画の活動、全体講演会など多岐にわたっており、生徒の向上実感の要因も多様になって来ていると思われる。そこで、向上実感がどのような活動に起因するものかなどの「向上実感因子調査」を行うと、さらに実体的な活動に即した分析が可能になると思われる。次年度はアンケート項目自体の改善・再検討が必要である。

《課題》

■今年度の学年・グループの活動全体に関して



- a. 例年は、ボランティア活動を経て課題を発見し解決策を検討するのだが、今年度はそのプロセスがおこなえなかった。
- b. インターネットを活用したり、ZOOM を活用したりして、事前調査を実施したが、それだけでは現場の実情を十分に知るには至らなかった。
- c. 来年度、まずは全グループが外部での活動（ボランティア活動や現場見学など）を実施できる状況になることを期待する。
- d. 来年度も思うように外部での活動ができない場合は、ZOOM を活用した活動や、現地を訪問しなくても実施可能な課題解決方法を検討する必要がある。

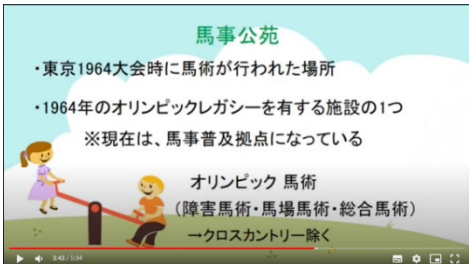

(5) 活動の詳細～2年生～


[全体]

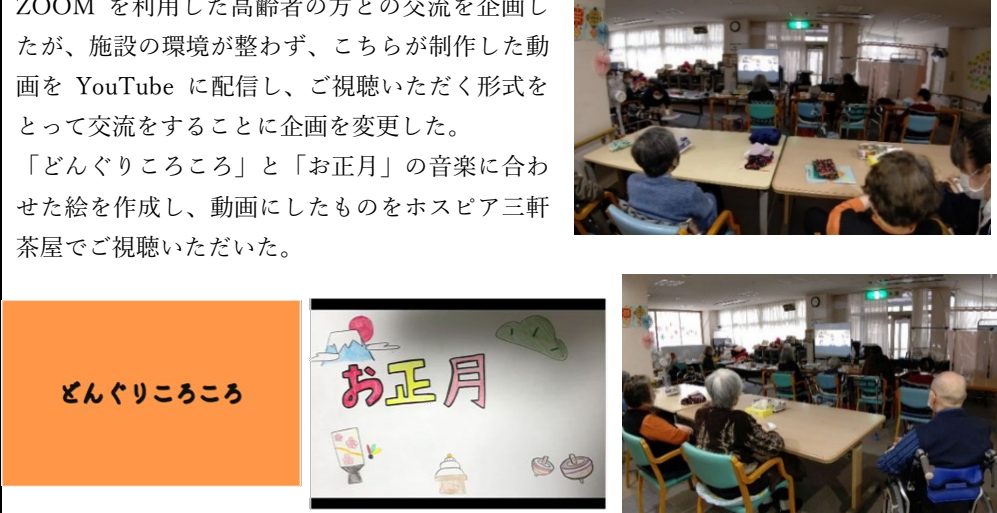
「協働的学習者育成プログラム」 全2回	
実施日時	2020年9月8日(火)、10月13日(火)
講師・場所	各教室
内容	<p>産業能率大学が提供する「協働的学習者育成プログラム - 情報共有編」と「協働的学習者育成プログラム - 合意形成編」を各2時間で実施した。</p> <p>情報共有編では、社会人に求められるコミュニケーション能力を身につけるために中高生は協働的学習者になることが期待され、協働的学習者になるために多様な価値観や背景を持つ人々と情報や考えを共有する力を身につける必要があることを学習した。そして、情報共有のケーススタディを通してグループ活動を実施した。合意形成編では、スライドの指示に従いながら合意形成のケーススタディのスキルを体験することができた。</p> <p>他者の意見を取り入れることや自分の意見を適切なタイミングで述べるのが大切であることを学ぶことができた。</p> <p>この2つのプログラムをサービ斯拉ーニングの導入時に実施、どのようにグループで探究活動を進めていくのかを考える機会とするべきであると思う。</p>




「『世田谷おもてなし・交流・参加プロジェクト』PRカード作成」 全1回	
実施日時	2021年2月9日(火)
講師・場所	各教室
内容	<p>「地域密着型おもてなし」をテーマにしてサービスラーニングを実施しているグループが、公益財団法人世田谷区産業振興公社が作成した「世田谷おもてなし・交流・参加プロジェクト」のPRカードについて、その内容やレイアウトに関して中高生の立場からの意見を伝えることにより、その内容がPRカードに反映された。</p> <p>完成したカードには本校が協力した旨が明記され、本校の全生徒にも配付された。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>


「世田谷区紹介動画」 全1回	
実施日時	2021年3月22日(月) (提供日)
講師・場所	学校、自宅
内容	<p>「地域密着型おもてなし」をテーマにしてサービスラーニングを実施しているグループが、東京オリンピック・パラリンピックと関連のある世田谷区の施設を紹介する動画を作成し、公益財団法人世田谷区産業振興公社に提供した。世田谷区はその動画をPRのために使用することを検討している。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>


「特記すべき活動」 手作りマスクを介護老人保健施設 ホスピア三軒茶屋に届ける	
実施日時	2020年7月30日
講師・場所	介護老人保健施設 ホスピア三軒茶屋
内容	<p>直接訪問するボランティアがコロナ禍で実施できず、自分たちに出来ることは何かを考え、当時不足していたマスクをグループメンバーと有志の2年生と協力して150枚製作し、寄贈した。</p> <p>施設の方に喜んでいただき、施設内の広報誌にも掲載された。</p>
	


童謡の動画を制作し、YouTubeに限定配信したものを ホスピア三軒茶屋の高齢者の方にご視聴していただく	
実施日時	2020年3月
講師・場所	介護老人保健施設 ホスピア三軒茶屋
内容	<p>ZOOMを利用した高齢者の方との交流を企画したが、施設的环境が整わず、こちらが制作した動画をYouTubeに配信し、ご視聴いただく形式をとって交流をすることに企画を変更した。</p> <p>「どんぐりころころ」と「お正月」の音楽に合わせた絵を作成し、動画にしたものをホスピア三軒茶屋でご視聴いただいた。</p>
	

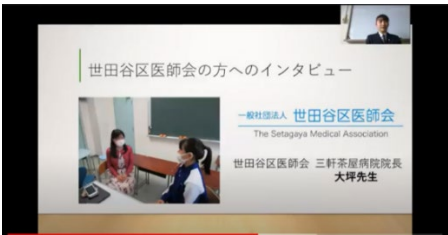
[保健医療グループ] 世田谷区のコロナ対策

世田谷区産業振興公社で世田谷区のコロナ対策についてお話を伺う	
実施日時	2020年10月27日
講師・場所	世田谷区産業振興公社 常務理事事務局 田中局長 観光課 まちなか観光係 恵見係長 観光課長地域活性化担当 生垣チーム長
内容	<p>公益財団法人世田谷区産業振興公社を訪問してお話しを伺い、PCR検査の世田谷モデルのことを調べるために医療機関の方々へのアプローチ方法や世田谷区の職員の方でPCR検査についてご担当している方をご紹介いただいた。</p> 

世田谷区役所でPCR検査の世田谷モデルについてお話を伺う	
実施日時	2020年11月17日
講師・場所	世田谷区保健福祉政策部保健医療福祉推進課推進係 計良亨係長
内容	<p>「世田谷モデル」について取り組みの概要や必要性や世田谷区の職員の方の現状についてお話を伺い、世田谷モデルで言われていた「いつでも・どこでも・何度でも」という検査方法ではなく、特定の職業に携わる方を対象とした社会的検査について理解すると共に、世田谷区の方や中高生に正しい情報を発信する必要性を知ることができた。また、今感染者やその家族に対しての偏見などがあり、検査を拒んでしまうこともあると伺ったので、その偏見がなくなるような取り組みの必要性も知った。</p> 

世田谷区のコロナ禍での医療についてお話を伺う	
実施日時	2020年11月19日
講師・場所	三軒茶屋病院・世田谷区医師会 大坪先生
内容	<p>PCR検査で行われている行政検査・社会的検査・医療検査の違いについて詳しく説明を伺った。また、コロナ禍で高校生が気を付けるポイントを教えていただいた。</p> 

医療施設のコロナ禍での対策についてお話を伺う	
実施日時	2020年12月15日
講師・場所	自衛隊中央病院 田畑先生
内容	<p>医療現場でのコロナ対策について、現在院内感染0の自衛隊中央病院の田畑医師からお話を伺い、具体的な予防策やコロナ患者を受け入れる時の感染予防対策についてお話を伺った。また、コロナ禍で高校生が気を付けるポイントを教えていただいた。</p> 

2021年 全国高等学校グローバル探究オンライン発表会	
実施日時	2021年1月30日
講師・場所	中高部校舎（オンライン開催）
内容	<p>「世田谷区のコロナ対策」についてスライドを用いて研究発表を動画で作成し、日本語発表部門にエントリーした。その後、1月30日に行われたオンライン発表会で他校の生徒と意見交換を行った。</p> 

(6) 検証・評価（成果と課題）～2年生～

《成果》

- a. 新型コロナウイルス感染症予防で活動の開拓が難しいなか、オンラインによる交流・発信など、この状況下でできることを自分たちの課題意識に基づいて臨機応変に進めることができた。
- b. 自分の設定したテーマに関わる地域の活動に積極的に働きかけようとする姿が見られた。

《課題》

- a. イベント企画や製作物の作成などを進めることができたが、その活動を改善し、より地域に効果的に発信する方法を考えたり、内容をより深めて再実施したりするところまで進めなかったグループが多かった。
- b. 活動のスタートが遅くなってしまったため、活動が計画通りに進まなかったグループがあった。医療などグループのテーマによっては、ボランティア活動が中止となり、ボランティア活動を通して探った課題を、高校生が解決するためのアクションを起こすというサービスラーニングの本来の活動が行えないグループも出てしまった。

6- コンソーシアム運営協議会議事録

6-1 2020年度第1回コンソーシアム運営協議会議事録

(1) 日時：令和3年1月25日(月) 16:00-17:00

(2) 開催方法：オンライン

(3) 出席者：運営指導委員

世田谷区副区長 岡田 篤
世田谷区産業振興公社 副理事長 小田桐 庸文
世田谷ボランティア協会理事・昭和女子大学特任教授 興梠 寛
世田谷区産業振興公社 事務局長 田中 茂
管理機関
学校法人昭和女子大学 理事長補佐 保坂邦夫
昭和女子大学附属昭和高等学校グローバル推進委員会メンバー
真下峯子、岡野内理恵、粕谷直彦、及川道子、勝間田秀紀、藤田有之、
卯城 大、瀬尾 淳、鈴木啓史、會川恵志、元吉正子、時田真由美

(4) 概要

① LABO 活動の目的・課題・成果：藤田有之教諭

LABO 活動とは、1年生と2年生から選抜された35名の生徒が4つのLABOに分かれて活動する課題解決プロジェクトである。外部機関からお招きしたアドバイザーにご指導いただき、問題解決力、コミュニケーション力、国際性、多面的な見方等を育成している。今年度はコロナ禍で海外研修が実施できなかったため、アドバイザーの先生方の講義を柱として各LABOが企業訪問やZOOMでの交流会等を進めてきた。また新たに、世田谷区の団体や組織等とかがかわる活動も取り入れた。以下は、今年度の具体的な活動内容、例年と異なった点(課題)、成果である。

《具体的な活動内容》

LABO全体：学園祭でグローバルプログラムの中間発表会(動画の生配信)を実施した。

LABO1：駒場東邦高校の生徒との交流会を実施した。

LABO2：“世田谷区立男女共同参画センターらぷらす”を訪問する予定だったが、緊急事態宣言発出のため実施できなかった。

LABO3：世田谷区の友成工芸を訪問した。2回目以降の訪問はコロナの影響で中止となった。

LABO4：国際NGO“プラン・インターナショナル・ジャパン三軒茶屋”の活動報告会を見学する予定だったが、コロナの影響でZOOMでの参加となった。

《例年と異なった点(課題)》

- a. フィールドワークが制限され、知識の習得が中心となった。
- b. 例年参加してきた研修会等に参加できず、培ってきたネットワークが途切れてしまった。
- c. オンラインでの活動が増え、新しく入った1年生が経験を積む場が制限された。
- d. 例年に比べて直接顔を合わせる機会が減り、2年生と1年生の関係構築が難しかった。

《成果》

- a. 長期休暇中に個人的にオンライン研修会や報告会に参加し、他の LABO メンバーと情報共有する動きがみられた。全体での活動が少なかった分、個々が積極的に動けるようになった。
- b. 2年生が、前年度の海外研修で得た知識を1年生に伝えた。宿泊の活動がなく関係が希薄な中でも、2年生がリーダーシップをとって1年生に教える姿が見られた。

② サービスラーニングの目的・課題・成果：粕谷直彦教頭

本校のサービスラーニングでは、1、2年生全員がボランティア活動を主体としたローカル活動に取り組んでいる。国際化を含む「多様性の理解」をベースとして、自分自身にできることを考え、行動できる自立した人材を育成したいと考えている。また、SDGs やユネスコスクール等、グローバルな視点でローカル活動に取り組む「グローバルの視点」も大切にしてきた。サービスラーニングは探究活動という位置づけでもあり、最終的には、生徒が地域の課題を解決するための提案をおこなうことを目標としている。「世の光となろう」という本校の建学の精神や、生徒の自己肯定感を高めることにもつながるような活動を目指してきた。

一方で、生徒が世田谷区のことをよく知らないために、ボランティアの活動場所の開拓が難しいという課題があった。そこで今年度は、コンソーシアムと管理機関との連携を強化し、世田谷区と協働することで、活動団体とのマッチング機能を充実させた。コンソーシアムと地域協働学習支援員の皆さまのご支援により、生徒は多くの世田谷区の方々に会い、アドバイスをいただくことができた。有用な情報をご提供いただき、コロナ禍でも様々な形で活動を継続できたという点で成果があったと思う。他にも、ローカル活動グループの定例連絡会を実施して校内と管理機関との情報共有を強化することで、活動が明確化・活性化したと考えている。

生徒の意識向上については、年度末の調査で数値が出る予定である。実感としては、自分にできることを考え、行動をおこす生徒が増えてきた。また、更にもう一步踏み込んだ活動をおこなう姿も見られ、生徒の変容に今年度の活動の成果を感じている。

③ サービスラーニング2年生の活動：鈴木啓史教諭（2年学年主任）

昨年からグループごとにボランティア活動に参加して課題を探してきた。今年度はコロナの影響で訪問活動が難しかったが、世田谷区のご協力により最善を尽くすことができた。現在、生徒たちは2月の成果発表の準備を進めている。以下、今年度の活動内容と生徒の変容である。

《各グループの活動内容》

前年度に世田谷区のスーパーパレード会議に参加した2グループは、パレードの延期後も産業振興公社の方々と連絡を取り合い、新たな活動を模索した結果、以下の活動を行っている。

○茶沢通り商店街の歴史・今・これからについて調べて動画を作成したグループ。

○世田谷区のオリンピック関連の施設を中心とした動画を作成したグループ。

どちらのグループも世田谷区のホームページでの動画公開について相談する予定である。

「世田谷区から学ぶコロナ禍での生活」というテーマで自衛隊中央病院・世田谷区三軒茶屋病院の先生、世田谷区保健福祉政策部保健医療福祉推進課の方に話を伺ったグループ。世田谷区のコロナ対策の現状や高校生が気をつけるべきことを学んだ。中高生向けの動画を発信する予定。

「めぐれ!世田谷の灯プロジェクト～世田谷ピースランタン～」の一環である「Futako Tamagawa Light It Blue Park」に参加したグループ。SOKS 通信（世田谷おもてなし・交流・参加実行委員会ニュースレター）に学校名を掲載していただいた。

ホスピア三軒茶屋に手作りマスクを届け、高齢者向けの動画を作成したグループ。現在、動画配信を目指して活動を進めている。

マクドナルドハウス世田谷の子供たちに届ける絵本を学内で収集しているグループ。

《生徒の変容》

この2年間の活動は生徒にとって大変有意義であった。特に、以下の3点で向上が見られた。

- a. 主体性…課題を考え、施設や団体に連絡を取り、実際にボランティア活動に参加した。
- b. 協働性…自分の考えだけでなく仲間の意見も聞き入れ、話し合うことでより良い計画をたてた。
- c. 柔軟性…この状況下でも ZOOM 等で連絡を取り合い、動画や発表資料を作成することができた。

④ サービスラーニング1年生の活動：瀬尾淳教諭（1年学年主任）

9月以降、5つの大テーマに基づいて生徒の興味・関心からグループを編成し、グループごとに具体的なテーマを設定した。今年度は、世田谷区役所、産業振興公社、地域協働支援員の方々の協力により、10月から1月にかけて講演会やヒアリング会を10回開催し、活動の手伝いや見学も4回実施することができた。生徒はご紹介いただいた場所に足を運び、次年度取り組む課題についての検討を進めている。

活動を始めてまだ半年程度だが、生徒は講演やヒアリングを通して社会には想像以上に様々な課題があるということに気づいたようである。また、外部の方と連絡をとるにあたり、相手に分かりやすく伝えるために考えを整理するというプロセスができるようになった。外部団体で作業の手伝いをした生徒は、団体の方から「助かったよ、ありがとう」という言葉をかけてもらい、「やってよかった」と実感している。この小さな体験が徐々に大きく広がっていくとよいと思う。

本来、もっと早い時期に外部の方と接触して実際に活動した上で、1～2月には次年度の方針が固まっているべきであるが、コロナの影響でどのグループも次年度の活動や課題については定まっていない状況である。例年の1年生に比べると、進捗が遅れていることは否めない。

一方でコンソーシアムの皆さまにご協力いただき、世田谷区の方々のお話を聞いて改めて知ることは非常に多く、生徒のみならず教員も共に勉強させていただいている。引き続き、生徒たちの活動について様々なご相談をさせていただきたいと思う。

なお、世田谷区生活文化政策部市民活動生涯現役まちづくり推進課から紹介のあったオリンピックボランティアには1年生の約60名が参加を希望している。実現が微妙な状況ではあるが、サービスラーニングとは別にこのようなボランティアにも参加したいという声が上がっている。

今年は活動開始が遅れたが、コンソーシアムの仕組みを変えたことでスムーズなご支援をいただき予想以上の活動ができた。この経験を活かして次年度もより良い活動にしたい。

⑤ 来年度以降の取り組みの観点と予定：勝間田秀紀教諭（グローバル推進委員長）

課題として、生徒が世田谷区についてよく知らないためボランティアのマッチングが難しいという点があったが、今年度はコンソーシアムから地域協働学習支援員となる人材をご紹介いただき、生徒の希望にそった活動を進めることができた。次年度の取り組みは以下の通り検討している。

◆地域のニーズを取り入れたテーマ設定

より良い実践を地域に還元するために、世田谷区のニーズを取り入れ協働で進められる活動にしたい。現在は大テーマを本校が独自に設定しているが、世田谷産業振興公社や世田谷ボランティア協会が得意とする内容や、若者の手を必要とする課題を取り込みたいと考えている。大テーマを世田谷区に密着させることで、学校と地域が双方向で連携しやすい仕組みを作っていきたい。現在設定している大テーマ（1.地域活性・街づくり 2.福祉・共生 3.子ども教育 4.多文化共生・グローバル 5.その他（生物・環境、保健医療・食品など））の他にご提案をいただき、集約して生徒に提示したいと考えている。4月までに次年度の大テーマを設定できるよう進めたい。

◆世田谷区への理解を深める生徒企画ツアーの実施

生徒が世田谷区についてしっかりと知ることが重要なので、課題発見のフィールドワークを実施したいと考えている。1年生のサービスマーケティングがスタートする前に、地域リサーチの形で地域の魅力や課題を発見・発信する活動を行いたい。その際には、関心のある分野やテーマに基づいて、生徒自身がアポイントメントをとる形で進めたいと考えている。世田谷区の取り組み、隠れた魅力、若者に知ってもらいたい問題等の情報を生徒に提供していきたいので、情報広報誌等の情報ソースがあったら是非ご教示いただきたい。

(5) 指導・講評

●保坂理事長補佐（管理機関）

世田谷区産業振興公社からご紹介いただいた地域の方々に講義をしていただき、見学させていただいたことが活動を有効にした。今年度はボランティアを実施することができなかったので、コロナが落ち着いたら興梠先生にご協力いただき実践していきたい。高校の中だけで外部のニーズや課題を探すのは難しく、地域の方々にご協力いただいたおかげで今年度の活動は大変充実した。先ほど、勝間田グローバル推進委員長からも協働活動で結果を目指すという話があったが、文科省の指定が来年で終わってからも探究の授業は続くので、お互いの絆を深めておきたい。尚、生徒たちが世田谷について知らないということに気づいたのは大きかった。都市型地域の実態や課題について知る機会を与えていただきたいと考えている。

●興梠寛特任教授（昭和女子大学）

私が担当する LABO 4 では、海外研修で毎年通っていたタイの山岳少数民族の元に今年に行くことができず、オンラインによる交流会の段取りを生徒に任せた。結果的には通信環境の関係でオンライン交流会は実現しなかったが、生徒自身が考えて現地の NGO の方と連絡を取りながら進めたことは非常に大

きな経験となった。LABO 活動では、タイの山岳民族の問題を足元の問題につなげることに苦心したが、難民問題に落とし込み、日本における課題を意識しながら研究することができた。

ボランティアについては、是非、昭和女子大学のサービ斯拉ーニングコミュニティセンターを活用していただきたい。世田谷地域のボランティアニーズ等の情報が集まり、学生ボランティアコーディネーターもたくさんいるので、生徒が相談に来ればサポートできる。

世田谷区の特異性とは何か。1981年にボランティア協会を設立してから、チャイルドラインやプレーパーク等、今では全国に広がっている様々なプログラムが、活動のプロセスの中で生まれた。そのような仕組みのひとつで、次年度のテーマに是非加えてほしいのが、市民参加型の災害ボランティアのシステムである。国・行政の災害ボランティアセンターを市民参加型で作し、世田谷区と災害ボランティアセンター、区内5つの行政地域ごとの大学（昭和女子大学、国土舘大学、日本体育大学、日大商学部、日本女子体育大学）とが協定を結び、全国のどこにもない災害に負けない街づくりをおこなっている。災害時には各キャンパスにいる学生たちがコーディネーターとなり、区内の町会、自治会と大学をつないで活動する。この仕組みは世田谷区にしかない。区議会で決議されて、区のシステムになっている。高校生も参加できる災害ボランティアコーディネーターの研修会もおこなっており、テキストやマニュアルも世田谷ボランティアセンターに整備してある。世田谷区内の様々な拠点が一緒になって良い勉強ができると思うので、テーマやコースに入れると良いのではないかと考えている。

また世田谷区では、プレーパーク、チャイルドライン、子ども食堂等、子どもへのサポートが盛んである。遊び場の問題や心を受け止めること等、「子ども」をテーマにいろいろな課題やコースの設定ができると考えている。

●岡田篤運営指導委員（世田谷区副区長）

私は世田谷区で文化や経済産業、及びハードな街づくりを主に担当しているが、世田谷区は特に地域で活動する団体や個人が多い。「地域行政」を目指してきたので活動団体が育つ土壌があり、厚い層ができたと考えられる。サービ斯拉ーニングの活動状況を見ると、協力団体には知人も多く、この方たちと生徒が交流しているということは非常によいことだと思う。

「グローバル」という考え方やサービ斯拉ーニングの活動も素晴らしいと思う。地域との連携のひとつとして、次年度以降の活動予定に世田谷区への生徒の理解を深めるという取り組みがあったが、まさに産業振興公社は世田谷の魅力を発信している場所でもある。様々な団体とのつながりがあり人間関係を構築しているので利用していただきたい。世田谷区の魅力についてもたくさん紹介できると思う。

いずれにしても、生徒たちが地域のことを知ってくれるというのは素晴らしいことであり、これからの人生を考えていく上でも糧になるであろうと考える。その一方で、生徒と関わる団体・行政にとっても刺激になると思うので、先ほどの話にもあったが、是非お互いの共同で進めていきたい。世田谷区には多くの大学があり、とくに昭和女子大学には地域に目を向けていただいているので、これからも良い関係を続けていきたいと考えている。

●小田桐庸文運営指導委員（世田谷区産業振興公社副理事長）

SDGs を中心として、もっと多くの団体や活動を紹介できたのではないかという思いがある。来年度も引き続き協力ができれば光栄に思う。

今回、課題やテーマを区民の方と共有するという話があったが、区民との対話の方法を考える必要がある。90 万人の区民がいれば 90 万の課題・意見があるといっても大げさではない。対象と時期とテーマをうまく絞らないと、生徒が悩んでしまうのではないだろうか。運営の仕方をご相談させていただき、公社としても区民の方との対話の場でお手伝いしたいと思う。

興梠先生からお話のあった「子ども」という視点だが、高校生だからこそ提案できるテーマがあると思う。大人とは違う高校生ならではの視点で、研究・提案していただきたい。加えて、中高生たちがその課題に対してどう感じているのかということも参考になる。実はこの世代の方々の声を聴くのが一番難しく、同世代の高校生だからこそ、それができるのではないかと期待している。

今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大という事態に直面して苦労されたと思うが、対応に苦労したということ自体が若い高校生にとっては良い経験だったのではないだろうか。状況によっては計画していたことが頓挫し、中止となることもある。それを学んだことは、今後、予期せぬ事態が起きたときに対処するための参考になると思う。

最後に、今年の結果や成果を来年度以降も引き継いでいけるような仕組みがあると、時系列に積み重ねられた良い活動や研究になるのではないかと期待している。

●田中茂運営指導委員（世田谷区産業振興公社事務局長）

まず感心したのは、先生と生徒との関係が管理的ではなく建設的だということである。例えば、昨年のスーパーパレードの企画会議で趣旨を説明した際の生徒の感想は「つまらない」というものであった。そこで、どのようなパレードなら参加したいのか意見を聞き、新たに組み立て直した結果、生徒もスーパーパレードに興味をもつようになり、建設的な関係を構築することができた。

また、講義を担当した世田谷区や商店街の担当者も変わった。最初は緊張して何を話したらよいのかわからないという反応が多かったが、終了後にはみんな爽やかな面持ちになっていた。普段、役所の方はステークホルダーに対して講演することが多い。しかし今回は、一般の高校生に話して興味を持ってもらわなければいけないというストレスや圧力があり、それを乗り越えられたことは非常に良かったと思う。講演者も新鮮な目で自分を見つめなおしたという副次的効果があった。その意味では、新鮮さをどのように保っていくかということも考えなければいけない。

なお、地域のニーズをくみ取るという話はとてもありがたいが、地域のニーズに対して行政としてやるべきことや課題解決の方法があり、それと一緒にしてしまうのはもったいないと思う。同じテーマであっても、高校生には違う形の切り込み方をしていただきたい。

「つまらない」と生徒に言われたことでスーパーパレードは変化し、世田谷区の担当部長も、高校生に分かるような講義をおこなう中で変わっていった。以前、「せたがや子育てコンパス」という母親向けの雑誌を作ったことがあるが、昭和女子大学の学生 10～15 名から意見をもらい、それを反映する

ことで全く違う誌面に変わったこともある。

つまり、新しい形で高校と地域との関係を構築していけば良いのだと考える。今回の前向きな姿勢については感謝しているし、素晴らしいと思っている。

(6) 校長挨拶：真下峯子校長

昨日(1/24)付の日本経済新聞に、SDGs 先進度で世田谷区が全国 815 市区中 13 位という記事が出ており、世田谷区は SDGs についてもかなり先進的に取り組んでいるのだということを確認した。本日も意見をいただいたように、生徒の視点で切り込むことができればテーマ設定の幅も広がっていくと思う。今回お話を伺うことで、学校の中だけで考えていてもすっきりしないことが拓けてくる気がした。本当にありがとうございました。引き続きどうぞよろしく願います。

(7) 閉会の言葉：勝間田秀紀教諭（グローバル推進委員長）

本日頂戴したご意見については、是非今後検討していきたい。

高校生ならではの視点で切り込んでいくためには、情報が必要だと実感している。特に世田谷区は活動が多岐にわたっているので、上手にマッチングできれば、生徒は必ず自分の興味のあるテーマや課題を見つけることができると思う。

高校生の学習は抽象的・概念的な内容が増えるが、その中で、現実社会や自分の将来とつながっていると実感できる地域活動の経験は非常に大切だと考えている。困っている人に触れ、何とかしたいと思う経験が、生徒の世界観を広げるはずである。

本年度はコロナ禍で大変なこともあったが、その中でも活動ができるようにと地域の皆さまには細やかなご支援をいただいた。2 月には ZOOM による成果発表会等も開催させていただいたので是非ご覧いただきたい。より充実した、地域のためになるような活動ができるよう努力していくので、引き続きご助言、ご支援を賜りますようお願いいたします。本日はお忙しい中、ありがとうございました。

以上

7 - 今年度の成果と課題

7-1 目標の進捗状況・成果

目標 1 = いま世田谷区が直面する課題に敏感になり社会的・倫理的責任感、人間性を育成し、コミュニティと積極的に関わろうとする人材を育成する。

地域での活動は一時停滞したものの、地域協働学習実施支援員の協力により、地域課題把握のための活動や地域で可能なボランティアの実施は進みだしている。支援員の協力によって地域の人材の掘り起こしも進み、何らかの実践を通じて区内の団体・企業と関わることができ地域の方から話を伺う機会を確保することができた。

目標 2 = 人材育成を行う探究活動プログラムを体系的に構築し、論理的に物事を考える能力を育成する。

研究手法の習得をねらいとする AST（アカデミックスキルトレーニング）を 1 年次に実施。今年度は地域に出られず校内で活動できる時間が確保できたため、スキル育成のオンライン講演や、探究学習への意識づけのための「主体的学習者育成プログラム」、地域との協働意識を育む「協働的学習者育成プログラム）を実施した。

今年度は中高 6 年間での段階的な資質・能力開発のための探究プログラムを体系的に進めることができた。SDGs に関わる取組みを進めたり、「総合で開発したいスキル・行動目標」を策定するなどして、中学と高校の間でスキル・内容両分野での系統性を高められるようにカリキュラムの策定を進めている。今後はポートフォリオによる生徒の学びの把握とスキル・行動目標による自己評価を継続的に活用し、本校の目指す生徒像を総合的・体系的に育成できるかの評価面に力を入れたい。

目標 3 = グローバルな取り組みと地域探究など諸活動をクロス化させることによって探究活動の質の高度化をはかり、総合的な学ぶ力を育成する。

SDGs や探究スキル開発を軸として進める探究活動と各教科との内容・方法を横断する授業の開発は、目標 2 とも関わるが、昨年度作成した社会科の「SDGs 開発教育実践集」をもとに、中学でも実施して中高の活動のクロス化を継続して進めている。

LABO 研究では今年度コンソーシアムと連携して世田谷区内での提言や実践、企業・団体訪問などを進めることができた。LABO2 では活動の成果物（ジェンダーかるた）を業者に発注し、区内公立小学校等に普及させる活動を進めた。

目標 4 = 生徒の中に、地域のためにより有益な行動をしようとする意識を涵養していくために、恒常的な産官学連携・地域連携コンソーシアムを形成する。

サービ斯拉ーニングでは、地域協働学習実施支援員の強化によって、コロナ禍であってもボランティア活動や地域での活動を世田谷区内で実施することができた。1 年では後期からの活動となったがグループ内のほ

とんどが、何らかの実践を通じて区内の団体・企業と関わることができた。地域の方から話を伺う機会は、オンラインも含めるとその回数は増加した。

昨年度から続いている世田谷区、世田谷区産業振興公社などの支援で始まった大型プロジェクト（しもきた商店街、世田谷区おもてなし実行委員会など）は、継続して進めている。東京オリ・パラに関わるイベントは延期となったが、生徒が独自の活動を企画するなど、生徒から発信して、活動を継続させている。

7-2 コンソーシアムの構築

(1) コーディネーターとコンソーシアムの連携強化

学校の活動を一方的にお願いする形ではなく、地域と学校の共同関係を構築できることが、地域協働学習の進展に繋がると考え、今年度はコンソーシアムと学校との結びつき、地域と学校の連携体制を再定義した。地域協働学習コーディネーターと管理機関との結びつきを強化し、コーディネーター・管理機関を軸にコンソーシアムの役割分担を明確化した。

その結果、地域協働学習実施支援員をグループテーマごとに依頼し、より専門的な人材かつ生徒の要望に沿った人材に依頼することができた。1年では後期からの活動となったが、コロナ禍であってもグループ内のほとんどが、何らかの実践を通じて区内の団体・企業と関わることができたのは、支援員の専門的な支援によるところが大きい。生徒だけでは難しい、地域課題把握のための活動開拓や地域の人材・団体の掘り起こしが、支援員の専門的な支援によりスムーズに進めることができた。

(2) 高大連携の取組み

今年度は管理機関である昭和女子大学が企画主体となって主催する高校生向けプログラムを企画・実施することができた。本校からの参加生徒数は、151名で、自由参加、オンラインであったものの、多くの生徒が参加していた。また、全国の高校生にも呼びかけを行い、国境なき医師団の活動に興味のある高校生が多数参加したことで、そうした生徒と交流を持ったことが本校の生徒にも刺激となっていた。

現在、併設大学や併設機関（ブリティッシュスクールなど）と交流するプログラムはいくつかあるが、次年度はこれを体系化し、大学の授業、大学の施設などを高校生向けに開放するなど生徒の活動に資する高大連携を深めていきたい。

7-3 次年度への課題・改善点

(1) 世田谷区が直面する課題に積極的に関わろうとする人材を育成

サービラーニングを行う生徒が設定する課題に深みや地域性が見られないケースがある。これは隣の区や県から通学している生徒が多く、地元意識が薄いことが原因と考えられる。この地元意識を生徒の中にどのように形成し、地域の課題を自分事化させていくかを次年度の課題とする。

特に、コンソーシアムの人材開拓力を生かし、生徒の活動と地域人材とのマッチングをはかり、生徒の地域

意識の醸成、ローカルへの志向性をさらに進めたい。今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、座学が中心となったが、次年度はコンソーシアムを活用し、1年生の段階で、世田谷区の課題を知る地域ツアーなどを実施し、世田谷区への理解や意識を促進させる活動を充実させたい。生徒と地域との間で活動をマッチングさせる機能充実も今年度に引き続き進めていき、地域の関係団体との連携の緊密化を図りたい。また、事業指定終了後を見据えて、地域とのつながりやコンソーシアムを恒常的な機関として用いていく基礎づくりを進める。

(2) 3年生の活動のスタートと6年間の系統的なカリキュラムの確立

次年度は3年次の活動を本格的に実施する段階となる。活動からの学びを自己の進路や将来に結び付けていき、自らのキャリアデザインや進路決定に活かしていくことができるような教材開発を、進路指導部との連携のもとで進める。ポートフォリオによる生徒の学びの把握とスキル指標・行動目標の指標を用いた自己評価を継続的に活用し、生徒の学びが一過性のものにならないように工夫しながら、中高6年間を通して本校で育みたい生徒像を総合的・体系的に育成するプログラムを構築・運用する。

また、SDGsを軸とした教科横断的な授業の開発により、探究と教科とのクロス化を深める実践を行う。

(3) 高大連携の充実化

併設大学がある環境を生かして、高大連携による取組み、企画をさらに充実させていく。今年度企画したような、大学企画による高校生向けのイベントや大学教員による高校生向けの授業などを実施する。また、大学のサービ斯拉ーニング専門施設(コミュニティサービ斯拉ーニングセンター)を高校生向けに開放し、活動先の開拓に役立てる。

また、現在行っている種々の高大連携事業についても、本事業で育成したい生徒像につながるものは体系化していきたい。

(4) 評価の仕組みを強化

現在生徒の自己評価を前期後期で実施しているが、活動が多様化していることもあって、評価が必ずしも当該活動の効果なのかをしっかりと測れていない点が課題として存在する。6年間の生徒の変容をしっかりと把握していくために、次年度は評価面を強化していきたい。自己評価・他者評価をそれぞれ充実させ、本校で育成したい資質能力が探究活動でどのように向上しているかを検討し、活動の改善につなげたい。自己評価は6つのスキル・5つのマインドターゲット(行動目標)を設定し、自己評価を前期の活動前と活動後、後期の活動後に行い、各指標における生徒の変容を細かく把握する。

また各指標については、その向上の実感度調査とその要因となる活動を調査し、プログラム等の改善に使用できるようにする。

各スキル・ターゲットのリフレクションを生徒が文章でまとめるようにして自己の学びや成長を自らの言葉で意識できるようにしていきたい。毎時間の探究活動の最後には自らの学びをポートフォリオにまとめ、蓄積するようにする。この振り返りはGoogle classroomなどを活用して、中学から6年間蓄積して振

り返られるようにし、生徒自身の成長実感につなげる。

他者評価は、サービslラーニング、LABO 等でこれまで実施してきた探究成果発表会を年度末に開催することで行う。これまでグローバル事業で形成してきた地域コンソーシアムに関連する団体をお招きして、生徒のパフォーマンス評価、内容評価をいただく。探究成果発表会の内容は冊子にして、関係団体や近隣校に配布するとともにホームページでも公表し普及に努めたい。

令和元年度指定 地域との協働による高等学校教育改革推進事業
(グローバル型) 生徒課題研究成果資料集・第2年次

発 行	令和3年3月
発 行 者	昭和女子大学附属昭和高等学校
編 集	地域協働推進委員会
住 所	〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1丁目7番地57
電 話	03(3411)5115
F A X	03(3411)5532

